松浦市文化財調査報告書 第10集

田原遺跡

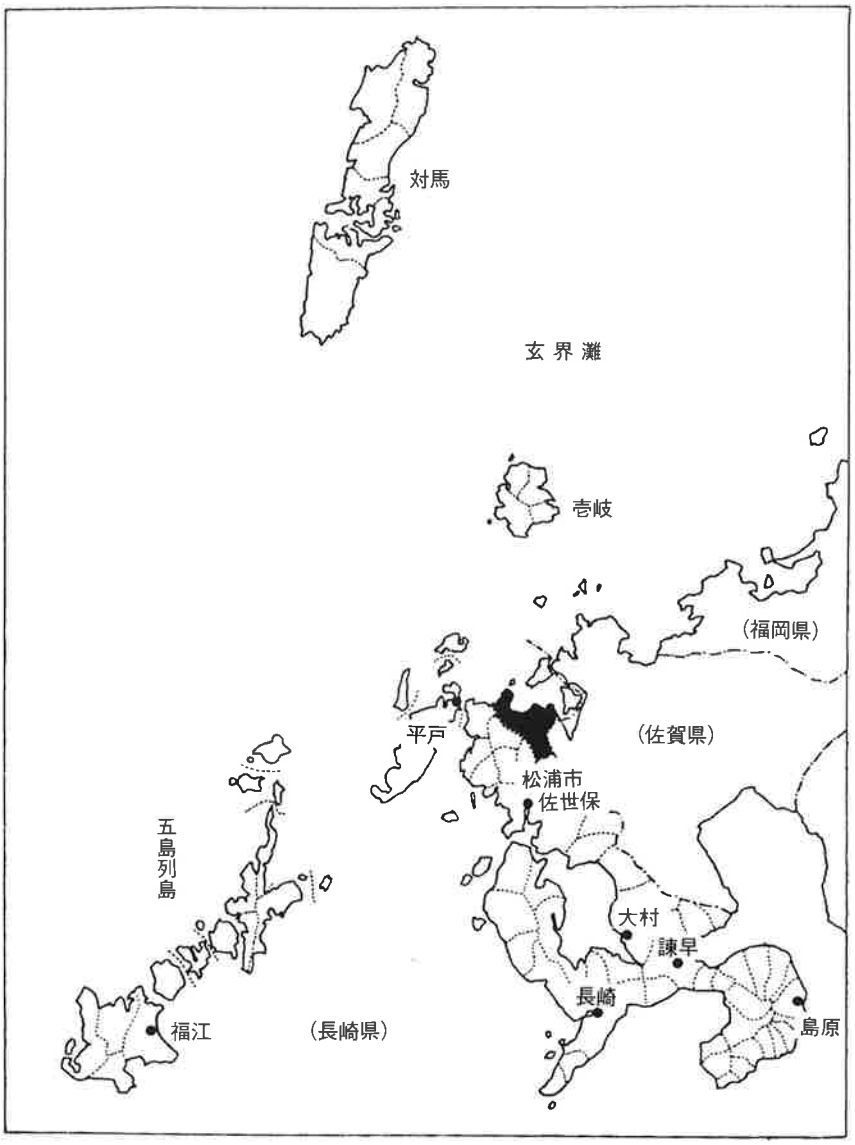
竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書 第10集

田　原　遺　跡



長崎県松浦市教育委員会

発刊にあたって

わたしたちの住む松浦市は，青い海と緑の大地に囲まれた環境にあり，美しい自然に恵まれています。原始・古代より人びとが住みつき，豊かな生活を営んできました。また，古くから大陸との交流をうかがわせる遺跡も数多く知られています。なかでも舶載の青銅鏡が出土した栢ノ木遺跡，中国・朝鮮半島産の陶磁器が数多く出土した楼楷田遺跡などは，その代表的なものといえましょう。このように，松浦市には貴重な文化財が数多く残されています。

文化財行政の当面する重要な課題の一つに埋蔵文化財の保護対策があげられます。近時，必然的に産業経済の発展に伴い宅地造成や各種の開発事業が相次いでいます。開発事業は規模の大小にかかわらず遺跡破壊の問題を含んでおり，当教育委員会においても以上の事情を勘案して，やむをえず保存できない埋蔵文化財については事前の発掘調査を行って，出来るだけ正確な記録保存につとめているところであります。

今回の報告書は竜尾川地区県営圃場整備事業に伴い，松浦市御厨町田原免・相坂免一帯についての埋蔵文化財の発掘調査についてまとめたものであります。報告書の内容にみられるように，旧石器時代から古墳時代にいたる複合遺跡であることも確認され，多くの成果を得ることができました。

本調査にあたっては，長崎県文化課の先生方並びに地元作業員の方のほか，多くの人達の御指導，御協力，御理解によるものであり，ここに心から深く感謝を申し上げます。

本調査のまとめが，今後の文化財保護・活用の一助となれば幸いです。

平成３年３月　　松浦市教育委員会

教育長　呼子俊一

例　　言

1．本書は，平成２年度竜尾川地区県営圃場整備事業に伴って実施した田原遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2．本遺跡は，長崎県御厨町田原免字田原他に所在するもので，その小字名をとって田原遺跡とする。なお，平成元年度に範囲確認調査を行った田原積石塚も同じ範囲に含まれる。
3．調査は，松浦市教育委員会が長崎県県北振興局と委託契約を結び事業主体となり，発掘調査は長崎県教育委員会文化課の指導を受けて，松浦市教育委員会社会教育課で実施し，社会教育主事中田敦之があたった。
4．遺構の実測・遺物実測は中田があたった。
5．遺構・遺物の撮影は，中田があたった。
6．本遺跡出土の人骨の取上げ及び分析は，長崎大学医学部佐伯和信氏ほかにお願いし，玉稿を賜った。
7．本書の執筆・編集は中田があたった。
8．調査によって出土した遺物は，松浦市教育委員会が保管の任にあたっている。
9．本書は，松浦市文化財調査報告書第10集にあたる。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1．発掘調査に至る経過…… 1
　2．調査関係者…… 2
Ⅱ　地理的・歴史的環境…… 3
　1．地理的環境…… 3
　2．歴史的環境…… 5
Ⅲ　遺跡の調査…… 15
　1．調査の概要…… 15
　2．層序…… 17
　3．検出遺構…… 20
　4．出土遺物…… 21
Ⅳ　長崎県松浦市田原遺跡出土の近世人骨…… 37
Ⅴ　おわりに…… 50

挿　図　目　次

第１図　松浦市地質図 …… 4
第２図　松浦市遺跡地図 …… 9～10
第３図　平成元年度調査区設定図 …… 14
第４図　調査区周辺図 …… 15
第５図　Ａ地点調査区設定図 …… 16
第６図　Ａ５区南壁及び柱穴実測図 …… 17
第７図　土層状況 …… 18
第８図　Ａ地点柱穴実測図 …… 19
第９図　Ａ地点柱穴実測図 …… 20
第10図　近世土壙墓実測図 …… 20
第11図　遺物出土状況 …… 22
第12図　遺物出土状況 …… 23
第13図　出土遺物 …… 24
第14図　出土遺物 …… 25
第15図　出土遺物 …… 27
第16図　出土遺物 …… 28
第17図　出土遺物 …… 29
第18図　出土遺物 …… 31
第19図　出土遺物 …… 32
第20図　出土遺物 …… 33
第21図　出土遺物 …… 34
第22図　出土遺物 …… 34

表　目　次

表１　松浦市遺跡一覧表 …… 11
表２　松浦市遺跡一覧表 …… 12
表３　遺物計測表 …… 25

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景（北より）　遺跡遠景（東より）…… 53
図版２　Ａ５区南壁土層　Ｂ９区西壁土層 …… 54
図版３　Ｂ９区南壁土層　Ｂ９区北東壁土層 …… 55
図版４　Ｃ４区東壁土層　Ｃ４区北壁土層 …… 56
図版５　Ｃ７区東壁土層　Ｂ地点南壁土層 …… 57
図版６　柱穴検出状況（Ｂ・Ｃ８区）　柱穴及び不明土壙（Ｃ５区）…… 58
図版７　近世墓検出状況（東より）　近世墓検出状況（東より）…… 59
図版８　近世墓土壙（東より）　近世墓調査風景 …… 60
図版９　遺物出土状況　調査風景 …… 61
図版10　出土遺物（１）…… 62
図版11　出土遺物（２）…… 63
図版12　出土遺物（３）…… 64
図版13　出土遺物（４）…… 65
図版14　出土遺物（５）…… 66
図版15　出土遺物（６）…… 67
図版16　出土遺物（７）…… 68
図版17　出土遺物（８）…… 69
図版18　田原人骨（１）…… 70
図版19　田原人骨（２）…… 71

Ⅰ　はじめに

1．発掘調査に至る経過

長崎県松浦市では，昭和57年頃より大型の開発事業が始まり，それに伴う埋蔵文化財の発掘も相次いでいる。昭和57年～同59年にわたり，松浦火力発電所建設に伴って楼楷田遺跡の発掘調査が長崎県教育委員会と市教育委員会により行われており，旧石器時代から縄文時代及び中世の複合遺跡であることが確認されている。昭和61年～同63年には志佐川地区県営圃場整備事業に伴って宮ノ下リ遺跡の確認調査及び発掘調査が行われており，Ａ～Ｅの５遺跡の存在が確認されている。このうちＡ遺跡は設計変更が不可能な用排水路掘削部分について緊急発掘調査を実施している。

その後、県営圃場整備事業は市西部を北流する竜尾川地区でも計画され，昭和61年に長崎県県北振興局を通じて松浦市教育委員会に協議の申し入れがあっている。圃場整備地区内には当初より長崎県遺跡地図52－47寺ノ尾Ｃ遺跡と52－45田川遺跡の２つが周知されており，当教育委員会では他に遺跡が存在していないか流域の分布調査を行った。その結果，田原免田原で田原積石塚を２基確認したので，県北振興局及び松浦市農林課と教育委員会と協議を重ねた。そして，遺跡の現状保存を行いながら，工法，事業費等との兼ね合いのなかで最少面積にとどめた発掘調査を実施することで快諾を得，これを基本方針として平成元年度より遺跡の範囲確認調査を実施することに決定した。調査に際しては，調査経費は文化財サイドで負担の責を担うものとして，教育委員会では国庫補助事業及び県費補助事業として，寺ノ尾Ｃ遺跡と田原積石塚（田原遺跡と名称変更）の調査を行った。その結果，寺ノ尾Ｃ遺跡では３地点で旧石器時代から弥生時代にかけての良好な包合層を確認することができた。また，田原積石塚では確認した２基の積石塚とも自然石を不規則に積み上げただけのもので，一般にいう古墳時代の積石塚ではなかったが，周辺の調査で２地点において弥生時代から古墳時代にかけての包合層及び柱穴を検出することができ，その旨報告を行っていた。

平成２年度は先の田原積石塚（以下田原遺跡という）の調査で２地点において遺跡が分布していたので，この地点についての保存について数度にわたる協議を県北振興局・農林課・教育委員会とで行った。その結果，遺跡の一部を除き盛土による設計変更にて回避することで合意がなされ，設計変更が不可避な335㎡について本調査による記録保存措置を講ずることに決定した。その後，県北振興局より当教育委員会へ文化財保護法第57条の３第１項にもとづく発掘の通知が提出された。発掘調査に際しては，７月に県北振興局と松浦市との間で委託契約を取り交わした。調査の経費負担の問題は，農林省構造改善局長と文化庁長官との間で取り交わされた「文化財保護法の一部改正に関する覚書」を適用し，農家負担分については，松浦市で予算化し，残りの分は県北振興局に負担をお願いした。発掘調査に従事した期間は平成２年８

月27日から10月13日までである。

2．調査関係者

田原遺跡緊急発掘調査における発掘調査及び整理業務に従事した組織の構成は以下に記すとおりである。

調査主体　松浦市教育委員会

調査担当　同　社会教育課指導係

総括　教育長　呼子俊一

教育次長　松尾公平

社会教育課長　石本利明

庶務　同次長兼指導係長　網本利光

調査　同社会教育主事　中田敦之

調査協力者　長崎県教育委員会，長崎県県北振興局，松浦市農林課，竜尾川地区土地改良区，土地所有者（松本幸，北浦亀良），金納建設

調査作業員　松永セツエ，天久保正子，中川サエ子，池渕かよ子，岡村ヒサノ，小浦良子，白石チノ，村田政子，山口サエ，辻元エン，小倉ハツエ，知念初子，横山泉，知念盛良，立石とよ子

内野義（奈良大学），松瀬竹男（久留米大学）

遺物整理等　長由美，江口鈴子，福田亮子，川畑絵美

整理協力　内野　義（奈良大学）

発掘調査を実施するにあたり，また，報告をまとめるにあたって，温かい御理解，御協力をいただきました長崎県県北振興局・竜尾川地区土地改良区の関係各位におきましては，この場を借りまして厚く御礼申し上げる次第であります。

Ⅱ　地理的・歴史的環境

1．地理的環境

田原遺跡は，長崎県松浦市御厨（みくりや）町田原免（たばるめん）字田原，相坂（あいさか）免北平（きたびら）にまたがってあり，市の中心部から西方約6㎞の地点に位置している。

松浦市は，長崎県本土の北端に位置し，北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島などのいくつかの島々から構成されている。北には伊万里湾・玄界灘，西から南にかけては北松浦郡の田平・江迎・吉井・世知原の各町と，東には佐賀県伊万里市がある。市の面積は95.34㎢である。人口24,673人。

市内の地質は第三紀層を基盤として，その上に玄武岩が広く堆積している。この玄武岩は北松浦半島を中心に西北九州に広く分布する松浦玄武岩と称されるもので，典型的な溶岩台地を形成している。かつては佐賀県伊万里市南方を中心とした国見山系より噴出した火山であったという。したがって県境を占拠する標高777ｍの国見山を主峰として，北および西に高度を減じている。市の南側には400ｍ～500ｍ級の高位台地があり，悪太郎川以西では100ｍ以下の低位台地が広がり，星鹿半島の先端の津崎鼻，西木場地区の波津崎には玄武岩柱状節理の海食崖が発達している。海岸線は比較的出入りが多く，北西からの風波をさけることのできる御厨港，星鹿港などの天然の良港がある。志佐町大浜には県内でも珍しい砂丘がみられるが，近年の人工造成で海岸線の変貌が進んでいる。

市内でまとまった平地といえるのは，志佐川・竜尾川・坂瀬川・調川川・今福川などの川沿いにみられる平野だけで，志佐川を除くといずれも短く，急流である。その水源となっている所は，玄武岩台地の侵食谷や玄武岩と第三紀層との地質境界などである。この地質境界には湧水を利用した溜池が多く，遺跡が立地していることが多い。土地利用でも，第三紀層は水田が多いのに対して，玄武岩台地は畑や山林が多い特徴を示す。

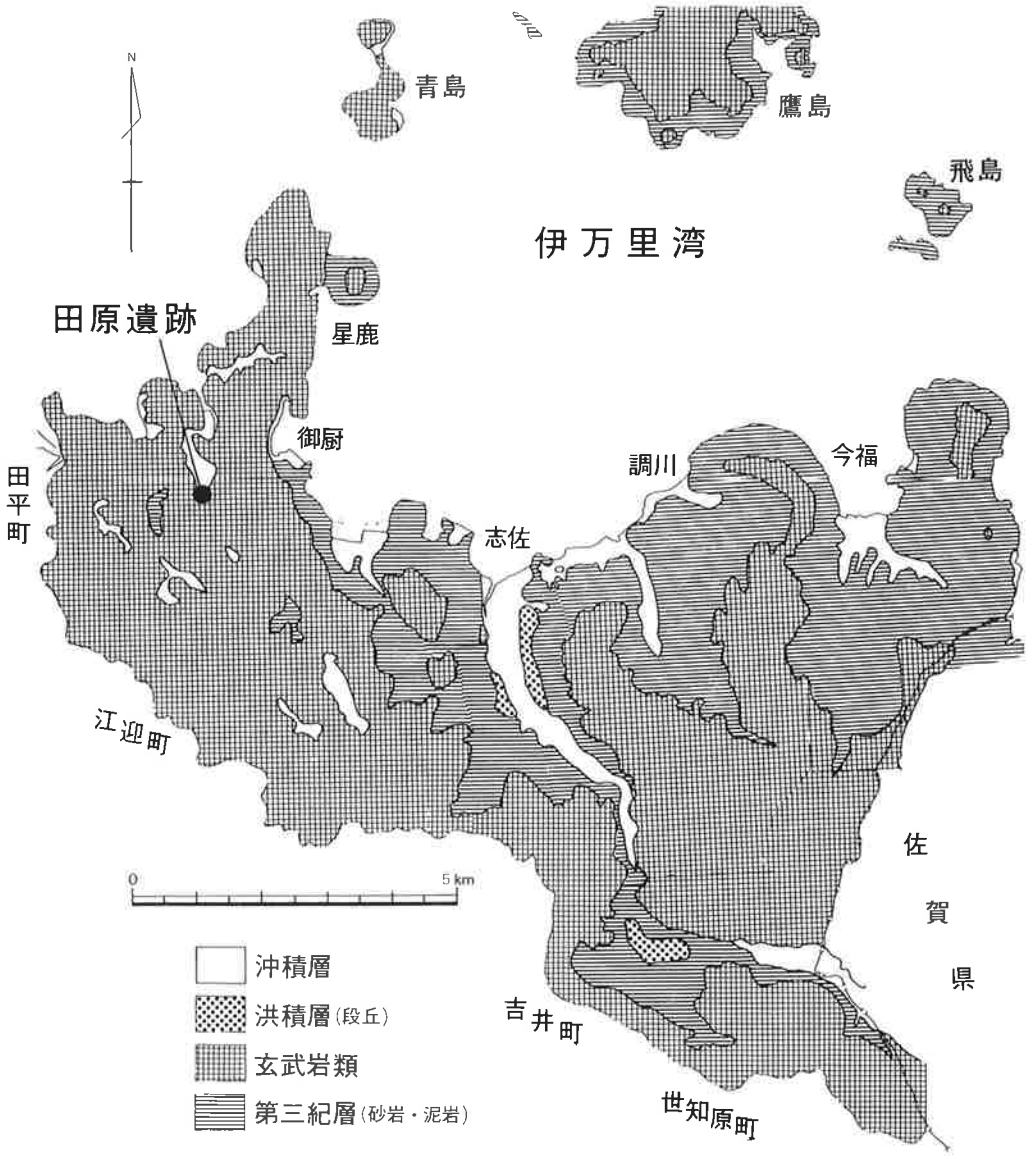
気候は，対馬海流の影響を受けて温暖な海洋性気候となっており，冬でも氷点下になることはまれである。しかし，冬は玄界灘からの季節風が強く体感温度は低い。年平均気温は17.6℃，年間降水量は2,000㎜前後である。

産業は，半農半漁であるが，かつては多くの炭鉱をかかえ市の基幹産業であったが，現在ではすべて閉山している。これにともなって人口も炭鉱最盛期に比べて大幅に減少している。その後，臨海部への工場誘致が積極的に進められ，調川港には遠洋巻網水揚基地が開設され，さらに石炭専焼火力発電所も建設され，新産業都市への変貌を図りつつある。

田原遺跡の立地する御厨町は市の西部にあり，玄武岩が不整合に覆っていたる所に低位の玄武岩台地が分布しているが，南側の大岳・白岳にはビュート状の高まりをなしている。この低位の玄武岩台地は，竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた低位の台地となっており，中

央を流れる竜尾川は，北松浦郡江迎町境の白岳北麓に源を発し，木場川・田代川などの支流を集め，低位台地を刻んで北流する延長5km程の二級河川である。河口には三角洲がほとんどつくられず河口がラッパ状に開いた三角江を形成している。このような風化・侵食の進んだ低位の玄武岩台地であるため，風化した粘土の厚い緩斜面や浅い谷では，台地上でも水田がみられる。しかし，玄武岩台地の平たい屋根の高い部分では畑地が優勢である。

田原遺跡は，この竜尾川流域左岸の沖積低地から丘陵端にかけて立地しており，標高13～21m程を測る。東には見事な棚田が展開している。



第1図　松浦市地質図

2．歴史的環境（第２図，表１・２）

松浦市内の遺跡は現在まで94箇所が確認されているが，市内の遺跡のあり方は大きく４つに分けられる。この中には止むをえず緊急発掘調査を行って記録保存措置を講じた遺跡も含まれている。

第１は，星鹿半島一帯を中心とした海岸線に程近い地域，第２は，志佐川流域を中心とする地域，第３は今福港周辺を中心とする地域，第４は第三紀層と玄武岩との地質境界に多く分布する溜池周辺地域である。第１地区は縄文時代が主体を占め，第２地区は旧石器時代から中世まで多彩な時代にわたっている。第３地区は旧石器時代から中世における梶谷城跡まで連続した分布を示している。第４地区は特に旧石器時代か縄文時代に限られる特色がある。

松浦市には現在94箇所の遺跡が周知されている。同じ遺跡でも時代が複合する例もあるが，出土遺物・表採資料による各時代別の遺跡数は旧石器時代38箇所，縄文時代63箇所，弥生時代10箇所，古墳時代10箇所，そして歴史時代24箇所である。よって松浦市内では圧倒的に旧石器時代，縄文時代の遺跡が多い。しかし，近年では各種の開発事業に伴う調査で，古墳時代・中世期を中心とする遺跡の発見も相次いでいる。

松浦市内で考古学的な調査が行われたのは古く，明治16年（1883）の淀姫神社内発見の石棺の報告[註1]例からである。次いで大正14年（1925）前田毅氏の肥前御厨貝塚[註2]発見報告がある。その後では昭和25年（1950）に京都大学平戸学術調査団によって長崎県北部一帯で総合的な調査が行われており，御厨貝塚（池田下遺跡[註3]で報告）で小規模ながら発掘調査（？）が実施されている。また，同報告には姫神社遺跡の表採資料も紹介している。昭和41年（1966）には姫神社遺跡[註4]が朝鮮半島の東三洞貝塚から出土する櫛目文土器と九州との曽畑式土器との関連性の有無を主目的に日米合同による調査が行われており，その一部が英文で報告されている。

昭和40年代は，長崎県立松浦高等学校郷土社会部の業績が上げられる。同部は故芝本一志氏の指導のもと市内の遺跡の分布調査から遺物の整理・保管までを行いその成果を「松浦考古」として創刊し，３号まで出版され，盛んな研究活動を展開していた。中でも今日につながる松浦市の考古学の基礎はこの時期に始まったといえる。昭和46年（1971）には水田畦畔改修工事に際して栢ノ木遺跡[註5]が発見されている。調査の結果，箱式石棺墓３基，甕棺墓３基が検出されており，そのうちの２号石棺内からは管玉２個，ガラス小玉約350個のほか内矩を欠く内行花文鏡片２片が検出されている。甕に使用された土器は弥生前期末の時期に属する。この調査は遺跡の一部にすぎず一帯には相当数の埋葬遺構が包蔵されている可能性がある。この栢ノ木遺跡は松浦市の弥生文化を解明する上で重要な遺跡である。

昭和50年代に入ってからは，前半は小規模な試掘調査が主であったが，後半は多額の調査経費を必要とする大型の緊急調査が主となっている。昭和54年（1979）～昭和56年（1981）にかけて楼楷田遺跡[註6]の試掘調査が行われている。また，同56年には万場遺跡[註7]の試掘調査と皿山窯址[註8]の緊急調査，同57年（1982）には佐世保崎遺跡[註9]の確認調査，同58年（1983）には牟田池上遺跡[註10]

の確認調査が行われている。昭和57年（1982）～同59年（1984）の３ケ年間には松浦市内でも大規模な楼楷田遺跡[註6]の緊急調査が行われている。この遺跡は旧石器時代から縄文時代及び中世の複合遺跡で，遺跡の主体をなすのは13世紀をピークとする12世紀から14世紀に至る中世の遺構・遺物である。遺構は無数の掘立柱と鉄滓が多量に出土するたたら状遺構，集石土壙が見られ，中でも遺跡の中央部を幅約１ｍ内に礫を集め縦断する形で検出された道路状遺構は，全長約130ｍに達し，海岸部まで延びていた。遺物には中国産の輸入陶磁器が多く，特に龍泉窯系・同安窯系の青磁，それに白磁の碗・皿が多かった。朝鮮産陶磁器も象嵌青磁や粉青沙器など高麗・李朝のものも含まれていた。国内産の遺物は東播系・亀山系の甕，土錘・石鍋・再加工の滑石製石錘などがある。この遺跡は松浦党とも関連があるとして注目されている。

昭和60年代に入ると圃場整備事業に伴う確認調査が主体をしめてくる。昭和60年(1985)・昭和62年(1987)・昭和63年(1988)には志佐川地区県営圃場整備事業に伴う宮ノ下リ遺跡[註11]の確認及び緊急調査が第４次調査まで行われている。そして，４世紀後半～５世紀代の竪穴式住居跡２棟及び箱式石棺墓，中世の柱穴群などが検出されている。遺物では旧石器時代から中世期まで連続して出土しており，長い間集落として利用していたことが理解できる。昭和61年（1986）には小嶋遺跡緊急調査，下田遺跡[註12]確認調査，同62年には小嶋古墳群[註13]の確認調査を行っている。３基を確認し，そのうちの１号墳を調査した。石室はすべて天井部を失って露出しており方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室であった。玄室内より銀環・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉など多数が出土しており７世紀代の終末期古墳の形態を良くとどめている。同63年には辻ノ尾遺跡の確認調査，63年から平成元年（1989）には４次にわたって池田遺跡[註14]の確認調査を行っている。その結果，縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての良好な包含層が検出され，また，市内でもめずらしい貝塚の発見があり，獣骨・魚骨などの自然遺物とともに骨製ヤス・貝輪なども出土している。遺構では柱穴，箱式石棺墓，甕棺墓，土壙などが検出されている。その他では中世期の遺物で中国産の輸入陶磁器及び朝鮮産陶磁器も含まれていた。楼楷田遺跡とほぼ同じような遺物がある。

平成元年に入ってからは，県営圃場整備事業は志佐川流域から竜尾川流域にうつり，それに伴って田原遺跡・寺ノ尾Ｃ遺跡[註15]の確認調査も行っている。平成２年度には田川遺跡[註16]の確認調査を行っている。

このように市内での考古学的調査は22箇所にも及んでいる。その結果は随時報告されており，これらの成果が次第に不鮮明であった松浦市の歴史を明らかにしてくれている。

また，特に市西部の御厨・星鹿町では，比較的開発が進んでいることにも関連しているが，旧石器・縄文・弥生・古墳時代にかけての代表的な遺跡が数多く点在している。

古墳時代以降では，充分に解明されているとはいえないが，宇野御厨について説明する必要があろう。宇野御厨荘，単に御厨荘ともいわれている。律令制下では天皇や神に貢納する魚貝・果物を贄と称しており，のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも，大宰府を通じ

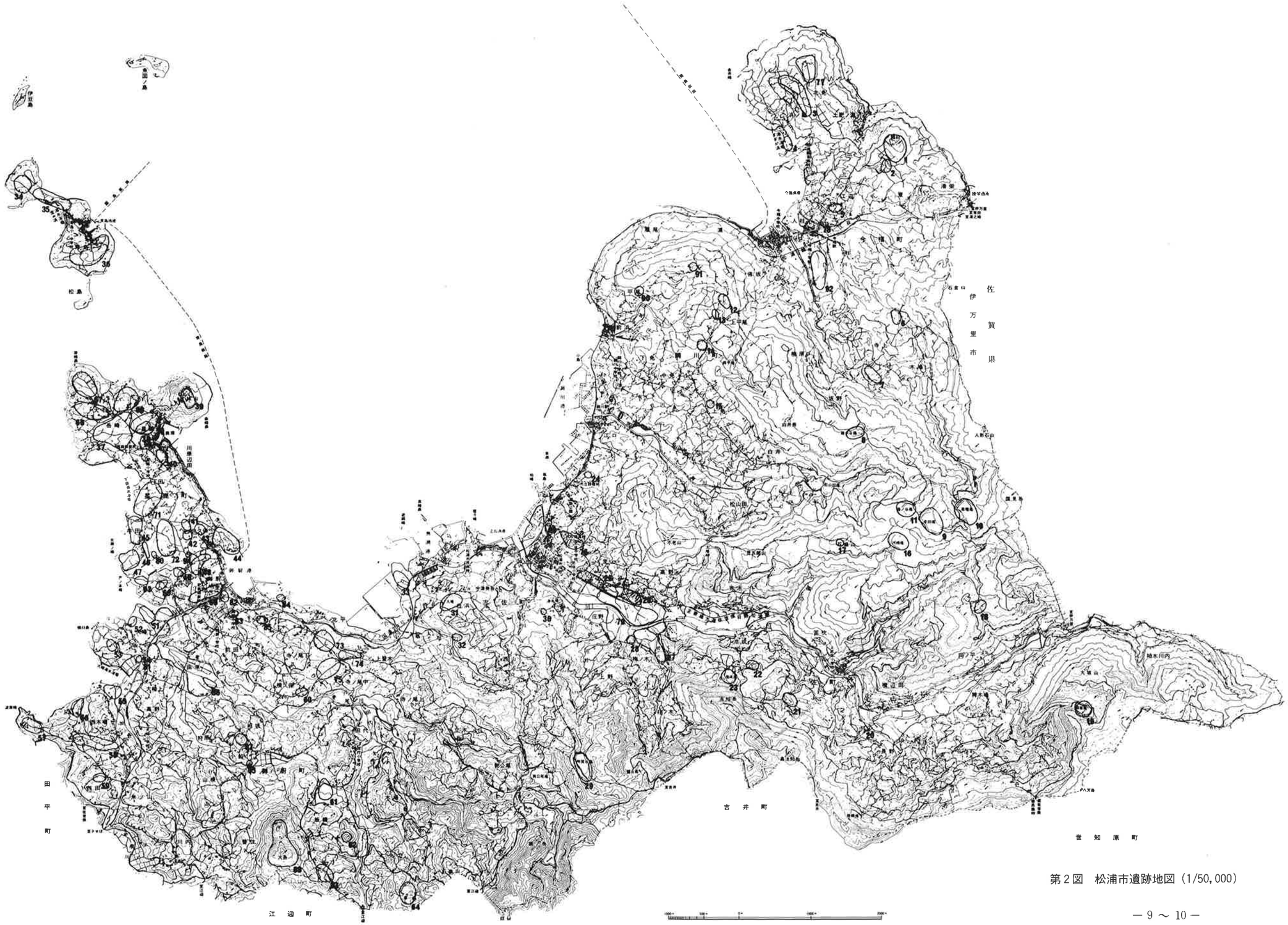
て贄の貢上はすでに『肥前国風土記』松浦郡条に見え，一方同じ『肥前国風土記』に値嘉島での放牧の記事も見え，早くから島を利用した放牧が行われていたことがわかる。しかし，律令体制が解体すると，贄の制度も変質し，官牧も消滅し，それらの要素を含みこんだ宇野御厨なる荘園が成立するのである。当時の宇野御厨は肥前国松浦郡だけでなく，筑前・筑後・肥前にわたる大宰府の贄貢上のため，贄人が活動する広い地域を指していたものとされている。

宇野御厨が初めて文書に現われるのは『東南院文書』で，寛治3年（1089）の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とあるものである。これによると「大府贄人」と号する松永法師なる人物が観世音寺領の筑前国生葉郡杷岐荘内の畠地子等を贄人源順の先祖相伝の所領であるとして押領する事件が起こっている。この事件は宇野御厨別当散位藤原頼行が御厨押領と称する松永法師の押領を停止し解決するが，この松永法師の文書によれば生葉郡内における贄人の所領の存在が知られ，宇野御厨は，肥前国松浦郡のみならず，筑前・筑後の地域にもその所領は及んでいたことになる。つぎに宇野御厨の名が見えるのは，『石志文書』の，康和4年（1102）の肥前国宇野御厨検校源久譲状案である。この文書は偽文書としての疑いがあるが，「宇野御厨野検校散位」（源久）という松浦党の祖といわれる人物の名が見える。この源久は延久元年（1069）現在の松浦市今福町に下向し，土着したといわれる人物で，松浦党の諸氏は源久を祖として仰いでいる。松浦党については，すでに源平合戦の壇ノ浦の戦に平家方として参加した水軍の中に松浦党の名が見え，海上活動を得意とする水軍的集団として有名であった。松浦党は当初は血縁集団として源姓で一字名を名乗る松浦一族とその姻族が加わった集団であったとみられるが，南北朝以降は周辺の他姓の土豪も内包し，地域的連合体へ発展する。伝説によれば，松浦一族は嵯峨源氏の後裔とも，安倍宗任の後裔ともいわれている。しかし，寛仁3年（1019）の刀伊の入寇の際，松浦郡で防戦し，賊を討ち取った人物に前肥前介源知なる人物がいる。また，先の『東南院文書』に見えた宇野御厨の贄人源順などがいる。延久元年以前にも源姓で一字名の一族が宇野御厨一帯で活動していたようである。史料によれば源久の孫で，清・披・囲などの諸家は宇野御厨の荘官でもあり，執行職・検非違所・弁済使・公文職・惣追捕使職・定使職などを所持し，御厨内に所領をもち割拠していた。清の子孫には，鎌倉期御厨執行職を相伝した今福の松浦氏，志佐氏などがいる。披は，近世大名となる平戸松浦家すなわち峯氏の祖である。囲の子孫には惣追捕使・定使職の山代氏がいる。

『河上神社文書』の正応5年（1292）の「肥前国河上宮造営用途支配惣田数注文」には「宇野御厨庄三百丁」と当御厨の公田数が記されている。鎌倉期の支配関係は不明な点が多いが，宇野御厨はその性格から見て，大宰府の管下に設置された天皇家の直領ともいうべきものであったと思われるが，鎌倉末期には西園寺家領となっていたことが知られる。元亨2年（1322）西園寺実兼所領処分状案によれば，宇野御厨の小牛が年貢として送られていたことが知られる。同じ頃の延慶3年（1310）成立の『国牛十図』には「御厨牛以肥前宇野御厨貢牛称之」とあり，牛車などに使われる御厨牛は本来宇野御厨の貢牛であったようである。南北朝以降，西園

寺家にとっても宇野御厨は実質的に不知行状態となったと思われ，支配を伝える史料もなく，御厨の機能はほとんど失われたようで，宇野御厨の名も次第に広域称化して使用されなくなる。宇野御厨の終見は，永正５年（1508）の松浦弘定寄進状の「肥前国下松浦宇野御厨庄相神浦」であるが，室町期に御厨の地名は史料からも激減する。南北朝期を境に御厨内の荘園的秩序も解体し始め，小領主たちも地域的一揆体制を形成するようになってくる。当時の宇野御厨の範囲を確定することは難しいが，鎌倉期の史料から考えると，現在の五島列島・平戸島・生月島・度島・大島・鷹島・福島などの島々と，田平町・松浦市・鹿町町・小佐々町・佐々町・佐世保市などを含む旧北松浦郡・南松浦郡域と伊万里市の伊万里湾西側地域を含む一帯であろうと思われる。本市には御厨の地名もあり，一帯が宇野御厨の中心であったと思われる。

松浦市域内に居住する土豪としては，先の今福の松浦氏・志佐氏・御厨氏の３氏がいる。今福の松浦氏は御厨執行清の長子遶に始まり，志佐氏はその次子志佐六郎貞に始まる。御厨氏は清の弟値嘉十郎連の子御厨小二郎並にはじまるといわれている。御厨氏は，その動向がほかの両氏に比べると不明な点が多い。鎌倉期には「御厨熊徳」なる人物が見え，弘安４年（1281）に宇野御厨の預所から無主の荒野１町を給田として与えられている。南北朝期に入ると，今福の松浦氏，志佐氏とともに下松浦の一揆の一員として活動している。『山代文書』の永徳４年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には「〈ミくりや〉三河守守」，「〈ミくりやのさかもと〉源宥」の当地を本拠とする土豪名が見える。同年の『青方文書』にも「〈ミくりや〉参川守守」の名が見える。さらに嘉慶２年（1388）の一揆契諾状には「御厨三河守守」，「御厨田代近」の名も見える。室町期に入ると，御厨氏は盛んに朝鮮貿易を行っている。『李朝実録』には『太宗恭定大王実録』には「下松浦三栗太守源満」「下松浦三栗野太守源満」などの名が現われる。また，『海東諸国紀』にも「下松浦三栗野太守源満」として現われている。少弐氏の管下にあり，年に１回船を出していたという。御厨氏における系譜上の位置については源満という人物については不明である。この御厨氏の居城が御厨城と考えられ，館の字名も残っている。



第２図　松浦市遺跡地図（1/50,000）

表１　松浦市遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	立地	時代
1	松浦党梶谷城跡	今福町東免城山	城跡	丘陵	中世（県指定）
2	城山山麓遺跡	〃　東免農園	遺物包含地	〃	縄文
3	満場遺跡	〃　北免上満場・平ほか	〃	台地	旧石器
4	ぎぎが浜遺跡	〃　北免前田・黒崎ほか	〃	砂浜	古墳
5	山川遺跡	〃　東免山川	〃	台地	縄文
6	長尾池遺跡	〃　木場免長尾・寺上免道山	〃	〃	〃
7	深田代池遺跡	〃　寺上免方立・抜け	〃	〃	〃
8	椎ノ木谷遺跡	〃　坂野免椎ノ木谷	〃	〃	旧石器
9	牟田池遺跡	〃　木場免牟田	〃	〃	旧石器・縄文
10	葛篭池遺跡	〃　木場免札ノ辻・葛篭	〃	〃	縄文
11	湯ノ谷池遺跡	調川町松山田免湯谷	〃	〃	旧石器・縄文
12	柳池遺跡	〃　平尾免柳・堀ノ元	〃	〃	縄文
13	南久保遺跡	〃　平尾免南久保	〃	丘陵	〃
14	櫨川遺跡	〃　平尾免古番所	〃	台地	〃
15	松園屋敷跡	〃　上免里	城跡	丘陵	中世
16	川頭池遺跡	志佐町赤木免河頭・文明ほか	遺物包含地	台地	旧石器・縄文・中世
17	石盛山古墳	〃　赤木免石盛	古墳	山頂	古墳
18	絶頂池遺跡	〃　田ノ平免小谷・谷	遺物包含地	台地	縄文
19	柳原池遺跡	〃　稗木場免仏須計	〃	〃	〃
20	黒岩岩陰遺跡	〃　長野免池ノ元	〃	〃	〃
21	モウデ池遺跡	〃　池成免庵ノ本	〃	〃	〃
22	矢櫃池遺跡	〃　池成免池成	〃	〃	〃
23	池成池遺跡	〃　池成免橋本・曽井	〃	〃	〃
24	寺田遺跡	〃　浦免寺田	〃	〃	旧石器・縄文
25	久保園遺跡	〃　里免久保園・高野免松山ほか	〃	〃	縄文
26	陣ノ内城跡	〃　里免陣ノ内	城跡	丘陵	中世
27	栢ノ木遺跡	〃　栢木免小久保ほか	墳墓	台地	弥生
28	堂山古墳	〃　栢木免高尾本	古墳	丘陵	古墳
29	明賀谷遺跡	〃　栢木免明賀谷	遺物包含地	山麓	旧石器・縄文
30	大嶋遺跡	〃　庄野免小楠	石造物	丘陵	中世
31	大堤遺跡	〃　白浜免猿喰・山頭	遺物包含地	台地	縄文
32	皿山窯跡	〃　白浜免京地	窯跡	丘陵	江戸
33	楼楷田遺跡	〃　白浜免楼楷田・日前ほか	遺物包含地	〃	旧石器・縄文・中世
34	段ノ上遺跡	星賀町青島免段ノ上	〃	台地	旧石器
35	一町田遺跡	〃　青島免崎田	〃	砂丘	縄文・弥生
36	青島遺跡	〃　青島免長久保ほか	〃	台地	旧石器・縄文
37	大石A遺跡	〃　岳崎免追出ほか	〃	丘陵	〃
38	千人塚	〃　岳崎免大堂ほか	墳墓	台地	〃
39	刈萱城跡	〃　岳崎免岳崎	城跡	丘陵	中世
40	下田遺跡	〃　下田免山口	遺物包含地	〃	旧石器・縄文
41	北久保A遺跡	〃　北久保免勢ノ巣・藤園	〃	〃	縄文・弥生
42	北久保B遺跡	〃　北久保免浦頭	〃	〃	縄文
43	北久保C遺跡	〃　北久保免浦頭	〃	〃	〃
44	姫神社遺跡	〃　北久保免宮崎・玄道寺	〃	平地	〃
45	牟田A遺跡	〃　牟田免中尾	〃	〃	旧石器・縄文
46	牟田池上遺跡	〃　牟田免池上	〃	平野	縄文
47	佐世保崎遺跡	〃　牟田免佐世保崎	〃	平地	旧石器

表２　松浦市遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	立地	時代
48	池田遺跡	御厨町池田免田崎・里免下長峯	貝塚	丘陵	縄文・弥生・中世
49	長歳坊遺跡	〃　池田免長歳坊・西ノ原ほか	遺物包含地	平地	旧石器
50	中ノ崎遺跡	〃　池田免中ノ崎	〃	〃	〃
51	水尻A遺跡	〃　大崎免水尻・雀崎	〃	丘陵	縄文
52	水尻B遺跡	〃　大崎免水尻ほか	〃	〃	旧石器
53	蕨川遺跡	〃　大崎免俵場・フウチンほか	〃	台地	縄文
54	小嶋古墳群	〃　大崎免小嶋	古墳	平野	古墳
55	下谷遺跡	〃　西木場免下谷・平原	遺物包含地	台地	縄文
56	田中遺跡	〃　西田免小田・田尻ほか	〃	〃	〃
57	波津崎遺跡	〃　西田免波津崎	〃	〃	旧石器
58	田口高野遺跡	〃　西田免田口高野ほか	〃	〃	旧石器・縄文
59	西木場遺跡	〃　西田免潮入	〃	〃	縄文
60	横久保遺跡	〃　横久保免大久保	〃	丘陵	縄文・弥生
61	田川遺跡	〃　田代免田川	〃	台地	旧石器・縄文
62	板橋経塚	〃　板橋免教塚	石造物	山頂	中世
63	板橋境目遺跡	〃　板橋免堺目・ケンケイ田	遺物包含地	山地	旧石器・縄文
64	アカニタ遺跡	〃　板橋免アカニタ	〃	台地	縄文
65	葉山六地蔵	〃　小船免葉山	石造物	盆地	中世
66	坂本遺跡	〃　里免丸田・長峯	遺物包含地	台地	旧石器・縄文
67	津崎鼻遺跡	星鹿町岳崎免津崎ほか	〃	〃	〃
68	津崎遺跡	〃　岳崎免吸田・天堤ほか	〃	〃	〃
69	大石B遺跡	〃　岳崎免園田・久保田ほか	〃	平地	〃
70	大石C遺跡	〃　岳崎免堤田ほか	〃	台地	〃
71	牟田B遺跡	〃　牟田免細・久保ほか	〃	平地	〃
72	牟田C遺跡	〃　北久保免藤園・不動ほか	〃	平地・台地・丘陵	縄文・弥生
73	寺ノ尾A遺跡	御厨町上登木免大野谷	〃	台地・丘陵	旧石器・縄文・弥生
74	寺ノ尾B遺跡	〃　上登木免野中田	〃	〃	旧石器・縄文
75	寺ノ尾C遺跡	〃　上登木免天久保	〃	〃	旧石器・縄文・弥生
76	辻ノ尾遺跡	志佐町浦免辻ノ尾ほか	〃	〃	〃
77	北平遺跡	今福町北免北平	〃	台地	縄文
78	文禄の役松浦家供養塔	〃　東免潟	石造物	丘陵	中世（県指定）
79	宮ノ下リ遺跡	志佐町高野免宮ノ下リ・里免三十六	遺物包含地	平野	縄文・弥生・中世
80	北久保経塚	星鹿町北久保免竿	石造物	〃	中世
81	小嶋遺跡	御厨町大崎免小嶋	遺物包含地	〃	縄文
82	御厨城跡	〃　里免大久馬川	城跡	丘陵	中世
83	御厨館跡	〃　里免館	館跡	台地	〃
84	向山城跡	〃　中野免坊ノ上	城跡	丘陵	〃
85	中野遺跡	〃　中野免中野	遺物包含地	台地	縄文
86	田原遺跡	〃　田原免田原ほか	遺物包含地	平野	弥生・古墳
87	城ノ越城跡	〃　小船免栗山	城跡	丘陵	中世
88	大岳古墨	〃　板橋免大岳	〃	〃	〃
89	淀姫神社古墳	志佐町浦免宮ノ前	古墳	平地	古墳
90	平尾遺跡	調川町平尾免芦原	遺物包含地	丘陵	旧石器
91	大塔遺跡	〃　平尾免大塔	〃	〃	〃
92	中ノ瀬遺跡	今福町浦免中ノ瀬・田川原	〃	台地	弥生・縄文
93	戸ノ本崎遺跡	星鹿町牟田免池上	〃	平地	旧石器・縄文
94	貴船神社古墳	〃　北久保免浦頭	古墳	丘陵	古墳

註１　松浦市史編纂委員会『松浦市史』1975

註２　前田毅「肥前御厨貝塚発見報告」『人類学雑誌40―10』1925

註３　樋口隆康・釣田正哉「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告』1951

註４　ALBERTMOHR AND MASAKAZU YOSIZAKI「Cultual Sequence in western Kyushu『Asian perspectives』XⅥ. 2　1973

註５　正林護『栢ノ木遺跡(中間報告)』松浦市教育委員会　1973

註６　安楽勉・中田敦之編『楼楷田遺跡』長崎県文化財調査報告書　第76集　長崎県教育委員会・松浦市教育委員会　1985

註７　久原巻二『電信電話公社の無線中継所建設予定地にかかる埋蔵文化財緊急発掘調査の結果について』1982

註８　倉田芳郎編『長崎・松浦皿山窯址』松浦市教育委員会　1982

註９　川道寛『松浦市圃場整備事業にかかる埋蔵文化財確認調査の結果について』1982

註10　中田敦之『牟田池上遺跡』松浦市文化財調査報告書　第１集　松浦市教育委員会　1984

註11　中田敦之『宮ノ下リ遺跡』松浦市文化財調査報告書　第５集　松浦市教育委員会　1989

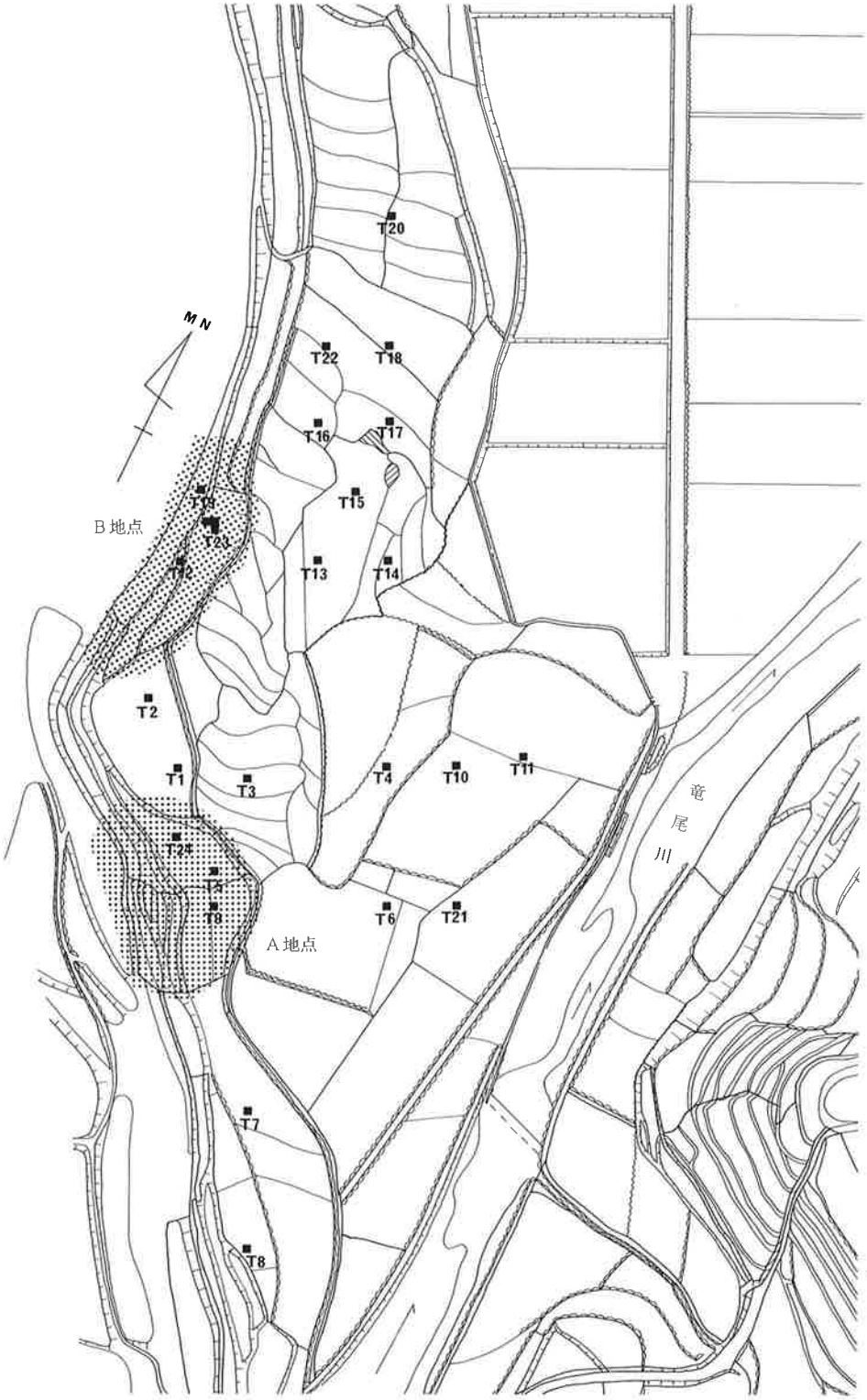
註12　中田敦之『下田遺跡』松浦市文化財調査報告書　第３集　松浦市教育委員会　1987

註13　中田敦之『小嶋古墳群』松浦市文化財調査報告書　第４集　松浦市教育委員会　1988

註14　中田敦之『池田遺跡』松浦市文化財調査報告書　第６集　松浦市教育委員会　1990

註15　中田敦之『田原積石塚・寺ノ尾Ｃ遺跡』松浦市文化財調査報告書　第７集　松浦市教育委員会　1990

註16　1991年報告書刊行

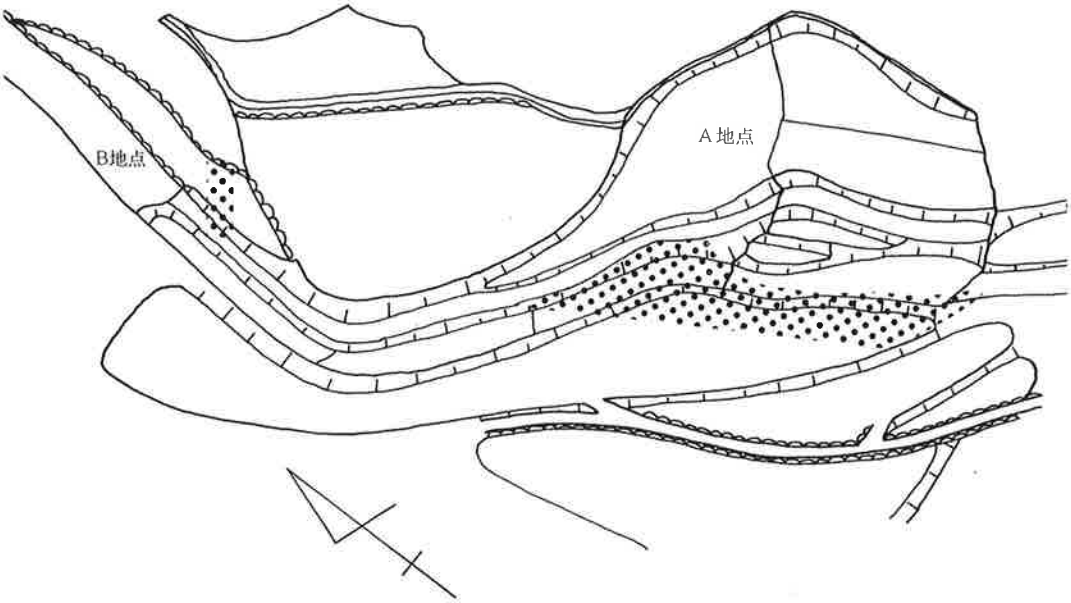


第３図　平成元年度調査区設定図（1/2,000）

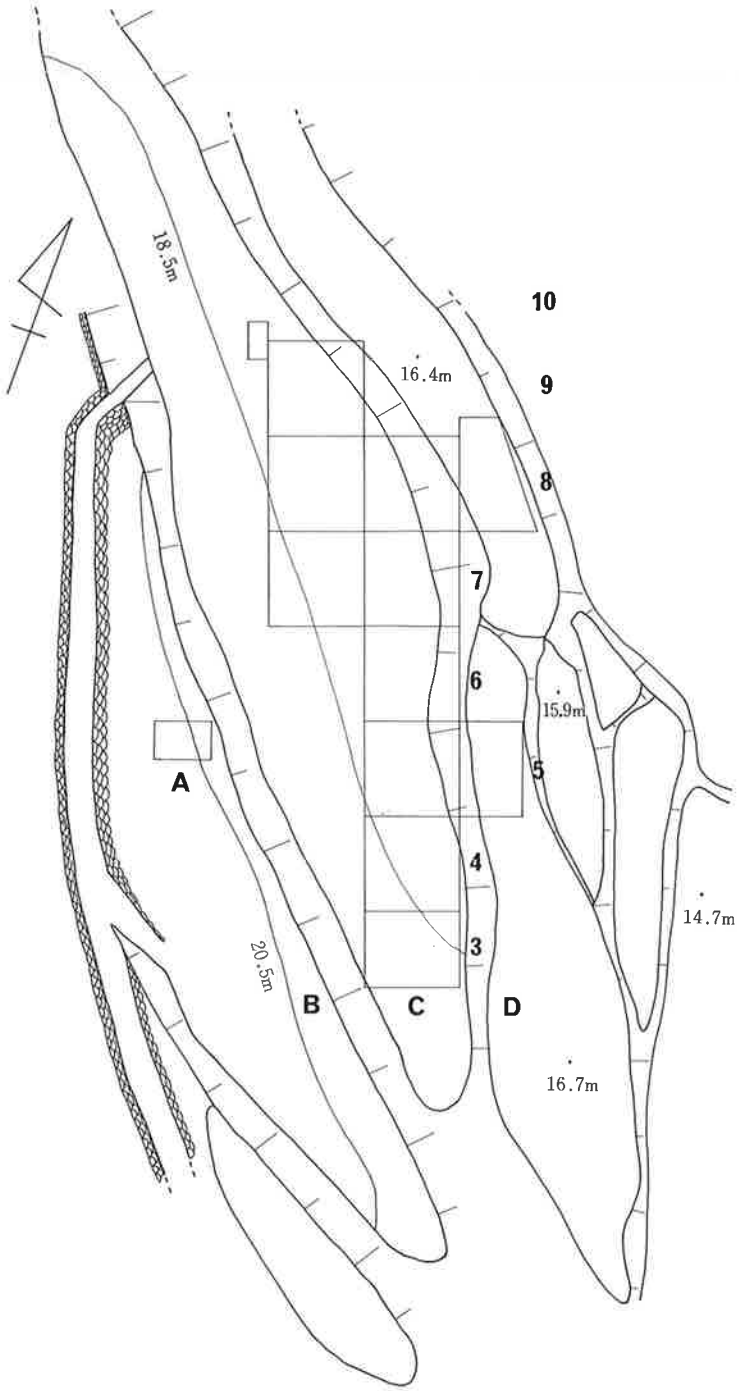
Ⅲ　遺跡の調査

1．調査の概要

田原遺跡は，竜尾川により侵食・形成された河岸段丘の西側に立地している。平成元年度の範囲確認調査では，24箇所の調査区のうち２箇所の地点において良好な弥生中期から古墳時代にかけての遺物包含層及び柱穴などの遺構が確認されている。南側をＡ地点とし，北側をＢ地点とすると，Ａ地点は約2,400㎡，Ｂ地点は約1,400㎡の範囲としていた。この２地点の3,800㎡については圃場整備事業の計画変更を県北振興局へお願いをしていた。しかし数回の協議の結果，335㎡の面積でＡ地点西側地区が掘削部分にあたるため，また，Ｂ地点の南側地区が用水路部分で設計の変更ができないこれらについては記録保存を目的として，緊急発掘調査を行った。調査は平成２年８月27日から行い，まず，東側の南北に走る道路からの搬入部分の草刈りから行った。調査区は将来の調査も考えて全体を５ｍのグリットに分けて，Ａ地点から調査を開始し，南北を南から北へ３～10，東西を西から東へＡ～Ｄの記号を付し，Ｃ３区・Ｂ９区のように呼称した。Ｂ地点については一括して行った。調査における記録措置は，実測図については1/10及び1/20を基本として，写真撮影も同時に行った。調査がほぼ終了する段階の10月２日にはＢ９の調査区北側で近世墓が検出され人骨が認められたので，長崎大学医学部の佐伯和信氏ほかの手をわずらわせた。この分析結果についても掲載した。発掘調査は10月13日まで行っている。調査期間中に県北振興局よりＡ５区がある畑の確認依頼があったので，急きょ調査範囲に入れて行った。調査を行った面積は，314.1㎡であった。



第４図　調査区周辺図（1/1,000）



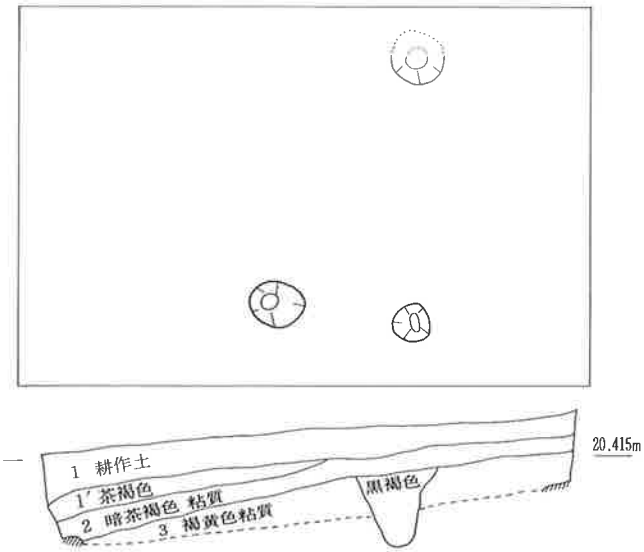
第５図　Ａ地点調査区設定図（1/400）

2．層　序（第７図）

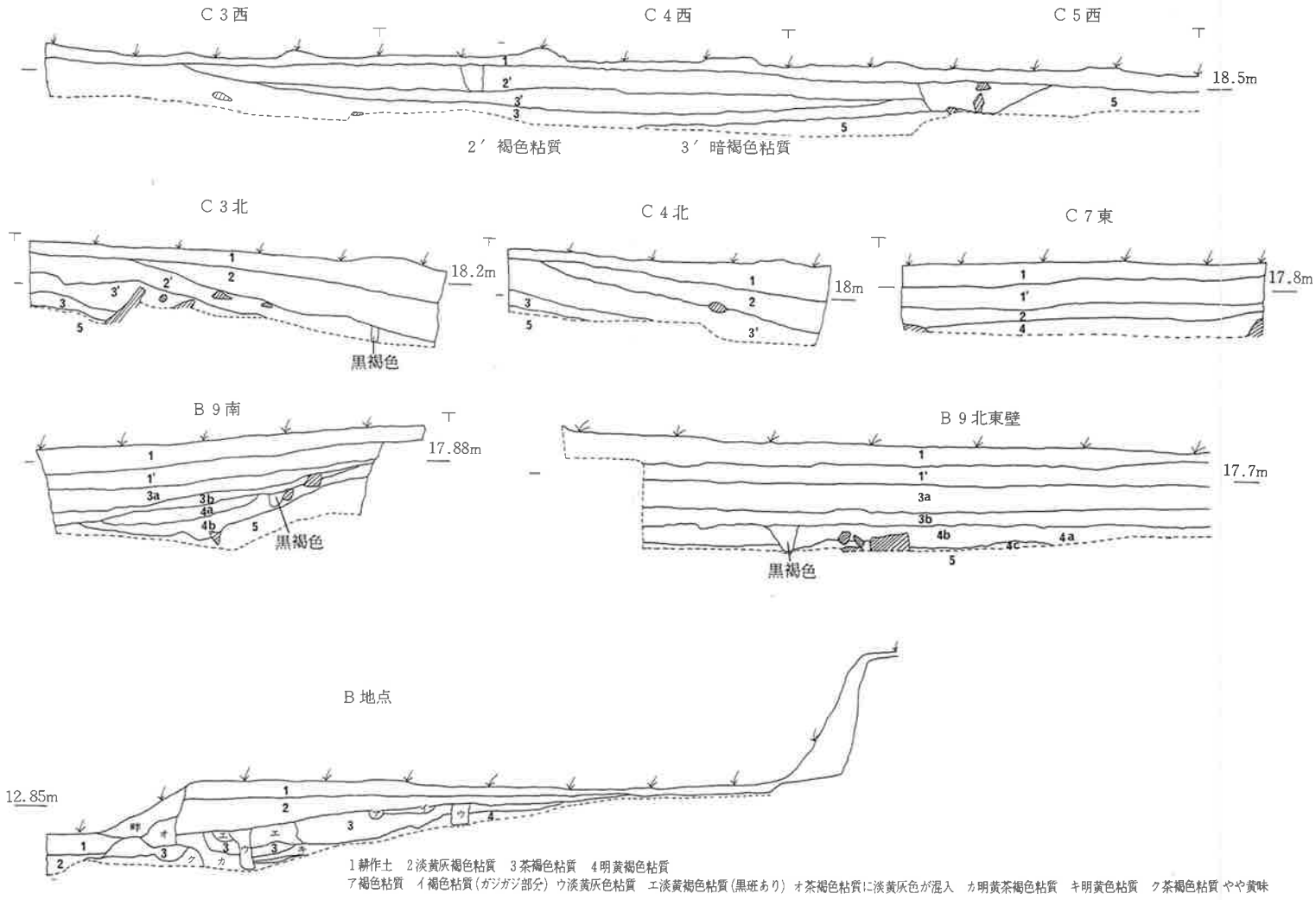
田原遺跡の今回の発掘調査は，Ａ地点の西側地区と，Ｂ地点の南側地区の部分的な調査であったため土層状況も不明な点が多い。Ａ地点は東側での最低位で約13.5ｍ，今回調査を行った西側の最高位で約20.8ｍあり，比高差は約7.3ｍある。調査前の地形は４段にわたって開墾された棚田となっており，棚田ごとの比高差は約0.3ｍ～2ｍである。基本的な層序はＢ・Ｃを中心とする耕作土，灰褐色粘質土，茶褐色粘質土，褐色粘質土，地山（赤褐色粘質土）である。Ｂ地点は最低位で約12.5ｍ，今回調査を行った南側の最高位で約14.7ｍあり，比高差は約2.2ｍある。調査前の地形は３段にわたって開墾された棚田となっており，棚田ごとの比高差は約0.7～1.5ｍである。この地区の調査は前回の調査で確認していた灰褐色・黒褐色粘質の遺物包含層は確認できなかった。開墾時に大部分が削平されていると思われ，遺物も小破片の土師器が数点あったのみである。基本的な層序は耕作土，黄褐色粘質，茶褐色粘質，地山で黄褐色土と茶褐色土の間に非常に固くしまった黒斑面があり，複雑な土層状況を呈している。現地点では自然的なものか人工的なものか確定はむずかしいが，今後の周辺の調査にゆだねたいと思う。そこでこの層序の項ではＡ地点の土層状況について説明を行う。

Ａ地点の最西端の調査であるＡ５区は畑地として利用されている。標高約20.3ｍ～20.8ｍあり東側に向って緩く傾斜しており，耕作土も地形に沿って傾斜している。２層は暗茶褐色粘質土で，３層は褐黄色粘質土である。２層下部から３層に掘り込んだ柱穴３個があり，覆土は黒褐色粘質土で軟らか気味である。この２・３層より土師器と石鏃が出土している。当初は調査区外であったが遺物包含層がなければ土取り場としたいとの県北振興局の考えであったが，遺物・柱穴が検出されたため当初の計画通りに盛土をすることで同意が得られている。このＡ５区より約２ｍ下ったＢ・Ｃ区では地山層の上に堆積する土層がＢ８からＢ９区へと，また，Ｃ５からＣ３区へと厚くなる傾向が見られるため，Ｃ６区では耕作土が約30㎝と厚く，２層の灰褐色粘質土は約20㎝程度しかなく，すぐ地山の赤褐色粘質土へとつづいている。

２層の灰褐色粘質土は，Ｃ３区東側で約50㎝と厚く，Ｃ６区北側で約10㎝となり，Ｃ７区では堆積しておらず，Ｃ列の



第６図　Ａ５区南壁及び柱穴実測図（1/40）


C 3西
C 4西
C 5西
18.5m
2′ 褐色粘質
3′ 暗褐色粘質
C 3北
18.2m
黒褐色
C 4北
18m
C 7東
17.8m
B 9南
17.88m
黒褐色
B 9北東壁
17.7m
黒褐色
B 地点
12.85m
1 耕作土　2 淡黄灰褐色粘質　3 茶褐色粘質　4 明黄褐色粘質
ア 褐色粘質　イ 褐色粘質（ガジガジ部分）ウ 淡黄灰色粘質　エ 淡黄褐色粘質（黒班あり）オ 茶褐色粘質に淡黄灰色が混入　カ 明黄茶褐色粘質　キ 明黄色粘質　ク 茶褐色粘質 やや黄味

第７図　土層状況（1/80）

中央よりやや西側から東側にかけて堆積している。

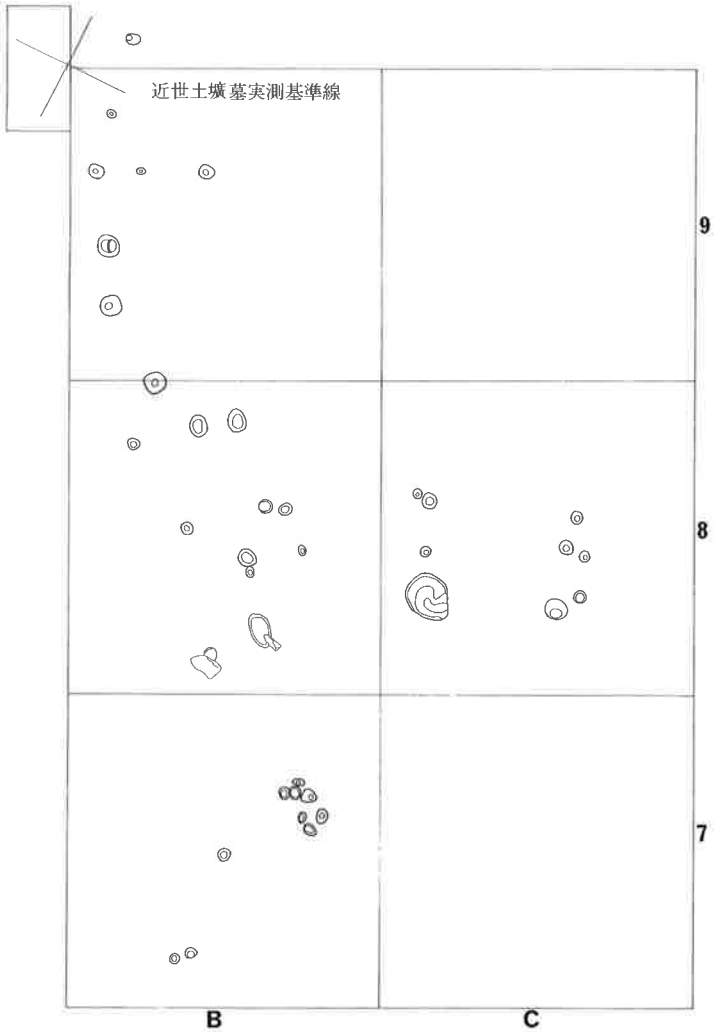
３層の茶褐色粘質土は，Ａ地点の北側部分であるＢ８区北側からＢ９区にかけて堆積している。やはりこの３層も地形に沿うように東側が約40㎝の堆積と最も厚く，西側では約５㎝と薄くなっている。この３層は３ａ層と３ｂ層に区分することができ，３ｂ層がａ層より黒味を帯びている。

４層の褐色粘質土は，Ｂ９区で最も厚く堆積しており，４ａ層・４ｂ層・４ｃ層の３つの色彩上区別することができる。４ａ層はやや暗い褐色，４ｂ層は淡褐色，４ｃ層はやや赤味を帯びた褐色を呈している。Ｃ３・４区ではこの４層も地形に沿って東側へと傾斜しているが，２層の灰褐色土よりも薄い堆積を呈している。

５層は赤褐色粘質土で地山である。部分的に玄武岩風化礫を含んでいる所もある。全ての調査区で確認ができており，無遺物層である。

Ｂ・Ｃ列より一段低くなったＤ列は水田として利用しており，Ｄ５区では厚い耕作土の下に床土の黄褐色粘質土があり，地山層である赤褐色混礫土層へつづいている。Ｄ８区では床土の下に２層の茶褐色粘質土が約20㎝堆積しており，その上面に黒色の斑点が全体的に入っている。そして，地山の褐色混礫へとつづいている。遺物は若干であるがこの２層中より弥生土器１点，土師器11点，須恵器１点があった。

以上が，本遺跡における層序であるが，２層から４層にかけてともに弥生土器と土師器・須恵器



第８図　Ａ地点柱穴実測図（1/20）

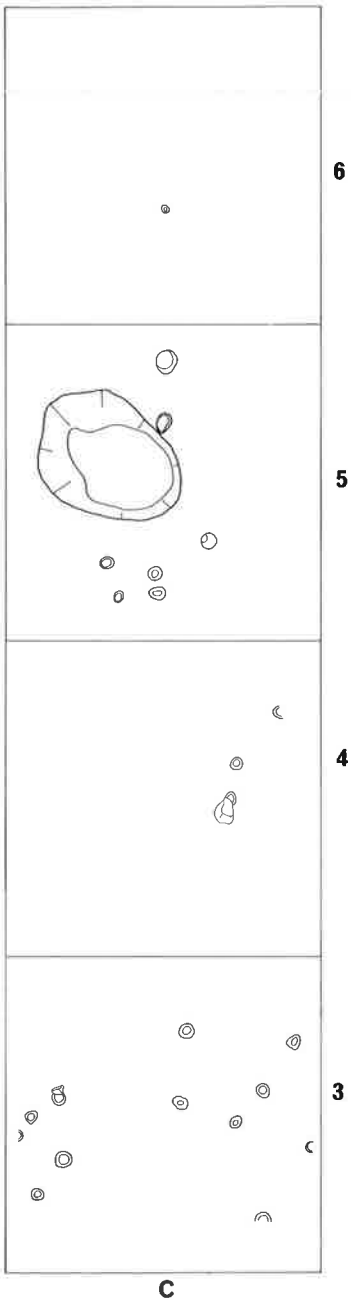
が出土しており，このため層位において時期を区別することはできなかった。しかし，本遺跡が複合する遺跡としての生活の場を提供していることが確認された。

3．検出遺構（第8図～第10図）

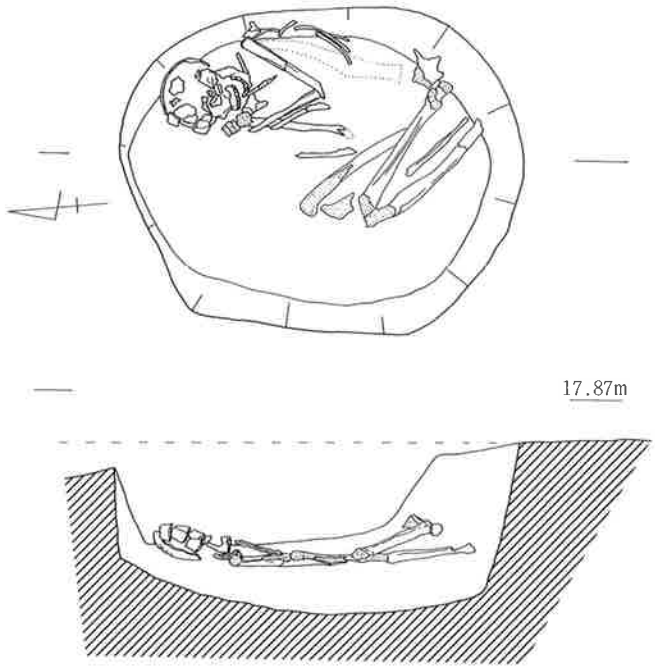
検出した遺構は，A地点の掘立柱建物跡の柱穴，不明土壙，近世土壙墓である。B地点ではかなり削平されていたが柱穴が確認できた。

（1）柱穴（第8図・第9図）

柱穴は調査区域内の全体にわたって65個が検出されている。柱穴は直径が大・小30㎝以内という比較的小さな柱を利用している。柱穴内には焼土及び炭化物を含むものは確認されなかった。柱穴には規則性がなく，建物跡を復元するまでには至らなかった。このため柱穴の時期については明確にし得ないが，周辺出土の遺物から考えても古墳時代に属する可能性があると思われる。しかし，いずれの建物がたったとしても，かなり貧弱な建物になるのではなかろうかと思われる。



第9図　A地点柱穴実測図（1/120）



第10図　近世土壙墓実測図（1/20）

（2）不明土壙

Ｃ５区から検出された。上面はほぼ楕円形で，長径2.5ｍ，短径1.8ｍ，深さ約0.79ｍを呈し，地山の一部まで掘り込まれていた。中から弥生土器７点，土師器15点が出土している。覆土はしまりのない灰茶褐色土で，下部は粘土まざりの灰茶褐色土であった。用途としては掘立柱建物跡に伴う貯蔵穴の可能性がある。時期についてはおおむね古墳時代であろうと思われる。

（3）近世土壙墓（第10図）

調査区の北側部分にあたるＢ９区の北側で人骨を埋葬した土壙墓が検出された。調査前はこの土壙が壁面に含まれていたため，確認のために調査区を南北に２ｍ，西側に１ｍ拡張をした。その結果，土壙は１基のみの検出で，長径1.07ｍ，短径0.86ｍの楕円形プランを呈し，深さは0.47ｍを測る。土壙内の覆土は，茶褐色土を多く含む単一層で，分層ができないことから，人為的に埋められた土と考えられる。土壙内の底面には，頭位をほぼ北に向けた人骨が検出された。人骨の残存状態は非常に良く，頭蓋骨及び歯・上腕骨・大腿骨，脛骨などが確認できた。しかし，胸部及び脊柱の残存状態は非常に悪く粉状になっており，確認できない部分もあった。埋葬形態については，両腕と両膝を曲げた屈葬を呈している。人骨の性別，年齢等については壮年男性であるとの分析結果が出されている。また，埋葬法については，土壙内から鉄釘等の遺物が出土しておらず，鉄釘を全く使用せず製作した棺の中に入れて埋葬された可能性が充分考えられる。最後に人骨の埋葬時期は人骨の残存状態や埋葬方法などから，近世までのぼらないのではないかと考えられる。

４．出土遺物（第11図～第22図）

出土した遺物は，調査時点からいずれも小破片となっており，原形や法量について知り得るものが少なかった。そこで整理については接合・復元を中心として行った。遺物は旧石器時代の３点の石器をはじめ縄文・弥生・古墳の各時代から近世に至るまでの3,688点の出土品が得られた。中でも古墳時代の土師器の資料が最も多くを占め，次いで弥生土器であった。しかし，弥生土器・土師器については接合資料が少なかったが，須恵器については比較的接合ができた。その結果，最長9.6ｍの距離で須恵器片が接合している例もある。かなりの遺物の動きが確認できた。また，狩猟活動に使用された黒曜石製石鏃や石匙は，遺跡のおかれた環境に反映しているものと思われる。旧石器時代の遺物や縄文時代の遺物は，本遺跡と結びつけて考えるよりも，周辺に広がる遺跡との関連性を考える必要があろう。

出土した遺物の傾向では，Ｂ列では９区の東側，Ｃ列では４・５区の東側に集中するようである。出土した土層は２層から４層であり，これも地形が西側から東側にかけて緩やかに傾斜していることに関連しているのであろう。

本書に図示した資料については，大まかな器形・文様や手法が明確で，時代の判別ができるものについてのみ限った。

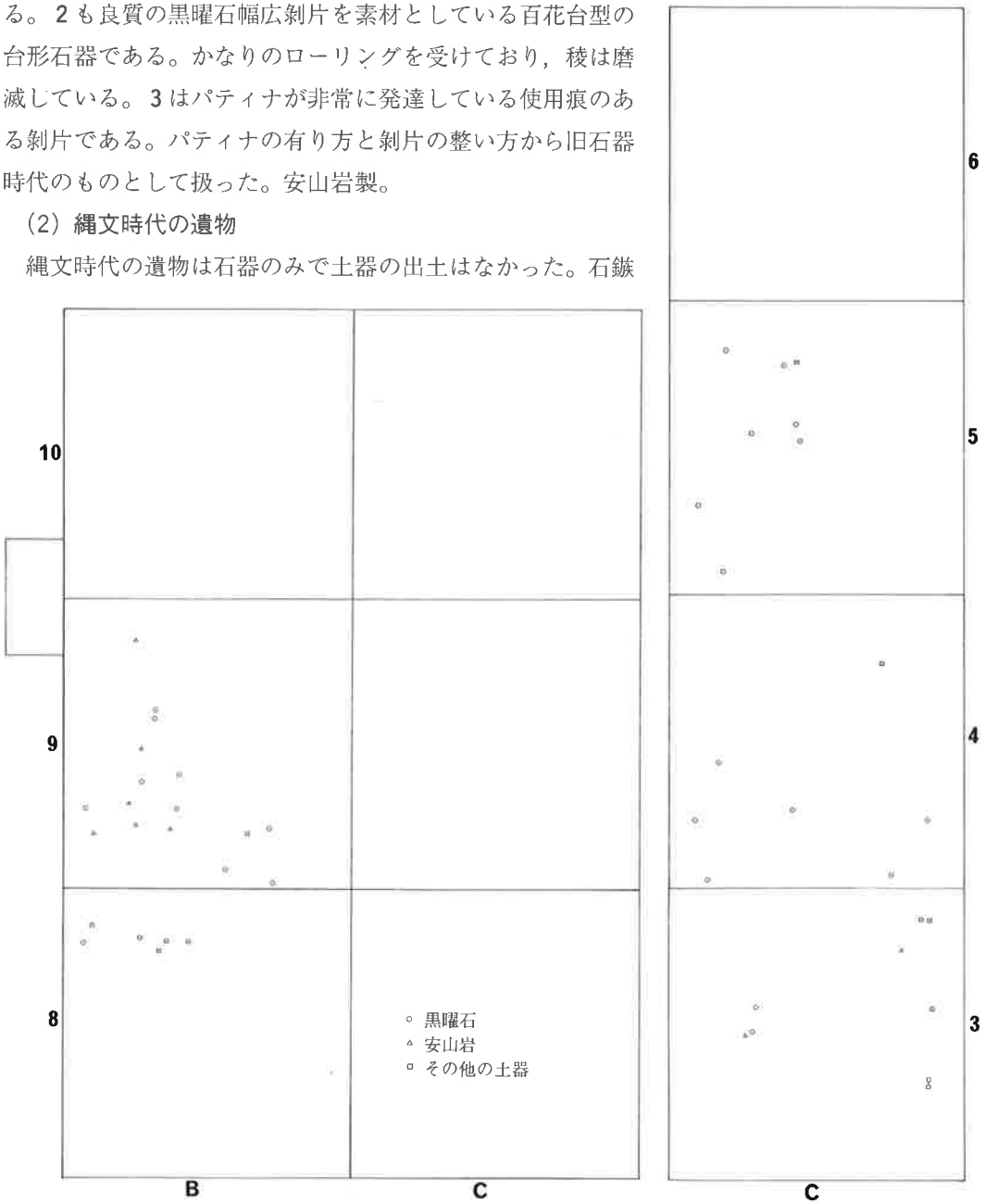
石器は比較的少なく，耕作土及び表採として17点，包含層から39点の56点があった。そのうち図示したのは19点である。

（1）旧石器時代の遺物

３点出土している。**1** は良質の黒曜石製縦長剥片を素材とした小形のナイフ形石器である。基部に微細なブランティング加工を器裏面より集中して行っている。刃部に使用痕が認められる。**2** も良質の黒曜石幅広剥片を素材としている百花台型の台形石器である。かなりのローリングを受けており，稜は磨滅している。**3** はパティナが非常に発達している使用痕のある剥片である。パティナの有り方と剥片の整い方から旧石器時代のものとして扱った。安山岩製。

（2）縄文時代の遺物

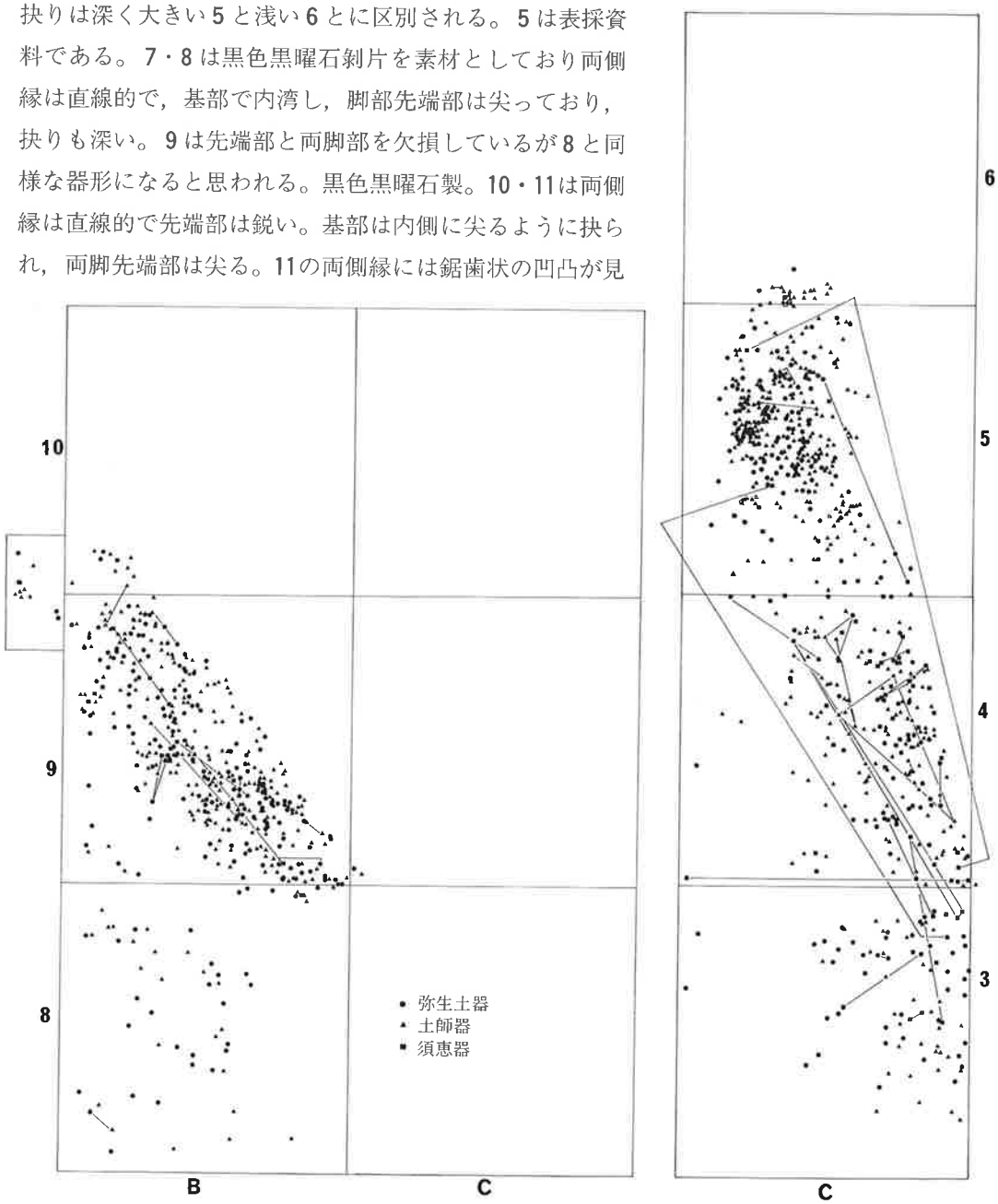
縄文時代の遺物は石器のみで土器の出土はなかった。石鏃



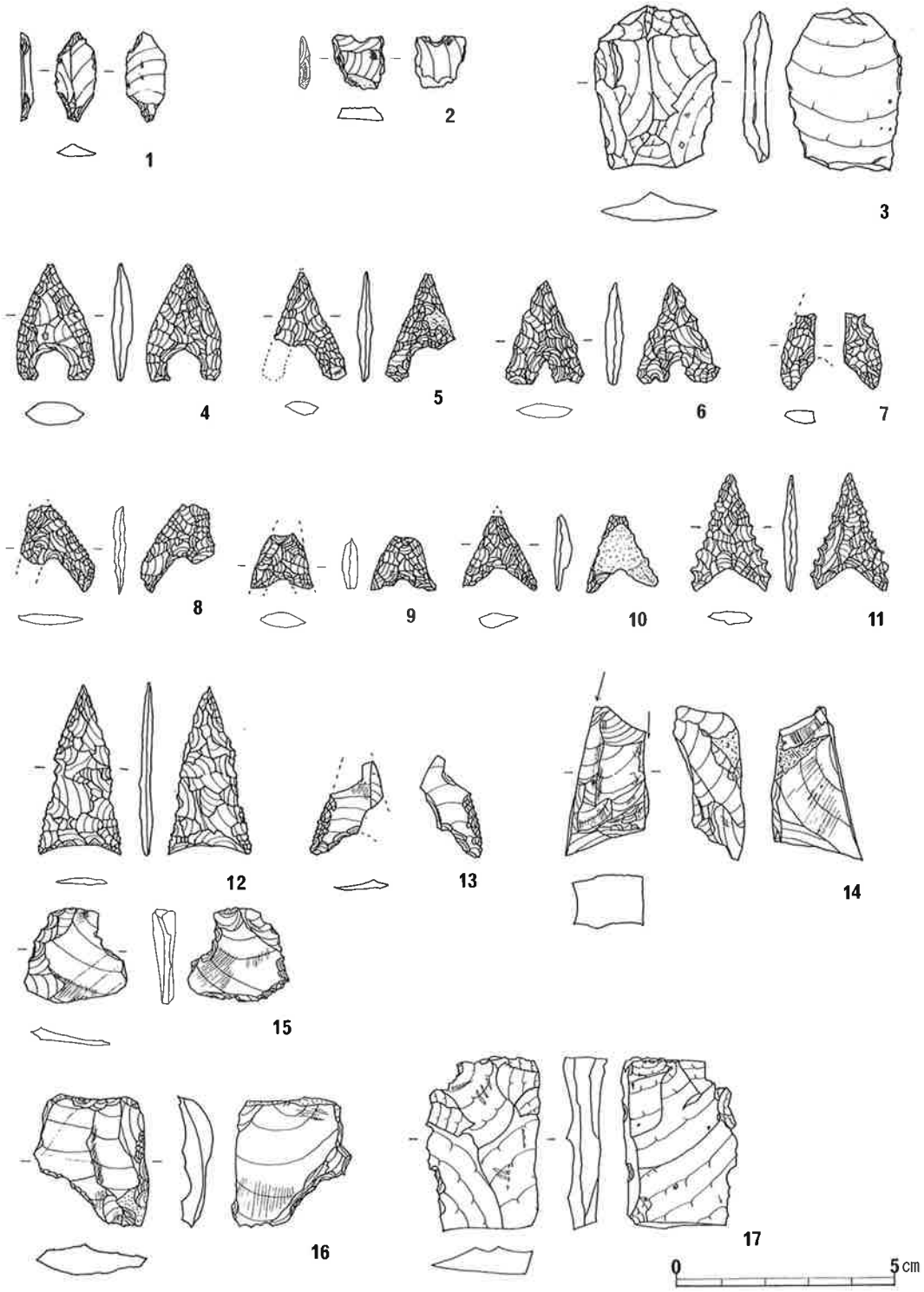
第11図　遺物出土状況（1/120）

は剝片鏃を含めて10点が出土している。時期的には必ずしも層序関係の中で捉えられなかったため石鏃の形態の面から比較して見る。

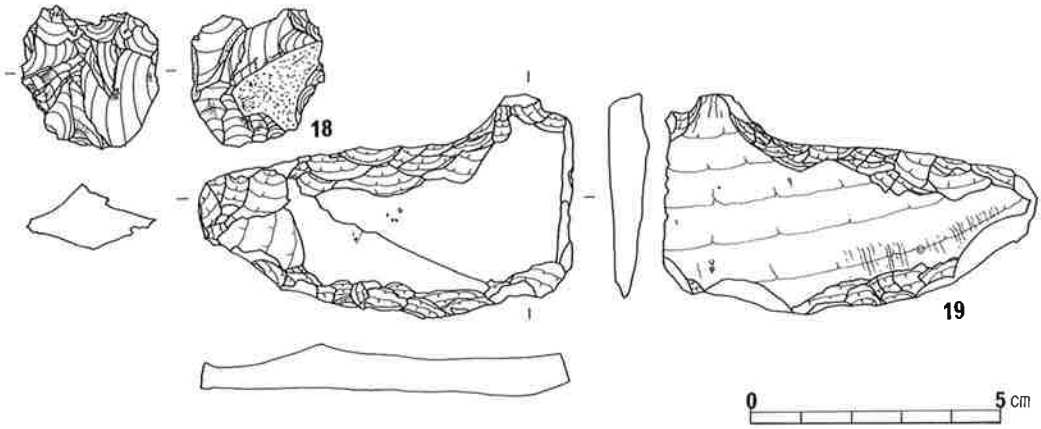
4は所謂，押型文土器に共伴する鍬形鏃の範疇でとらえることができよう。先端部から直線的な両側縁は基部で内湾し丸みをもつ。特に2次加工は丁寧である。抉りは深く大きい。黒色黒曜石製。5・6は黒色黒曜石剝片を素材としており，両側縁は直線的で鋭く先端部で交わる。抉りは深く大きい5と浅い6とに区別される。5は表採資料である。7・8は黒色黒曜石剝片を素材としており両側縁は直線的で，基部で内湾し，脚部先端部は尖っており，抉りも深い。9は先端部と両脚部を欠損しているが8と同様な器形になると思われる。黒色黒曜石製。10・11は両側縁は直線的で先端部は鋭い。基部は内側に尖るように抉られ，両脚先端部は尖る。11の両側縁には鋸歯状の凹凸が見



第12図　遺物出土状況（1/120）



第13図　出土遺物（2/3）



第14図　出土遺物（2/3）

表３　遺物計測表

図版番号	石器番号	器　種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
1	B 9 − 58	ナイフ形石器	黒色黒曜石	1.05	0.98	0.25	0.40	
2	B9−Ⅲ層	台形石器	〃	1.42	1.16	0.33	0.70	
3	B 9 − 109	使用痕ある剥片	安山岩	3.70	2.66	0.72	6.80	
4	B 9 − 29	石鏃	黒色黒曜石	2.65	1.80	0.52	1.80	鍬型鏃
5	0	〃	〃	2.61	1.82	0.34	0.75	A地点東側表採
6	B 9 − 6	〃	〃	2.21	1.80	0.36	1.10	
7	B 9 − 393	〃	〃	1.80	0.85	0.33	0.42	
8	C 5 − 181	〃	〃	2.25	1.30	0.30	0.65	
9	C 5 − 65	〃	〃	1.31	1.46	0.42	0.70	
10	C 4 − 211	〃	〃	1.67	1.64	0.37	0.60	
11	C 5 − 262	〃	〃	2.67	1.83	0.33	0.90	
12	A 5 − 2	〃	灰色黒曜石	3.87	1.89	0.27	1.50	
13	C 5 − 219	〃	黒色黒曜石	2.46	0.99	0.25	0.42	
14	C 3 − 98	彫器	〃	3.77	1.75	1.38	9.40	
15	C 4 − 157	使用痕ある剥片	〃	2.08	2.26	0.50	2.10	
16	B 8 − 50	〃	〃	2.91	2.60	0.76	5.60	
17	B 9 − 247	〃	安山岩	3.87	2.52	1.00	10.18	
18	C 4 − 210	掻器	黒色黒曜石	2.64	2.56	1.29	11.50	
19	0	石匙	安山岩	4.40	7.35	0.97	31.60	B地点東側表採

られ銛先的な機能を有する石鏃である。黒色黒曜石製。12は灰色黒曜石剝片を素材とした石鏃でA５区２層より出土している。比較的大型で，先端部は鋭利に仕上げてある。基部はゆるく内湾し，器面全体の２次加工も丁寧に行われている。13は黒色黒曜石剝片を素材とした剝片鏃である。２次加工は基部から一側縁に行われている。以上のように形態上６つに分類できる。14は黒色黒曜石の残核を利用した彫器である。彫刀面は２面あり，断面は四角形状を呈する。15は使用痕ある剝片で黒色黒曜石製。16は加工痕及び使用痕のある剝片で，幅広の黒色黒曜石製を素材としている。石材は腰岳産原石を使用している。17は安山岩製の使用痕ある剝片である。18は黒色黒曜石石核を円形状に剝離して整えている掻器である。19は表採資料で，横剝ぎの安山岩製石匙である。両側縁から抉られたつまみを作り出し，刃部はゆるいカーブを呈している。横形の形態で，２次加工は全体的に行われているがやや粗雑な観がある。つまみ部先端と片側端部を欠損している。

（3）弥生時代・古墳時代の遺物（第15図～第21図）

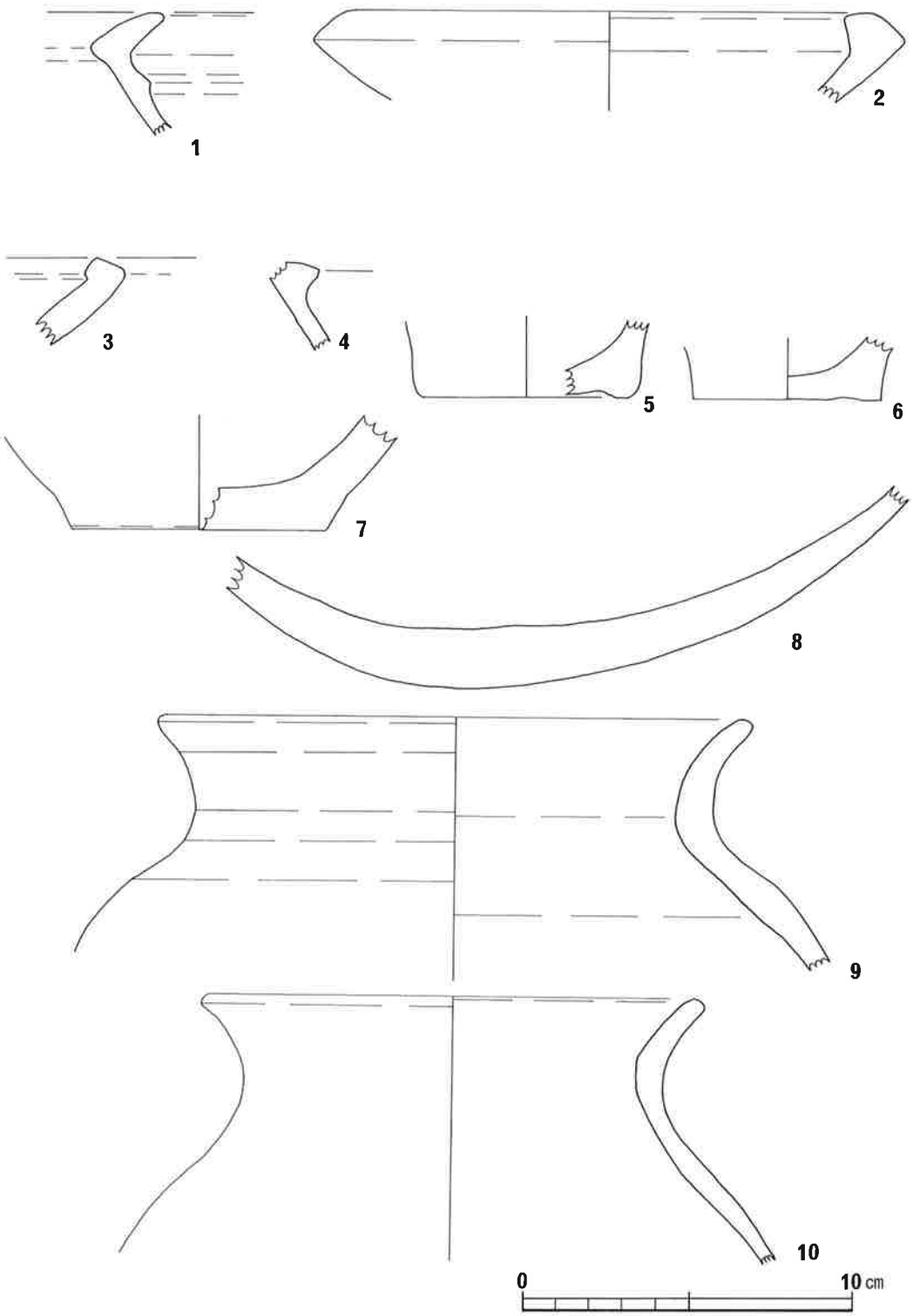
弥生時代の遺物は土器のみで石器の出土はなかった。土器は２層から４層まで出土しているが，２層からの出土が多い傾向を示しており，中心があるように思われる。平成元年度の範囲確認調査においては，弥生中期前半から後半の時期の甕形及び壺形土器の出土と，弥生終末から古式土師器にかけての資料があったが，本調査においても同様な傾向を示している。

1は中期後半代の資料で，口縁部直下に１条の突帯がめぐっている。外面にはわずかではあるが朱塗りの痕跡が認められる。口縁部の内側はつまみあげ尖り気味におさめられている。色調は淡褐色で，胎土には石英粒や茶色の粒子を含み，焼成は良好である。2～3は袋状口縁壺の資料で，2は口縁部が短く内湾するもので，黄褐色を呈している。胎土には石英粒を含んでいる。焼成良好。3は口縁部が小さく直立するもので胎土に石英粒を多量に含んでいる。4は壺形土器の三角突帯貼り付け部分の資料である。後期以降の時期が考えられる。淡茶褐色を呈し，胎土に石英と雲母を含んでいる。5～8は底部片である。いずれも胎土に石英粒と若干の雲母片を含んでおり，褐色を呈している。5の底部はやや上げ底状を呈している。8は丸底気味の壺の底部片である。ハケ目調整が若干認められる。胎土に石英粒・雲母と茶色の粒子を含み，焼成は良好である。一部黒く変色している部分を有する。

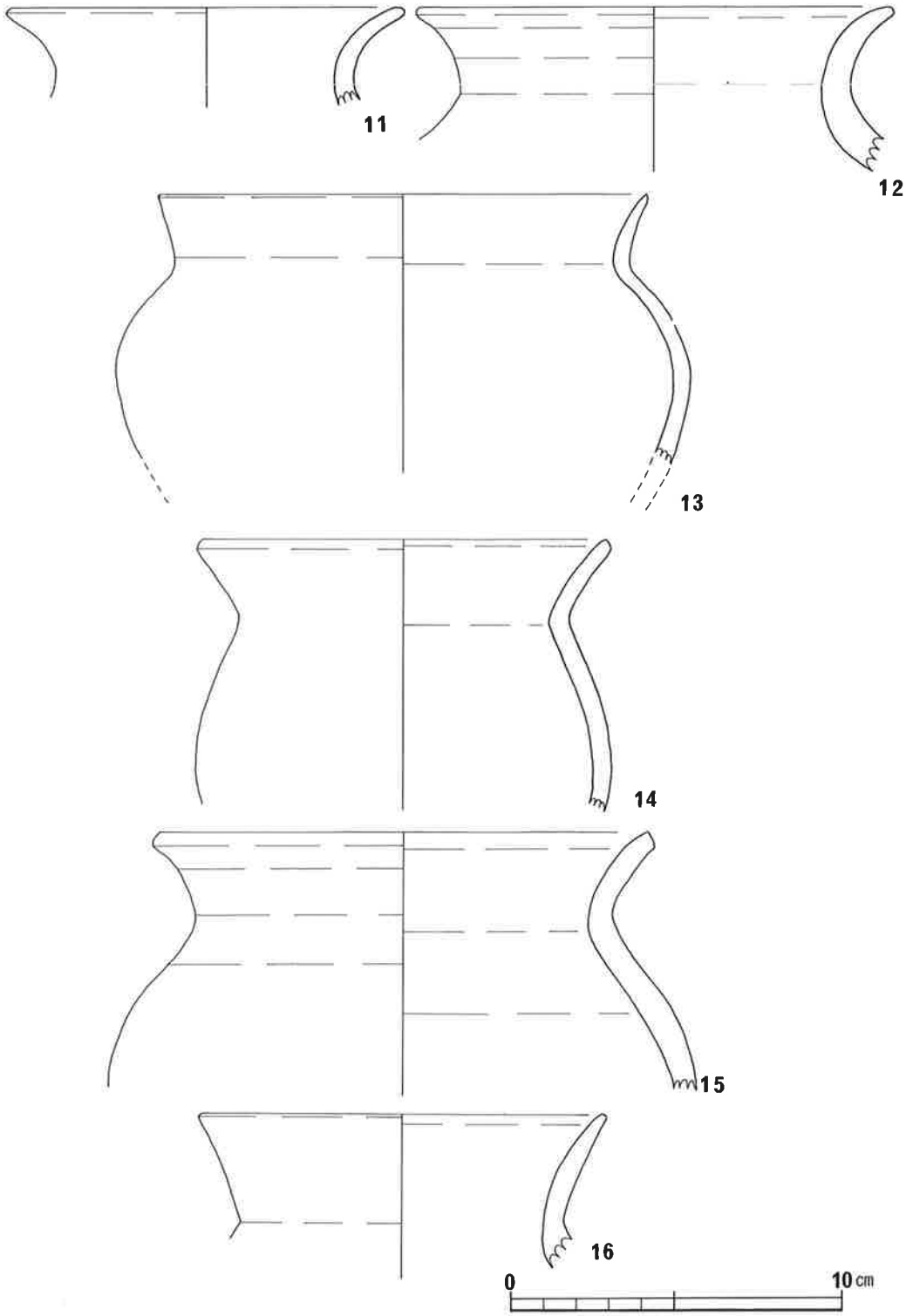
古墳時代の遺物は土器のみの出土で，土師器と須恵器がある。いずれも破片としての数が多く，整理作業はこれらの破片の接合から行った。破片のためか弥生土器と土師器との区別がつきにくい破片もあった。そこで胎土によって区別する方法で行った。しかし，接合に時間をかけてみたが図示できる資料が少なかった。

須恵器は97点の出土があり，そのうち22点が接合している。やはり器形の復元に努めたが，結果は同じであった。26点のみを図示している。

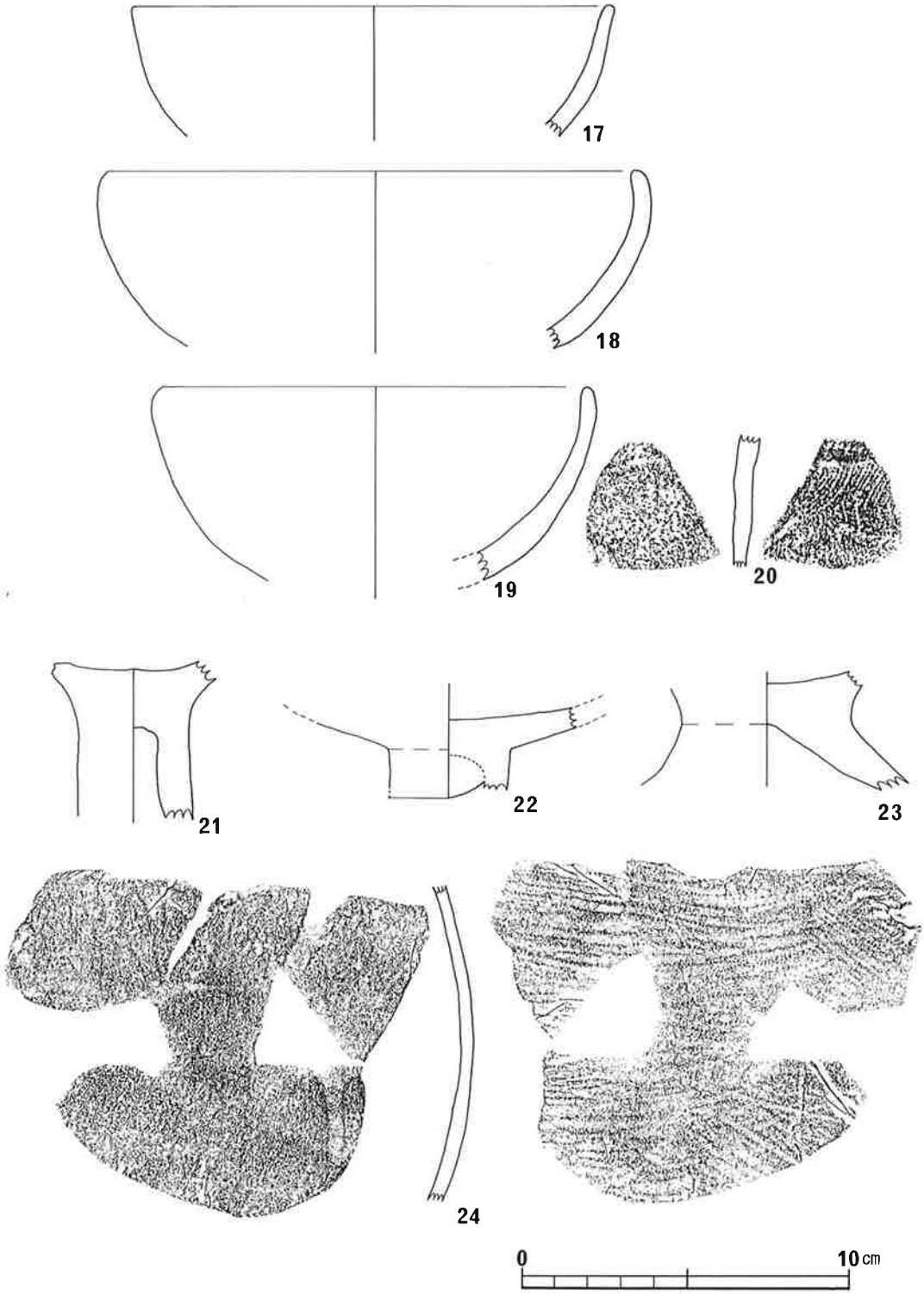
9～16は壺で，口縁部の形態により５つに分類した。9・10は器壁が厚く，短い口縁部を呈している。口縁部は大きく朝顔形に外反しており，口縁部はわりと直立ぎみに立ち上がり，端



第15図　出土遺物（1/2）



第16図　出土遺物（1/2）



第17図　出土遺物（1/2）

部は丸くふくらんでいる。9の口縁部は内外面ともヨコナデ仕上げである。また内面には横ないし斜め方向のケズリを施している。口縁部と胴部には黒色のススが付着している。焼成は良好で赤茶色を呈している。胎土に石英粒と小さな金雲母片を含んでいる。復元口径は17.4㎝を測る。10は内外面とも茶褐色を呈し，9よりやや胎土が粗く石英粒も多く含んでいる。内面には若干であるがケズリが認められる。復元口径は15.2㎝を測る。11・12は9・10よりも口縁部の外反が大きくなり，口縁端部はつまみ上げて薄く仕上げている。11は黄褐色を呈し焼成は良好である。胎土には若干の茶色の粒子を含んでいる。内外面ともナデ仕上げである。復元口径は12㎝を測る。12は茶褐色を呈し，胎土に石英粒・黒雲母・長石を含んでいる。口縁端部はヨコナデ仕上げで，内面にケズリが認められる。13はやや扁球形の胴部を呈し，口縁部は短く外反し，端部は薄く仕上げている。外面は淡褐色を呈し，内面は暗褐色を呈している。内面はナデ仕上げ，外面は横ないし斜め方向のケズリを施している。胎土に石英粒と茶色の粒子を含んでいる。復元口径は14.8㎝を測る。14・15は9・10よりも外反が弱い資料で，口縁部は直線的に仕上げている。14は粗い胎土で石英粒を多く含んでいる。内外面とも茶褐色を呈している。15はやや厚い器壁で，胎土に石英粒を多く含んでいる。口縁部はヨコナデ，内面にケズリが認められる。復元口径は15.2㎝を測る。16は口縁部が直線的に開き，口縁端部はやや尖り気味である。淡赤褐色を呈し，焼成は良好である。胎土に茶色の粒子を含んでいる。復元口径は12.4㎝を測る。

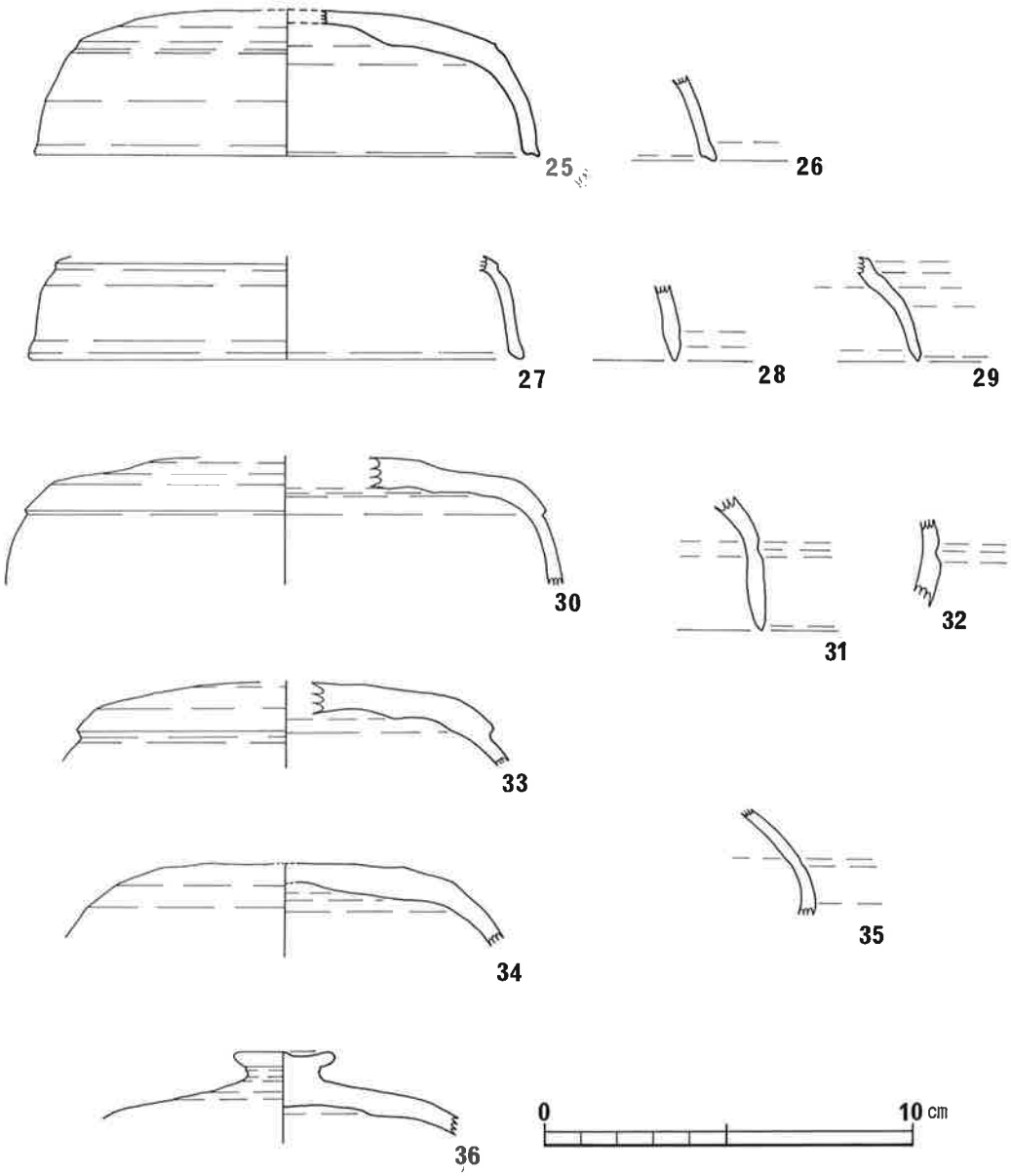
17～19は杯である。内湾しながら立ち上がり，口縁付近はほぼ直線を呈する17と，内湾しながら開く18・19とに分類できる。17は淡褐色を呈し，焼成は良好である。内外面ともヨコナデ仕上げである。18は赤茶色を呈し，焼成も良好である。胎土に石英粒と茶色の粒子を含んでいる。丸底を呈すると思われる。復元口径は16.2㎝を測る。19はやや尖り気味の丸底を呈すると思われ，内外面ともヨコナデ仕上げ，胎土に茶色の粒子を含む。色調は褐色を呈する。

20は壺の肩部片か。淡褐色を呈し，外面に朱塗りの後に，ハケ目調整が認められる資料である。焼成は良好で，茶色の粒子を含んでいる。

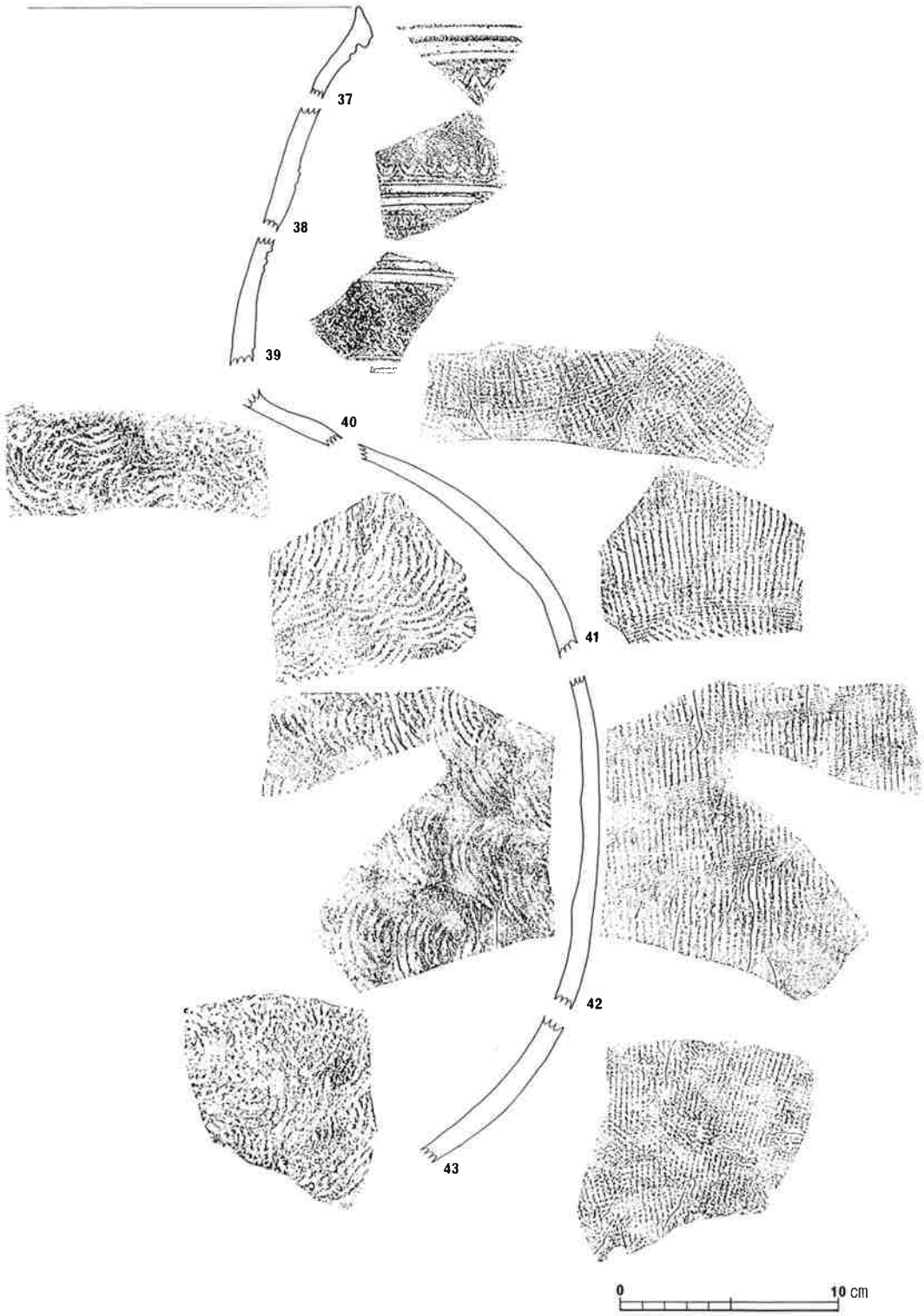
21～23は高杯である。杯部と脚部の接合部分を破損したものが多く，残念ながら器形を知り得るものが少ない。21は脚柱部で細長い形状を呈している。全面茶褐色を呈し，胎土に石英粒と金雲母片を含んでいる。内面は右廻りにケズリを行っている。22はいわゆるソケット式の痕跡を残している。淡褐色を呈し，胎土に茶色の粒子を含んでいる。23は短脚の脚部で，屈曲部から「ハ」字形に開いている。色調は暗灰茶色を呈し，胎土に石英粒と黒雲母片を含んでいる。焼成は普通である。

24は甕形土器の胴部片と思われる。器壁が薄く，外面にはヘラケズリしナデ仕上げしており，内面はハケのあとナデ仕上げをしている。外面は黒く変色しており，内面は暗茶褐色を呈している。胎土には小さな石英粒を含んでいる。

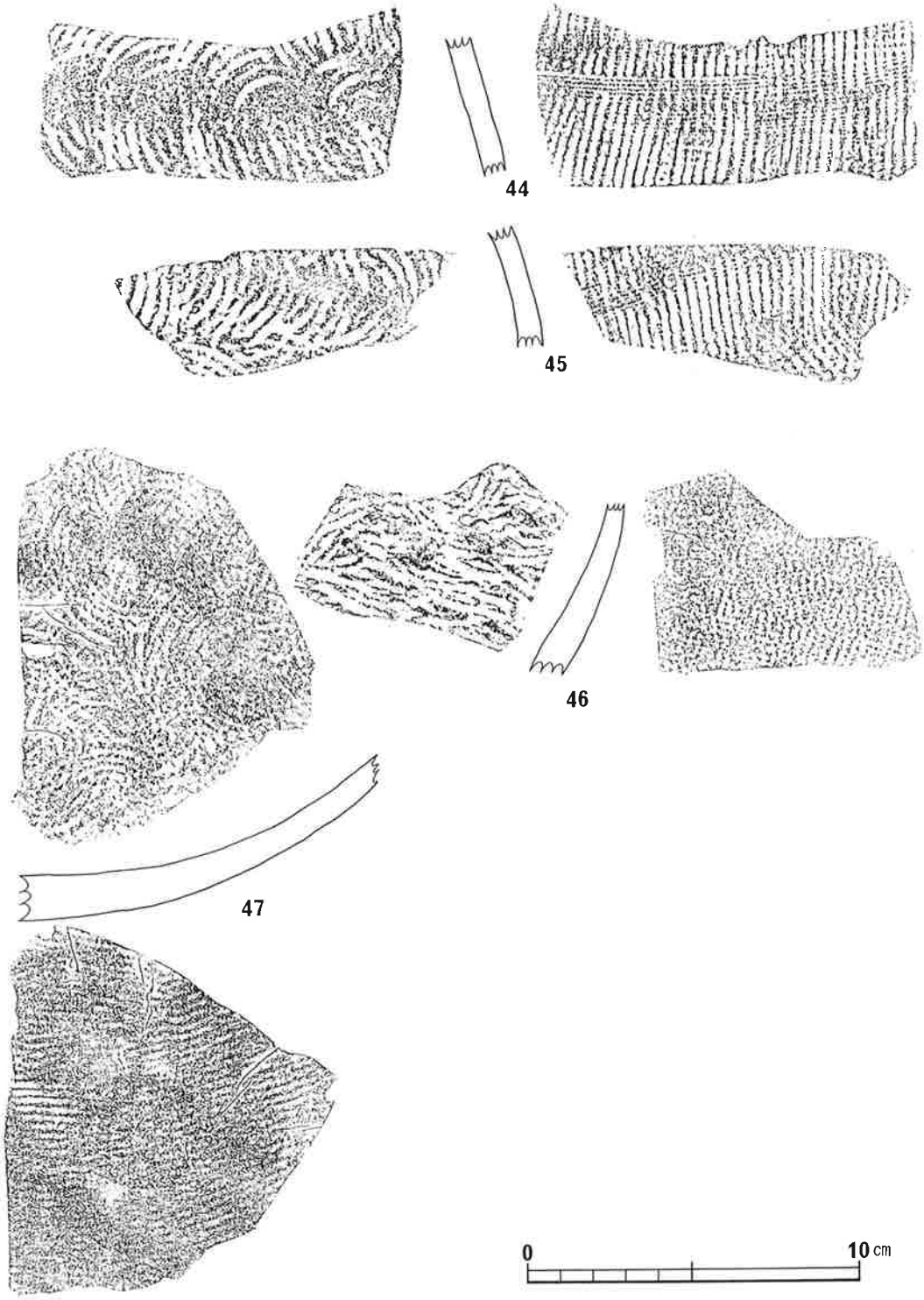
25～50は須恵器である。須恵器は杯蓋と甕の器種にかぎられている。このうち26点を図示す



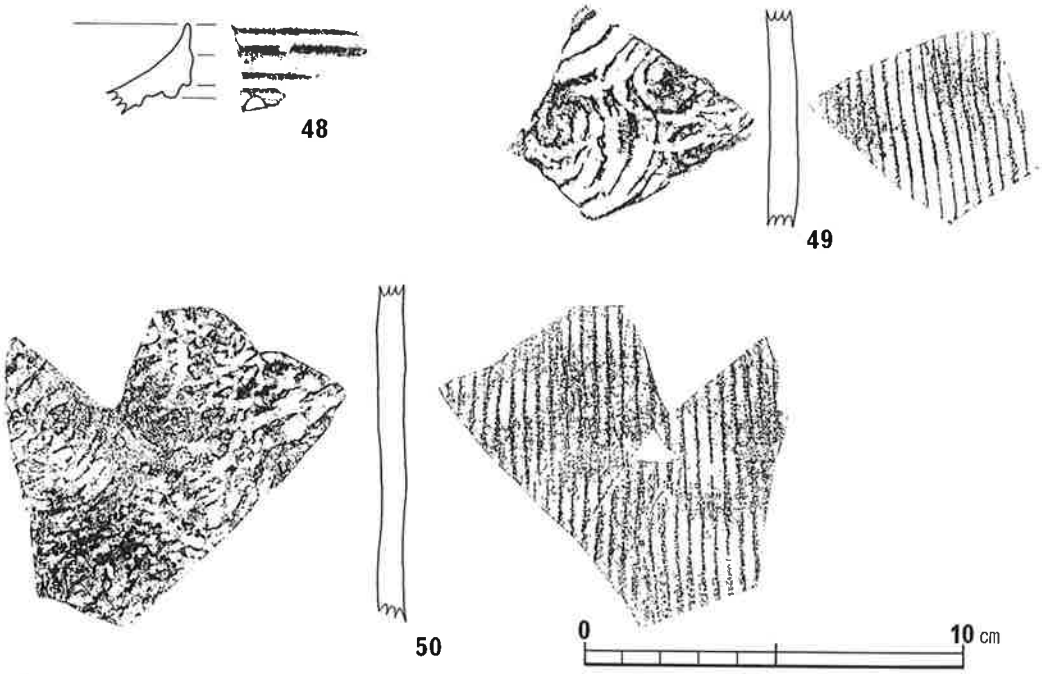
第18図　出土遺物（1/2）



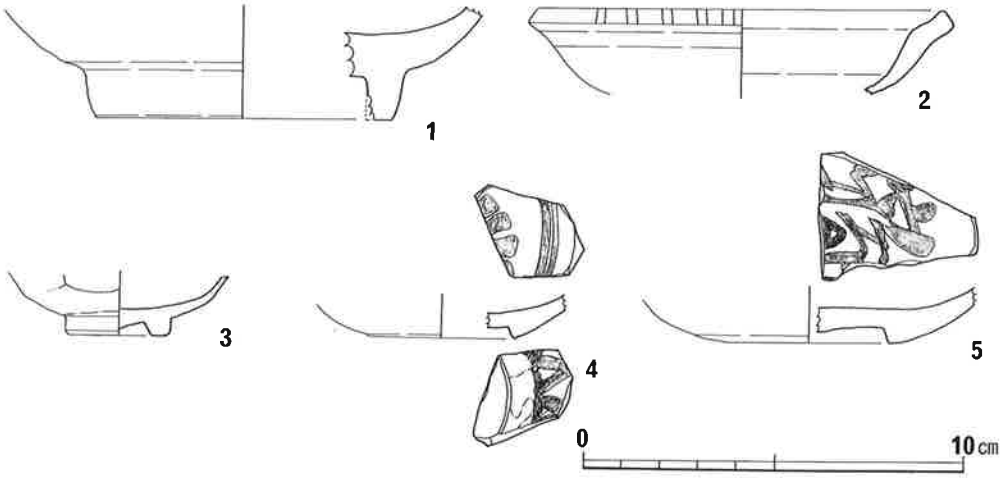
第19図　出土遺物（1/3）



第20図　出土遺物（1/2）



第21図　出土遺物（1/2）



第22図　出土遺物（1/2）

ることができた。

25～36は杯蓋である。つまみを有する**36**とつまみを有しないものとに大別することができる。**25**は唯一の器形が分かる資料である。天井部と口縁部の境に凹線を施している。口唇部内面にも沈線を有しているため古式の特徴を残している。形態的には天井部が丸味をもち，体部から口縁部にかけて内湾している。調整は回転ヘラケズリで，内面はナデて仕上げている。口径は13.6㎝を測る。器高は約4㎝を呈している。色調は青灰色で，胎土に大粒の石英を含んでいる。**26**は**25**と同一器形で，口唇部内面に沈線を有している。調整は回転ヘラケズリである。色調は灰色を呈している。**27**は天井部を失っているが口径13.3㎝を測る。残存部には，ヘラケズリはみられない。口縁端部はやや丸味をおびているが，稜線部はシャープに仕上がっている。色調は灰色を呈している。**28・29**は口唇端部がやや尖り気味におさめている。**29**は天井部と口縁部の境の凹線は明確ではなくなる。**30**は外面天井部に回転ヘラケズリがみられ，他はナデを施している。色調は灰色で，胎土には石英粒を含んでいる。**31・32**は天井部と口縁部との境の凹線がシャープさを欠いている。**31**はナデ仕上げ。色調は灰白色を呈している。**32**もナデ仕上げで，色調は灰黒色を呈している。**33・34**は天井部に回転ヘラケズリがみられ，その他はナデて仕上げている。**33**は胎土に砂粒を含むが焼成が良好で堅く焼けている。**35**は破片で，天井部と口縁部の境は明確ではない。**36**は宝珠つまみが貼り付けられている資料で，上面のくぼんだ偏平なつまみである。天井部は回転ヘラケズリ，他はナデ仕上げである。焼成は良好で灰色を呈している。

37～50は甕である。色調及び胎土より3個体に別れるようだ。**37～43**は同一個体になるものと思われる。器高は約60㎝前後の大甕であろう。口縁部外面に櫛描波状文が2段に施文されており，内面調整はナデてある。口縁部は断面三角形に肥厚し，端部がやや上にはねている。胴部はやや肩が張り，球状にちかく，最大径は中位よりやや上にある。胴部外面にはタタキのあと軽くヨコハケ目，内面に同心円文を残している。色調は灰色で，砂粒を含んでいる。**44～46**も甕の胴部片である。**37～43**の資料と同一個体の可能性が高く，同様な作りである。**47**は明らかに別個体と分かる甕の底部付近の資料である。色調は灰青色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。外面はタタキ，内面は同心円文が施してあるが，使用のためか内外面ともに磨滅が著しい。**48**も甕の口縁部片で，**37**の資料と胎土が類似しており同一個体の可能性がある。しかし，櫛描波状文が**37**より上方に施されておりシャープである。**49・50**は同一個体で，色調は褐灰色で，胎土は灰紫色で砂粒を含んでいる。外面はタタキ，内面に同心円文を残している。

以上が弥生時代から古墳時代にかけての出土遺物であるが，個体数が少なく，セット関係も十分とはいえないが，土師器では，壺・杯・高杯。須恵器は，杯蓋・甕の資料にかぎられるようだ。特に杯身の資料がない。平成元年度の確認調査では杯身等も出土しており，ただ単に地点の問題であるのか今後解明しなければならない問題である。編年的位置や供給の問題等については後日機会を得て，再考したいと考えている。今回出土の遺物の中心は6世紀中頃までの

資料と思われる。

その他の遺物（第22図）

1～5は輸入品の磁器で**1**は龍泉窯系青磁碗で，高台が断面四角形で，底部の器肉も厚いⅠ－２類に属すると思われる。釉は茶色味を帯びた緑色で，高台畳付まで施釉されている。胎土は灰色である。Ｄ５区２層出土。**2**は青磁皿で釉は淡緑色を呈し，胎土は灰白色で黒斑を有する。全体に貫入が走っており，唇部にはキザミを有する。**3**は多角杯で灰白色の釉には細かい貫入が伴い，15世紀後半代であろう。Ｄ５区２層出土。**4**と**5**は染付皿で，いわゆる「碁笥底」を呈している。**4**は外面下部に芭蕉葉文が残っている。内面見込みには２条の圏線がめぐり，中に花と思われる文様が見られる。小野氏分類皿Ｃ群Ⅰ類に相当する。**6**は内面見込みに人形化した吉祥の文字を描いている。ともに15世紀後半から16世紀中頃にかけての資料である。

このように13世紀～16世紀にかけての資料が少ないながら出土しているが，これらの時期に伴う住居関連の遺構は検出されていない。このため近隣から流入したことが考えられる。しかし，近隣にはこの時期に関する遺跡が確認されていない。あえて述べるならば城ノ越城跡があるのみである。付近での中世の時期の集落跡が発見されることを期待したい。

長崎県松浦市田原遺跡出土の近世人骨

佐伯和信*・松下孝幸*・小山田常一**・分部哲秋*・折原義行*

キーワード：長崎県、近世人骨、男性、広顔、扁平脛骨

はじめに

田原遺跡は長崎県松浦市御厨町田原に所在する。本遺跡は竜尾川地区県営圃場整備にかかる工事によって発見された遺跡で、1990年に発掘調査が行なわれ、土壙墓から1体の成人骨が発掘された。

長崎県では近世人骨の出土例は少なく、本県での近世人の特徴はまだ明らかではない。松浦市では楼楷田遺跡から近世人骨が出土しているが、これは保存状態が悪いものであった。本例の保存状態はきわめて良好で、この地域の近世人の特徴を知る上できわめて貴重な資料となるものである。出土人骨の人類学的観察や計測を行ない、周辺地域の例と比較検討してみたので、その結果を報告する。

資　料

本遺跡から出土した人骨は1体で、その埋葬遺構は土壙墓である。また、本人骨は下記の所見から、壮年の男性骨と推定される。

本人骨の残存部分は図2に示すとおりである。また、この人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より、近世に属する人骨と推定されている。

今回は比較資料として、同じ松浦市の楼楷田近世人(松下・他、1985)の他に福岡県の天福寺近世人(中橋、1987)、熊本県の桑島近世人(脇、1970、立志、1970)、鹿児島県の松之尾近世人(松下、1981)、成岡・西ノ平近世人(松下・他、1983)、与論島近世人(大山、1956)、与論島近代・近世人(松下・他、1988)および沖縄県のクジチ近世人(松下・他、1988)、城間近世人(松下・他、1990)を用いた。

*Kazunobu SAIKI, Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Yoshiyuki ORIHARA
Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine
〔長崎大学医学部解剖学第二教室〕
** Jouichi OYAMADA
Department of Oral Anatomy, Nagasaki University School of Dentistry
〔長崎大学歯学部口腔解剖学第二講座(主任：六反田篤教授)〕

所　見

本人骨の残存部は図２に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

１．頭蓋

（１）脳頭蓋

右側半の大部分および左側の側頭骨後部から頭頂骨後部にかけて残存している。外後頭隆起はあまり発達しておらず、また乳様突起もそれほど大きいものではない。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右ともに認められない。縫合は、三主縫合のいずれも内外両板とも開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が174㎜、右側半から算出した頭蓋最大幅の推定値が〔138〕㎜である。従って、頭蓋長幅示数は〔79.31〕となり、頭型は短頭に近い中頭型(mesokran)に属している。

（２）顔面頭蓋

頬骨弓および鼻骨を除く右側半と、上顎骨歯槽突起および下顎骨の大部分が残存している。眉上弓と眉間の隆起はやや強いが、鼻根部の陥凹はほとんど認められない。また、鼻骨が鼻根部を除いて残存していないので、その隆起状態は不明であるが、鼻骨の鼻根部の部分はほとんど隆起していないことから、鼻根部は扁平であった可能性が強い。しかし鼻根部は狭く、扁平といっても中世人に見られるような、鼻根部が広くて扁平であるのとは異なる形態である。

計測値は、顔高が122㎜、上顔高が69㎜で、顔高は大きく、上顔高もわずかに大きい。一方、幅径は計測できないが、右側半を使って中顔幅の推定値を算出すると〔106㎜〕となり、これからウィルヒョウーの顔示数、上顔示数を算出すると、それぞれ〔115.09〕、〔65.09〕となり、広顔傾向が認められる。

眼窩幅は43㎜(右)、眼窩高は34㎜(右)で、眼窩示数は79.07(右)となり、右側は mesokonch(中眼窩)に属している。

鼻幅は45㎜、鼻高は52㎜で、鼻示数は48.08となり、mesorrhin(中鼻)に属している。鼻根部は計測できなかったが、幅は狭く、前頭突起はいくぶん矢状方向を向いている。

側面角は、全側面角が83度、鼻側面角が87度、歯槽側面角は73度で、歯槽性の突顎傾向は弱い。

下顎骨は、オトガイ高が38㎜で、高径は大きく、下顎体は頑丈であるが、下顎枝は枝高が53㎜(右)、枝幅が32㎜(右)で、下顎体の大きさの割に下顎枝の高径と幅径が小さく、下顎枝はきゃしゃである。しかし、下顎角はやや外反している。

２．歯

上下両顎には歯が釘植している。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

$M_2M_1P_2P_1C\ \ I_2I_1$	$I_1I_2C\ \ P_1P_2M_1M_2$
$M_3M_2M_1P_2P_1C\ \ I_2I_1$	$I_1I_2C\ \ P_1P_2M_1M_2M_3$

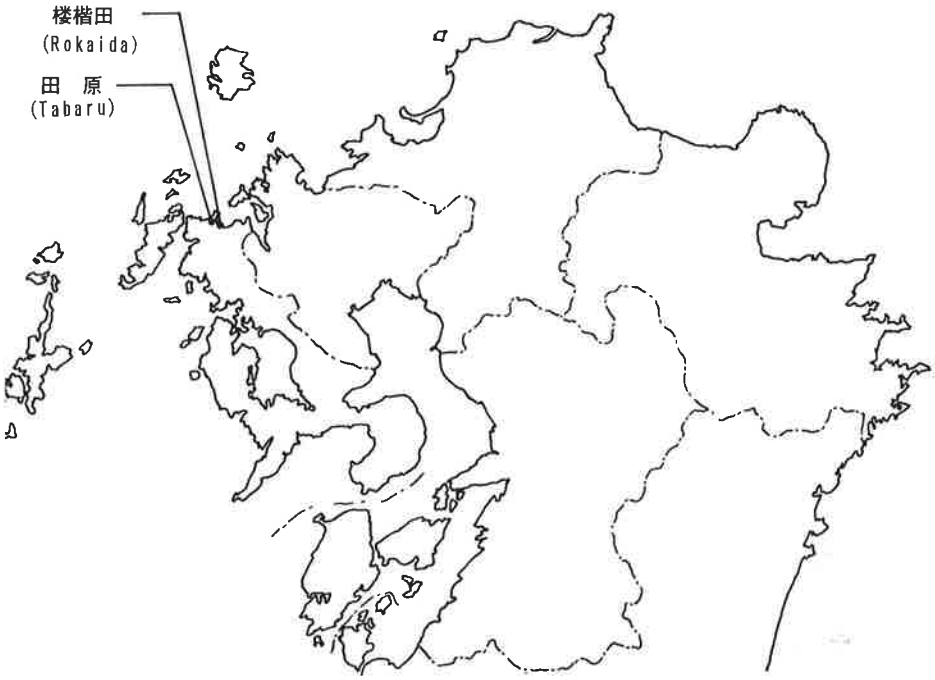
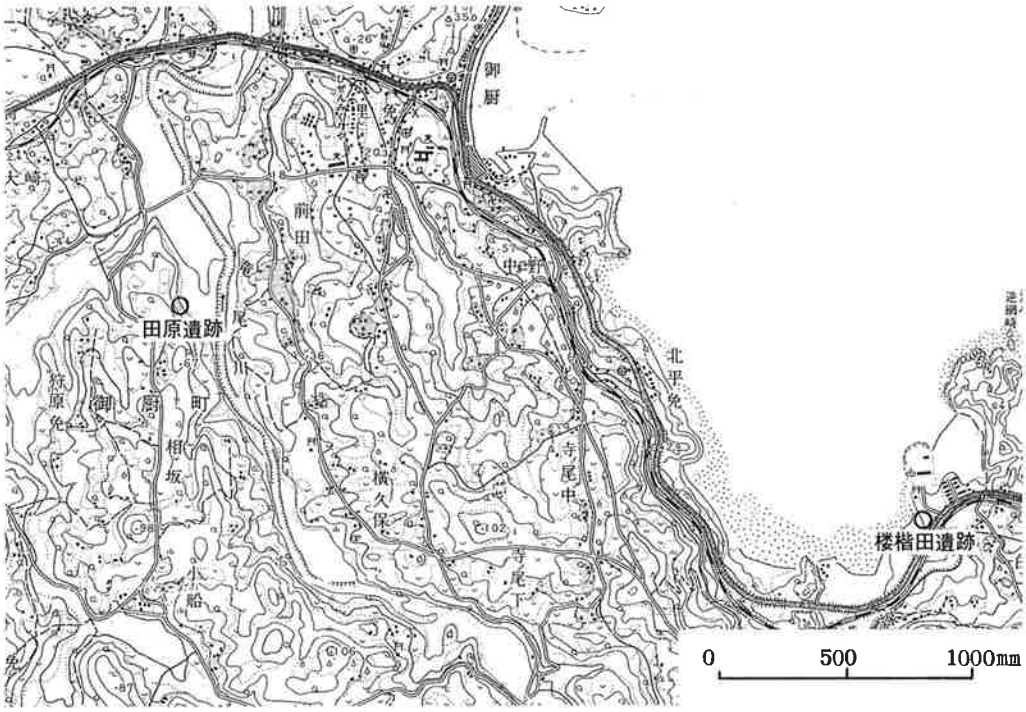


図１．遺跡の位置(Fig.1. Location of the Tabaru site,Matsuura City, Nagasaki Prefecture)



咬耗度はBrocaの１度である。なお、上顎の両側の第三大臼歯は歯槽の状態から、未萌出と考えられる。先天的欠損であろう。咬合形式は鋏状咬合である。

３．四肢骨

（１）上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨および尺骨が残存しているが、橈骨、尺骨は小骨片のみで部位は不明である。

①肩甲骨

右側の肩甲棘から関節窩にかけて残存している。計測はできなかったが、頑丈そうである。

②鎖骨

両側とも残存している。残存部から推測して、長さはやや長いようである。

③上腕骨

両側とも残存しているが、右側は内側が、左側は外側が欠損しており、計測できない。長さはやや長いようである。

（２）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨が残存している。ただし、腓骨は骨体の一部しか残存していない。

①寛骨

両側とも残存しているが、腸骨翼、坐骨、恥骨がともに欠損している。大坐骨切痕の観察ができたが、下後腸骨棘が欠損しているために正確な判断ができないが、残存部を観察したところではこの角度は大きい。

②大腿骨

両側とも遠位端を欠損している。粗線の発達は悪いが、骨体両側面の後方への発達は良好である強い。長さは、残存部から推測すると、やや長かったものと考えられる。大腿骨頭の一部には骨端線が認められる。

計測値は、骨体中央矢状径が28㎜(右)、27㎜(左)、骨体中央横径が26㎜(右)、骨体中央周が84㎜(右)で、近世人骨としては平均的な値を示している。骨体中央断面示数は107.69(右)で、骨体両側面は後方へ発達している。上骨体断面示数は74.19(右)となり、骨体上部は扁平である。

③脛骨

右側の骨体中央部のみ残存している。骨体はやや太く、扁平である。ヒラメ筋線の様態は不明である。右側骨体の断面形はヘリチカのＶ型を呈している。

計測値は、中央最大径が31㎜(右)、中央横径が20㎜(右)、骨体周が85㎜(右)で、中央断面示数は64.52となり、骨体は近世人としてはかなり扁平である。

４．性別・年令

大坐骨切痕の角度が大きいようであるが、保存状態が良くないので、この部分から確実に女

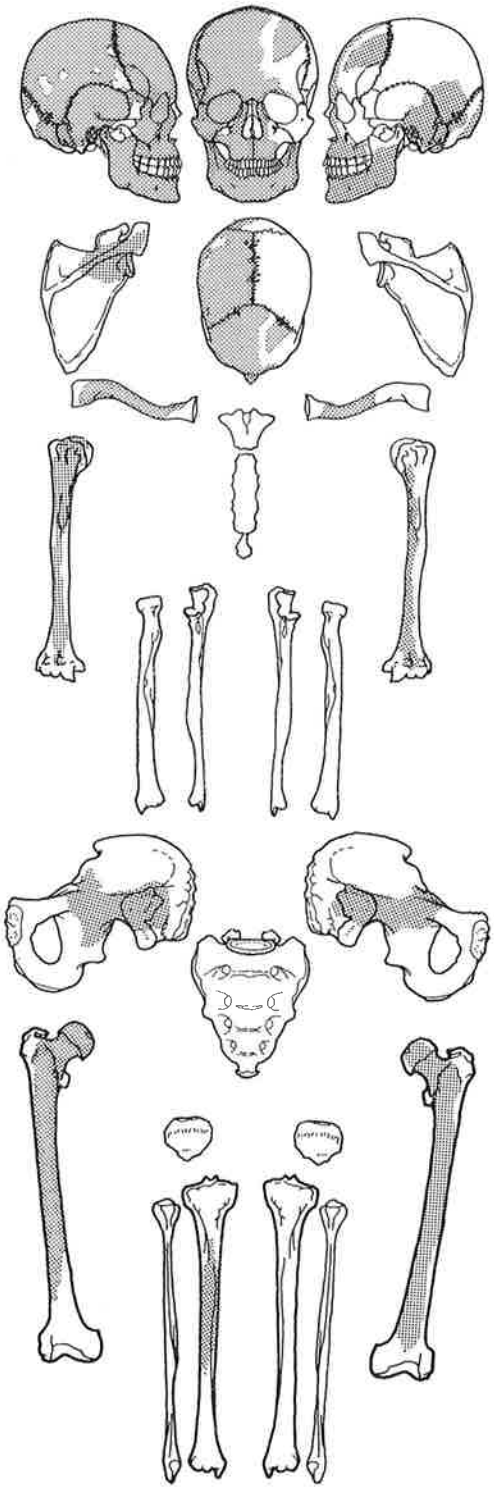


図２．人骨の残存部、アミかけ部分

(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

性と判別することはできない。むしろ眉上弓や眉間がやや隆起していること、四肢骨の径が大きいこと、脛骨体の形態などから、男性の可能性の方が強いようである。年令は、三主縫合が内外両板とも開離していることと大腿骨頭に骨端線が認められることから、壮年と考えられる。

考　　察

頭蓋、大腿骨および脛骨について、周辺地域の近世人と比較し、検討を行なってみた。

1．頭蓋

まず、頭型であるが、本例の頭蓋長幅示数は〔79.31〕となり、短頭に近い中頭型に属している。周辺地域の例をみてみると(表１)、沖縄県のクジチ近世人が短頭型であることを除けば、あとは長頭型(桑島近世人、松之尾中・近世人)か、中頭型を示しており、中頭型でも短頭に傾いた例はない。

日本人の頭型の時代変化は、一般的には中世で最も長頭になり、その後短頭に向かい、現代人では短頭型であることが明らかになっている。弥生時代や古墳時代に短頭型を示す南九州地域においても中世や近世においては長頭型や中頭型になっていることが、与論島や松之尾の例で明らかになった。しかし、沖縄県ではクジチ近世人が短頭型を示しており、南島でも若干の地域差が存在するのかもしれない。本例は短頭に近い中頭型を示しているが、このような特徴が本県の近世人の傾向かどうかは例数が少ないので明確ではないが、西北九州地域の弥生人の頭型も短頭に近い中頭型を示していることも注意しておきたい。

次に、顔面頭蓋であるが、本人骨の特徴は高さがやや高いが、それ以上に幅が広く、広顔傾向を示している。比較表を表２に示しているが、顔高、上顔高は鹿児島県の松之尾中・近世人と与論島近世・近代人よりは大きいが、福岡県の天福寺近世人よりも小さく、熊本県の桑島近世人や与論島近世人の平均値に近い。中顔幅は表２では最大値を示しているが、そのかなでは沖縄県のクジチ近世人の値に近い。ウィルヒョーの顔示数、上顔示数はともに表２中最小値となり、低・広顔傾向が最も強い。また、近隣の古墳人、弥生人の顔示数、上顔示数と比較してみると、古田Ａ古墳人では113.86、63.37、西北九州弥生人では111.78、64.84であり、本近世人の低・広顔傾向の程度はこれらの古墳人、弥生人と同じ程度か、それよりはわずかに弱い程度である。

眼窩については、桑島近世人の眼窩示数がやや大きな値を示しているが、その他の資料との間には大きな差がない。しかし、鼻部は幅が狭いので、鼻示数が48.08となり、表２では最小値となっている。鼻幅は顔面の幅径が広いのとは対照的である。

歯槽側面角は与論島の近世・近代人とほぼ大差なく、表２では大きい方に属し、歯槽性の突顎傾向は弱い。

表1　脳頭蓋計測値（男性、mm）（Table 1. Comparison of male calvarial measurements and indices）

		田原 近世人		天福寺 近世人（中橋）		桑島 近世人（脇）		松之尾 中・近世人（松下）		与論島 近世・近代人（松下・他）		与論島 近代人（大山）		クジチ 近世人（松下・他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	1	174	38	182.6	13	180.13	11	185.18	46	184.11	37	185.33	3	174.00
8.	頭蓋最大幅	1	〔138〕	38	138.6	13	131.02	12	138.42	46	142.26	38	142.84	3	145.67
17.	バジオン・ブレグマ高		—	33	139.2	11	135.88	7	137.43	34	137.32	33	136.48	1	140
8/1	頭蓋長幅示数	1	〔79.31〕	37	76.0	13	72.74	11	74.91	45	77.32	37	77.31	3	83.90
17/1	頭蓋長高示数		—	33	76.2	11	75.48	6	74.91	34	74.25	33	73.75	1	80.00
17/8	頭蓋幅高示数		—	33	100.8	11	104.62	7	97.78	34	96.47	33	95.99	1	95.24

〔　〕は片側を２倍して求めた推定値

表2　顔面頭蓋計測値（男性、mm、度）（Table 2. Comparison of male facial measurements and indices）

		田原 近世人		天福寺 近世人（中橋）		桑島 近世人（脇）		松之尾 中・近世人（松下）		与論島 近世・近代人（松下・他）		与論島 近代人（大山）		クジチ 近世人（松下・他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
41.	側顔長	1	73(右)		—	8	70.00	9	73.11	20	72.40	38	74.58	3	71.33
45.	頬骨弓幅		—	25	136.4	5	126.32	5	133.40	41	135.00	37	138.84	1	139
46.	中顔幅	1	〔106〕	24	101.8	7	101.14	10	100.40	48	100.60	37	102.03	2	105.50
47.	顔　高	1	122	14	126.9	4	122.40	11	120.27	1	125	6	122.67		—
48.	上顔高	1	69	18	74.5	7	70.54	8	66.75	42	66.10	25	70.04	3	70.00
47/46	顔示数(V)	1	〔115.09〕	13	123.9	3	115.80	10	120.04	1	123.76	6	118.87		—
48/46	上顔示数(V)	1	〔65.09〕	17	73.1	7	70.15	7	67.50	41	65.73	25	68.80	2	66.37
51.	眼窩幅(左)	1	43(右)	24	42.6	7	40.90	9	42.89	49	42.98	37	42.57	2	44.50
52.	眼窩高(左)	1	34(右)	24	34.1	8	34.38	9	33.67	49	33.41	37	33.95	3	35.33
52/51	眼窩示数(左)	1	79.07(右)	23	80.9	6	83.60	9	78.58	49	77.77	37	79.79	2	79.91
54.	鼻　幅	1	25	24	26.5	8	25.90	11	25.73	48	26.21	37	27.32	2	27.00
55.	鼻　高	1	52	24	52.9	8	50.52	12	52.83	49	51.71	37	51.43	3	53.33
54/55	鼻示数	1	48.08	24	50.1	8	51.34	11	48.81	48	50.92	37	53.24	2	50.93
72.	全側面角	1	83	16	83.2	7	80.41	9	83.11	14	82.79	28	83.46	3	81.33
73.	鼻側面角	1	87		—	5	86.36	10	86.50	17	86.29	35	88.00	3	84.67
74.	歯槽側面角	1	73	16	67.0	8	64.53	9	70.78	14	73.93	27	66.00	3	68.67

〔　〕は片側を２倍して求めた推定値

２．四肢骨

(1)大腿骨

まず、大腿骨であるが(表３)、中央周は84mmで、桑島近世人と松之尾中・近世人よりは大きく、クジチ近世人および成岡・西ノ平中・近世人よりは小さく、与論島近代人に近い。骨体中央断面示数は107.69となり、桑島近世人と大差なく、表３では最も大きい方へ属し、近世人としては骨体両側面は後方へよく発達している。また、上骨体断面示数は74.19で、表３中最小値となり、骨体上部には扁平性が認められる。

すなわち、本大腿骨は骨体はあまり太くないが、骨体は後方へやや突出し、骨体上部が扁平である大腿骨である。

表３　大腿骨計測値（男性、右、mm）（Table 3. Measurements and indices of male right femora）

		田原 近世人		樓楷田 近世人（松下・他）		桑島 近世人（立志）		成岡・西ノ平 中・近世人（松下・他）		松之尾 中・近世人（松下）		与論島 近代人（平田）		クジチ 近世人（松下・他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	1	28	1	32	14	26.29	3	28.00	11	26.55	23	26.87	6	27.67(左)
7.	骨体中央横径	1	26	1	28	14	24.66	4	29.00	11	25.64	23	25.83	6	27.00(左)
8.	骨体中央周	1	84	1	98	14	80.61	3	90.33	11	82.64	23	83.96	6	86.17(左)
9.	骨体上横径	1	31		—	14	29.58	4	33.25		—	23	29.61	5	30.80(左)
10.	骨体上矢状径	1	23		—	15	23.01	2	26.00		—	23	24.35	5	24.40(左)
6/7	骨体中央断面示数	1	107.69	1	114.29	14	107.09	3	98.12	11	104.03	23	104.23	6	102.52(左)
10/9	上骨体断面示数	1	74.19		—	14	77.60	2	79.08	14	77.35	23	82.71	5	79.27(左)

(2)脛骨

次に、脛骨であるが(表４)、本人骨の脛骨にはかなり顕著な特徴が認められる。それは、骨体が太く、扁平であるということである。骨体周は85mmで、表４では最大値となり、中央最大径も31mmと、これも最大である。中央断面示数は64.52となり、この示数値は表４では最小値である。大友弥生人の平均値は68.03、古田Ａ古墳人は65.52であることから、本脛骨の中央断面示数は弥生人、古墳人なみの値であるといってもよい。

表４　脛骨計測値（男性、右、mm）（Table 4. Comparison of measurements and indices of male right tibiae）

		田原 近世人（佐伯・他）		桑島 近世人（立志）		成岡・西ノ平 中・近世人（松下・他）		与論島 近代人（平田）		城間 近世人（松下・他）		クジチ 近世人（松下・他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	1	31	19	27.02	1	29(左)	24	28.63	15	28.80	3	28.67(左)
9.	中央横径	1	20	19	20.18	1	23(左)	24	21.09	14	20.29	3	21.33(左)
10.	骨体周	1	85	19	80.36	1	81(左)	24	78.83	14	78.64	3	79.67(左)
9/8	中央断面示数	1	64.52	19	74.89	1	79.31(左)	24	73.95	14	70.17	3	74.87(左)

要　約

長崎県松浦市御厨町田原に所在する田原遺跡の1990年に行なわれた発掘調査で、土壙墓から１体の成人骨が発掘された。長崎県では近世人骨の出土例は少なく、貴重な出土例であり、保存状態も良好であったので、人類学的観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. 本遺跡の土壙墓から出土した人骨は１体で、壮年の男性骨である。
2. 本人骨は近世に属する人骨と推定されている。
3. 頭蓋最大長は174mm、頭蓋最大幅の推定値は〔138mm〕で、頭蓋長幅示数は〔79.31〕となり、頭型は短頭に近い中頭型(mesokran)に属している。
4. 顔高は122mm、上顔高は69mm、中顔幅の推定値は〔106mm〕、ウィルヒョウーの顔示数は〔115.09〕、上顔示数は〔65.09〕となり、広顔傾向が認められる。眼窩示数は79.07(右)となり、中

眼窩に、鼻示数は48.08となり、中鼻に属している。

5．鼻根部は狭く、やや扁平である。

6．歯槽側面角は73度で、歯槽性の突顎傾向は弱い。

7.大腿骨は、骨体はあまり太くないが、骨体両側面は後方へやや突出し、骨体上部は扁平である。脛骨は、骨体が大きく、扁平である。

8．以上のように、本近世人は短頭に近い中頭型を示し、顔面には「広顔」傾向が認められ、鼻根部もやや扁平であったが、歯槽性突顎の傾向は弱いものであった。また、大腿骨は骨体両側面が後方へ発達しており、脛骨は扁平であった。近世人は一般的には中世人的特徴が弱くなり、現代人的特徴が強くなる過程としてその特徴を検討することが可能であろう。本例では四肢骨では古い時代の形質を示しているようであるが、頭蓋に関しては鼻根部の特徴が明確にできなかったこともあり、不明の点が多い。本県での近世人の例数が増加すれば、本例の頭蓋の特徴もより深く検討することが可能になると考えられる。

謝辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた松浦市教育委員会社会教育課の諸先生方に感謝致します。

参考文献

1．藤田恒太郎、1965：歯の話。岩波書店。東京：57-98.

2．平田和生、1958：鹿児島県大島郡与論島島民の下肢骨の研究。人類学研究、5：263－315.

3．広沢正彦、1959：奄美群島与論島住民上肢骨の人類学的研究。人類学研究、6：241－278.

4．Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag, Stuttugart：429-597.

5．松下孝幸、1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨。松之尾遺跡(枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1))：215－228.

6．松下孝幸、石田肇、佐熊正史、用丸英博、1983：成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨。成岡・西ノ平・上ノ原遺跡(鹿児島県埋蔵文化財調査報告書28)：355－382.

7．松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985：長崎県松浦市楼楷田遺跡出土の近世人骨。楼楷田遺跡－松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－(長崎県文化財調査報告書第76集)：191－196.

8．松下孝幸、佐伯和信、弦本敏行、1988：沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財(6)－クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書－：106－140.

9．松下孝幸、分部哲秋、弦本敏行、内藤芳篤、1988：与論島における形質人類学的研究。奄美諸島における日本基層文化とその変容に関する総合的研究〔昭和60年－62年度文部省科学

研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書〕：6－26.
10．松下孝幸、分部哲秋、佐伯和信、小山田常一、1990：沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨。城間古墓群－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査－：75－112.
11．中橋孝博、1987：福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨。人類誌、95：89－106.
12．大山秀高、1956：鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究。人類学研究、3：396－434.
13．立志悟朗、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第1　大腿骨について。熊本医学会雑誌、44：1092－1115.
14．立志悟朗、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第2　下腿骨について。熊本医学会雑誌、44：1116－1129.
15．脇　達也、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究。熊本医学会雑誌、44：1031－1091.

表５　脳頭蓋計測値(Calvaria)　（単位：mm）

		田　原 １号人骨 男性
1.	頭蓋最大長	174
8.	頭蓋最大幅	〔138〕
8/1	頭蓋長幅示数	〔79.31〕
26.	正中矢状前頭弧長	122
29.	正中矢状前頭弦長	108
29/26	矢状前頭示数	88.52

〔　〕は片側を２倍して求めた推定値

表７　下顎骨計測値（Mandible）　（単位：mm、度）

			田　原 １号人骨 男性
66.	下　顎　角　幅		106
67.	前　下　顎　幅		49
68.	下　顎　長		74
69.	オトガイ高		38
69(1).	下顎体高	（右）	35
		（左）	34
69(2).	下顎体高	（右）	27
		（左）	28
70.	枝　　高	（右）	53
70(1).	前　枝　高	（右）	66
70(2).	最小枝高	（右）	54
70(3).	下顎切痕高	（右）	13
71.	枝　　幅	（右）	32
71a.	最小枝幅	（右）	32
71(1).	下顎切痕幅	（右）	36
79.	下顎枝角	（右）	119
69(2)/69	下顎高示数	（右）	71.05
		（左）	73.68
71/70	下顎枝示数	（右）	60.38
71a/70(2)	下顎枝示数	（右）	59.26
70(3)/71(1)	下顎切痕示数	（右）	36.11

表９　大腿骨計測値(Femur)　（単位：mm）

		田　原 １号人骨 男性	
		右	左
6.	骨体中央矢状径	28	27
7.	骨体中央横径	26	—
8.	骨体中央周	84	—
9.	骨体上横径	31	—
10.	骨体上矢状径	23	—
15.	頸垂直径	29	30
16.	頸矢状径	20	21
17.	頸　　周	82	86
18.	頭垂直径	41	—
6/7	骨体中央断面示数	107.69	—
10/9	上骨体断面示数	74.19	—
16/15	頸横断面示数	68.97	70.00

表６　顔面頭蓋計測値（Facial skelton）
（単位：mm、度）

		田　原 １号人骨 男性
41.	側　顔　長	73(右)
46.	中　顔　幅	〔106〕
47.	顔　　高	122
48.	上　顔　高	69
47/46	顔示数（Ｖ）	115.09
48/46	上顔示数（Ｖ）	65.09
51.	眼窩幅（右）	43
52.	眼窩高（右）	34
52/51	眼窩示数（右）	79.07
54.	鼻　　幅	25
55.	鼻　　高	52
54/55	鼻　示　数	48.08
60.	上顎歯槽長	53
61.	上顎歯槽幅	69
62.	口　蓋　長	44
63.	口　蓋　幅	41
64.	口　蓋　高	15
61/60	上顎歯槽示数	130.19
63/62	口蓋示数	93.18
64/63	口蓋高示数	36.59
72.	全側面角	83
73.	鼻側面角	87
74.	歯槽側面角	73

〔　〕は片側を２倍して求めた推定値

表８　鎖骨計測値（Clavicula）（単位：mm）

		田　原 １号人骨 男性	
		右	左
4.	中央垂直径	10	11
5.	中央矢状径	12	13
6.	中　央　周	36	39
4/5	鎖骨断面示数	83.33	84.62

表10　脛骨計測値(Tibia)
（単位：mm）

		田　原 １号人骨 男性
		右
8.	中央最大径	31
9.	中央横径	20
10.	骨　体　周	85
9/8	中央断面示数	64.52

表11　形態小変異(Non-metric crania variants)

	田原 1号人骨 男性 右	左
1. Medial palatine canal	—	—
2. Pterygospinous foramen	—	／
3. Hypoglossal canal bridging	／	／
4. Clinoid bridging	／	／
5. Condylar canal absent	／	／
6. Foramen of Huschke(>1mm)	—	／
7. Jugular foramen bridging	／	／
8. Precondylar tubercle	／	／
9. Supra-orbital foramen	—	／
10. Accesory infraorbital foramen	／	／
11. Zygo-facial foramen absent	—	／
12. Aural exostosis	—	／
13. Metopism	—	
14. Os incae	／	
15. Ossicle at the lambda	／	
16. Parietal notch bone	—	／
17. Transverse zygomatic suture(>5mm)	／	／
18. Asterionic ossicle	／	／
19. Occipitomastoid ossicle	—	／
20. Epipteric ossicle	／	／
21. Frontotemporal articulation	—	／
22. Biasterionic suture(>10mm)	／	／
23. Mylohyoid bridging	—	—
24. Accessory mental foramen	+	—
25. Mandibular torus	—	—

〔present：＋, absent：—, unobservale：／〕

表12　歯の計測値(tooth)　(mm)

			田原遺跡 1号人骨 男性 右	左
頬(唇)舌径	上顎	I_1	7.37	7.25
		I_2	6.63	6.72
		C	7.71	7.79
		P_1	9.24	9.07
		P_2	8.76	8.76
		M_1	11.91	11.82
		M_2	11.82	11.70
		M_3	—	—
	下顎	I_1	6.16	6.18
		I_2	6.15	6.35
		C	7.72	7.65
		P_1	8.12	8.01
		P_2	8.49	8.45
		M_1	11.27	11.36
		M_2	10.70	10.46
		M_3	10.22	9.98
近遠心径	上顎	I_1	9.32	9.28
		I_2	7.27	7.58
		C	7.66	7.51
		P_1	7.40	7.21
		P_2	6.61	6.64
		M_1	11.52	11.54
		M_2	9.87	8.66
		M_3	—	—
	下顎	I_1	5.97	6.14
		I_2	6.16	6.13
		C	6.99	6.92
		P_1	6.95	6.83
		P_2	7.29	7.16
		M_1	12.24	11.98
		M_2	10.98	10.58
		M_3	11.08	10.73

表13　齲蝕(Caries of the teeth)

		田原遺跡 1号人骨 男性 右	左
上顎	I_1	○	○
	I_2	○	○
	C	○	○
	P_1	○	○
	P_2	○	○
	M_1	○	○
	M_2	○	○
	M_3	／	／
下顎	I_1	○	○
	I_2	○	○
	C	○	○
	P_1	○	1
	P_2	○	○
	M_1	○	○
	M_2	1	○
	M_3	1	1

〔1~4：present, ○：absent, ／：unobservable〕

A Human Skeletal Remain Excavated from the Tabaru Site, Matsuura City, Nagasaki Prefecture.

Kazunobu SAIKI, Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Yoshiyuki ORIHARA
[Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine]
Jouichi OYAMADA
[Department of Oral Anatomy, Nagasaki University School of Dentistry]

Keywords: Nagasaki Pref., Edo skeleton, Male, Wide face, Flat tibia

A human skeletal remain dating the Edo Period were excavated from a burial pit at Tabaru site, Matsuura city, Nagasaki Prefecture, in 1990.

An anthropological study of the human skeletal remain was conducted.

The Tabaru skeleton is presumed to be young adult male.

The length-breadth index is [79.31], mesocranic. The middle facial breadth is [106] mm, the facial height is 122mm, the upper facial height is 69mm, the facial index is [115.09] (V.), the upper facial index is [65.09] (V.). This skeleton has a high and wide face and a narrow nasal breadth. The femur is pilasteric and the tibia is flat.

There are not aural exostoses in this individual.

V　おわりに

田原遺跡の本調査については前述のとおりである。遺跡は主要部分が盛土にて保存されることになっているが，今回の調査は設計変更できず掘削する部分という範囲が限られた調査であり，集落の一部分を発掘調査したにすぎない。今回の調査で知り得た範囲内で集落全体について若干の考察を述べたい。

前述のように，遺物から考察する限りではこの集落は古墳時代を中心としており，集落として生活が続けられていたものと思われる。これは東側に大きく開けた平野部を利用できたこと，遺跡のある丘陵端部の日照・水利などの生活条件の良さもその理由として考えられる。しかし，縄文時代においては土器の出土がなく石器のみでそれも石鏃が多い点から狩猟を最大限の目的とした場所として利用していたと思われる。それが弥生時代及び古墳時代には東側に開けた平野部を有しているため、水田地として活用することによって集落としてのまとまりができたと思われる。しかし，遺跡内からの遺構等の検出からはあまりにも貧弱であるため，掘立柱の建物は日常生活の拠点となるものではなく倉庫的なものとして利用していたと思われる。

この田原遺跡が最大限に活用された時期は，平成元年度の確認調査の結果を含めて考えてみると，A地点が営まれた時期は土師器・須恵器の出土が多いことから，須恵器の杯蓋・甕の器形の特徴などから6世紀前半から6世紀中頃までと，6世紀後半代の一定期間に営まれた集落であると思われる。この遺跡の北方1㎞の地点には7世紀後半代の群集墳である小嶋古墳群が所在している。被葬者の居住地は周辺の丘陵地帯が考えられ，また稲作に適した後背地を随時，竜尾川の下流域でも田原遺跡周辺から下方へと開発を行わせた数世代の豪族の墳墓地として小嶋古墳群があると考えられるのではなかろうか。今後は小嶋古墳群を含む竜尾川下流域一帯及び大崎地区周辺の調査に期待したいと思う。

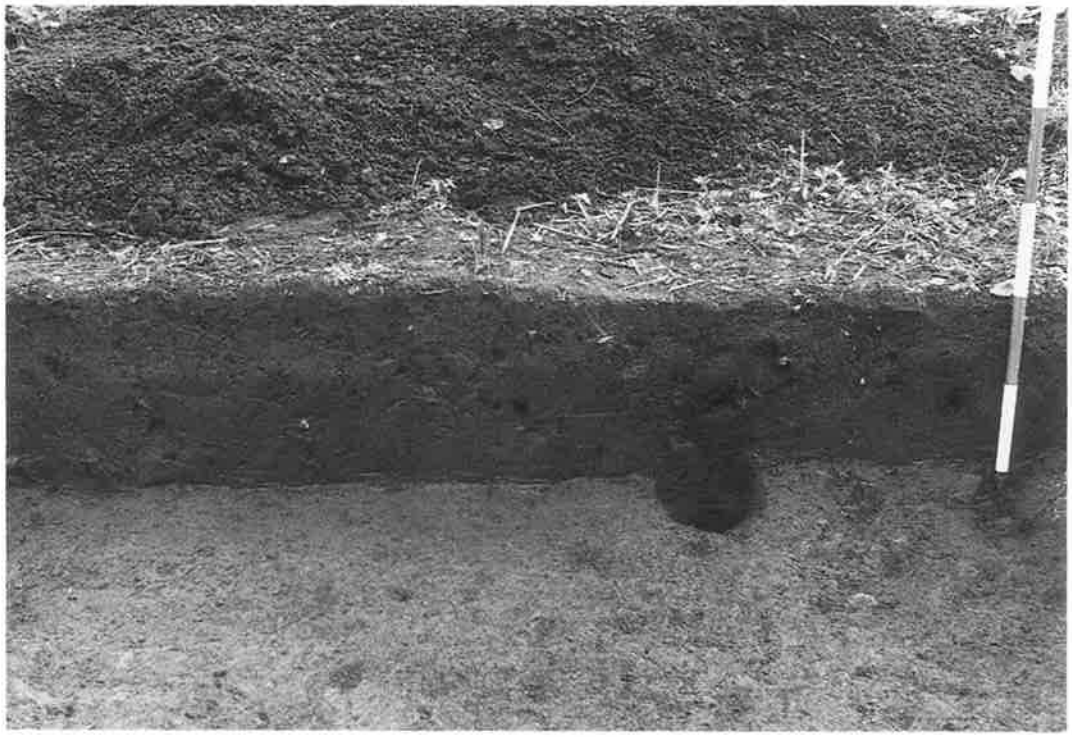
ところで，今回の報告にあたっては，検出した遺構，そして出土遺物その他について詳細な分析・検討を加えて考察すべきであったが，調査整理の時間が制約されたこと，また諸般の事情，さらに筆者の浅学，整理力不足のため十分な報告をなすことができなかったことは自からをして憂慮するに堪えない。今後の精進を約束して結びとしたい。

なお，末後ではありますが，長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸氏，佐伯和信氏ほかの方々には，田原遺跡出土の人骨について分析・報告の御足労をおかけしました。ここに記して感謝の意を表します。

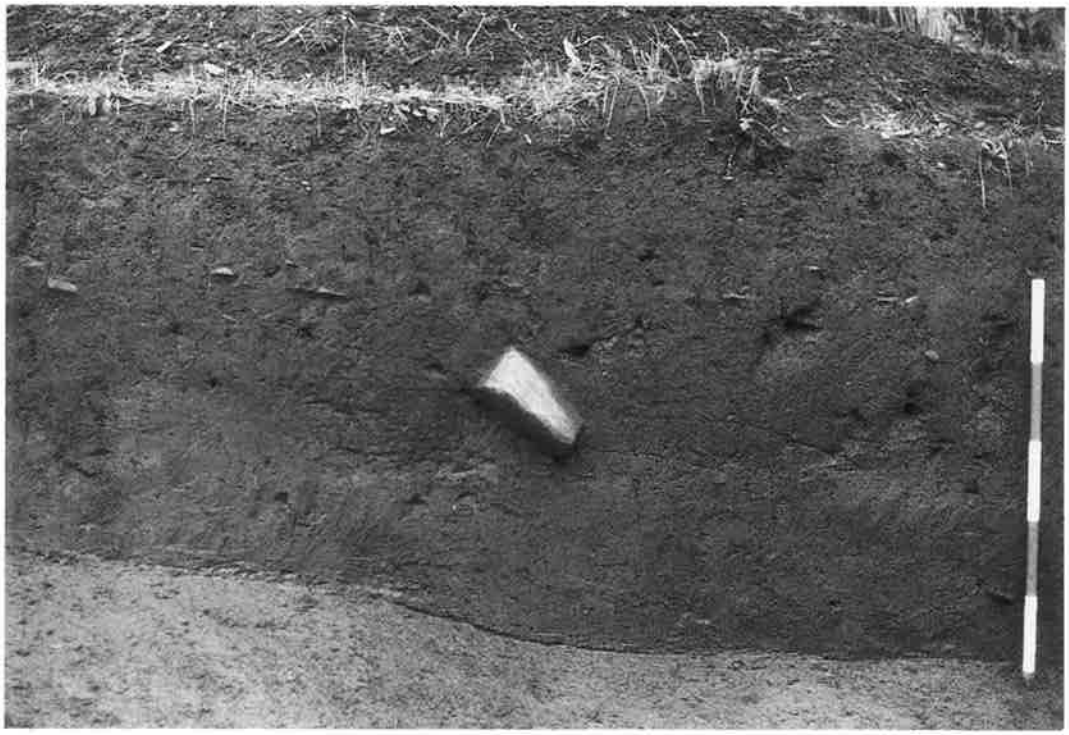
図　　版

遺跡遠景（北より）

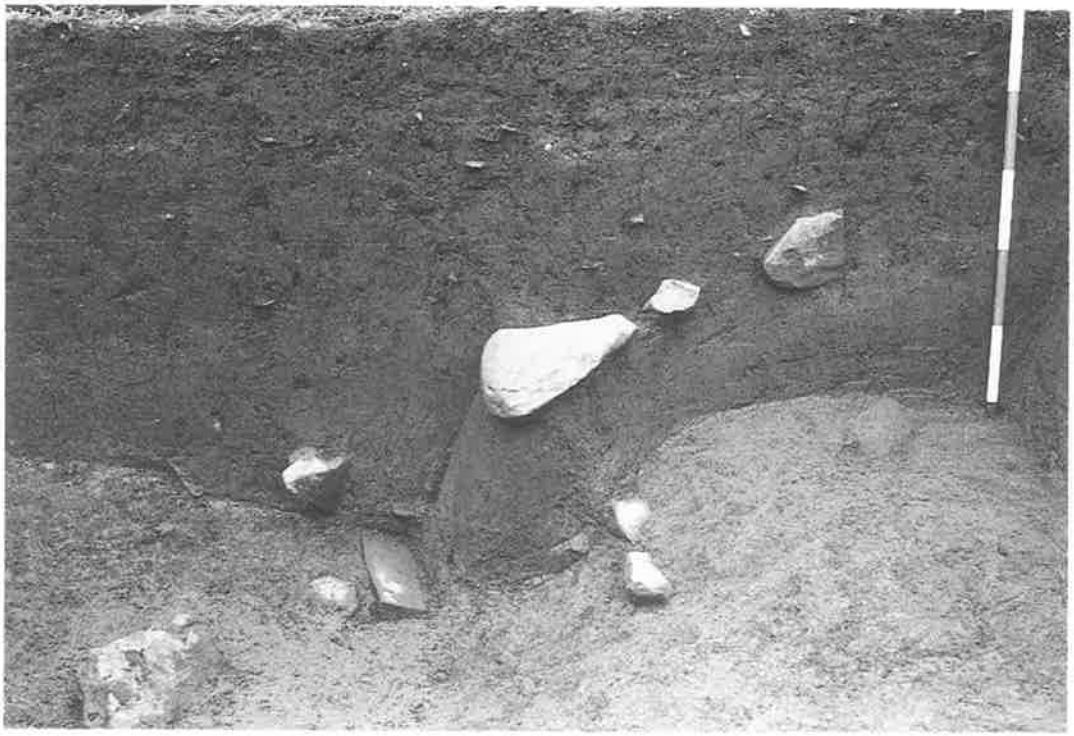
遺跡遠景（東より）



A 5 区南壁土層



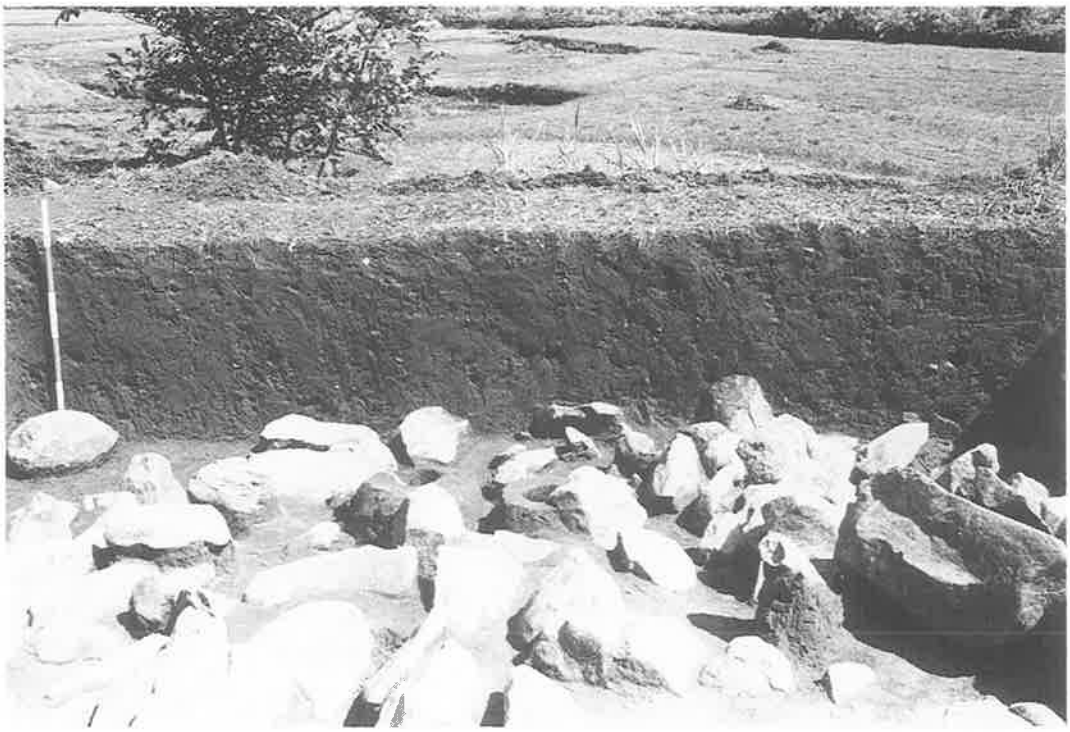
B 9 区西壁土層



B 9 区南壁土層

B 9 区北東壁土層

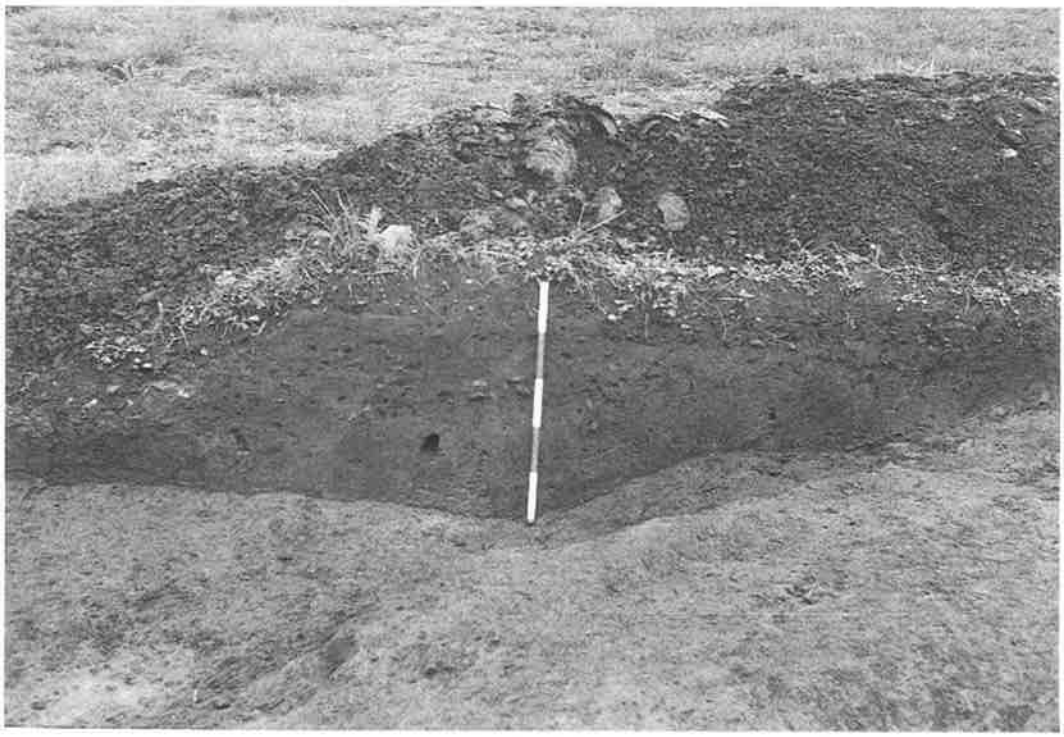
図版 4



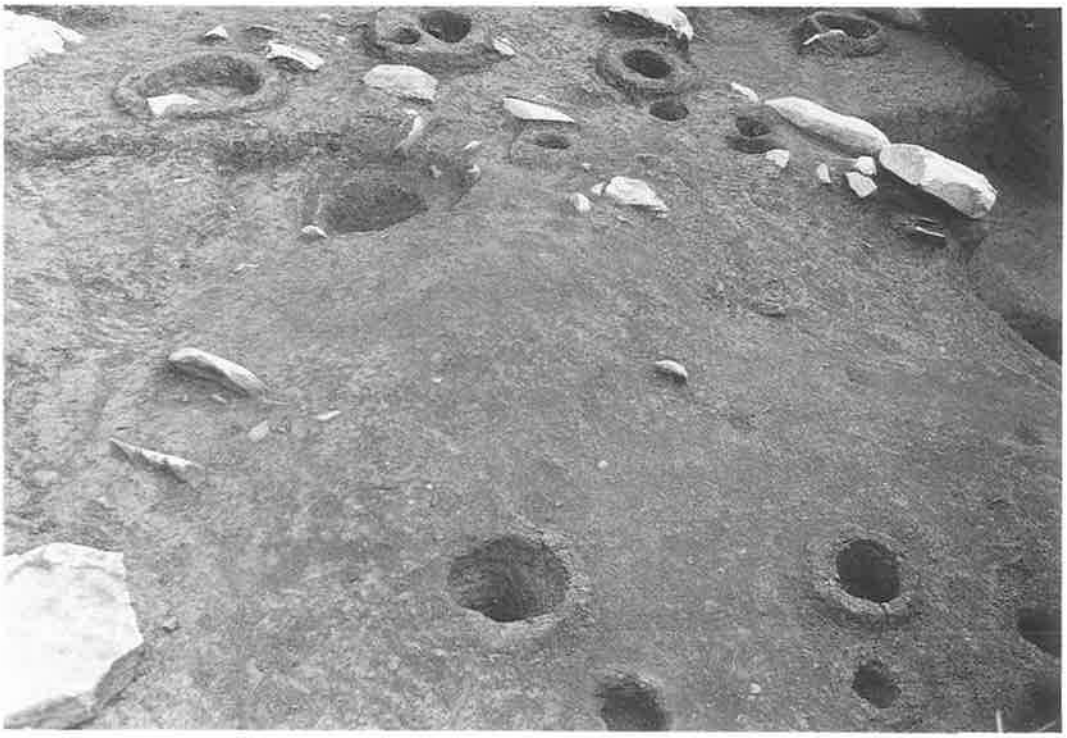
C 4 区東壁土層

C 4 区北壁土層

C 7 区東壁土層



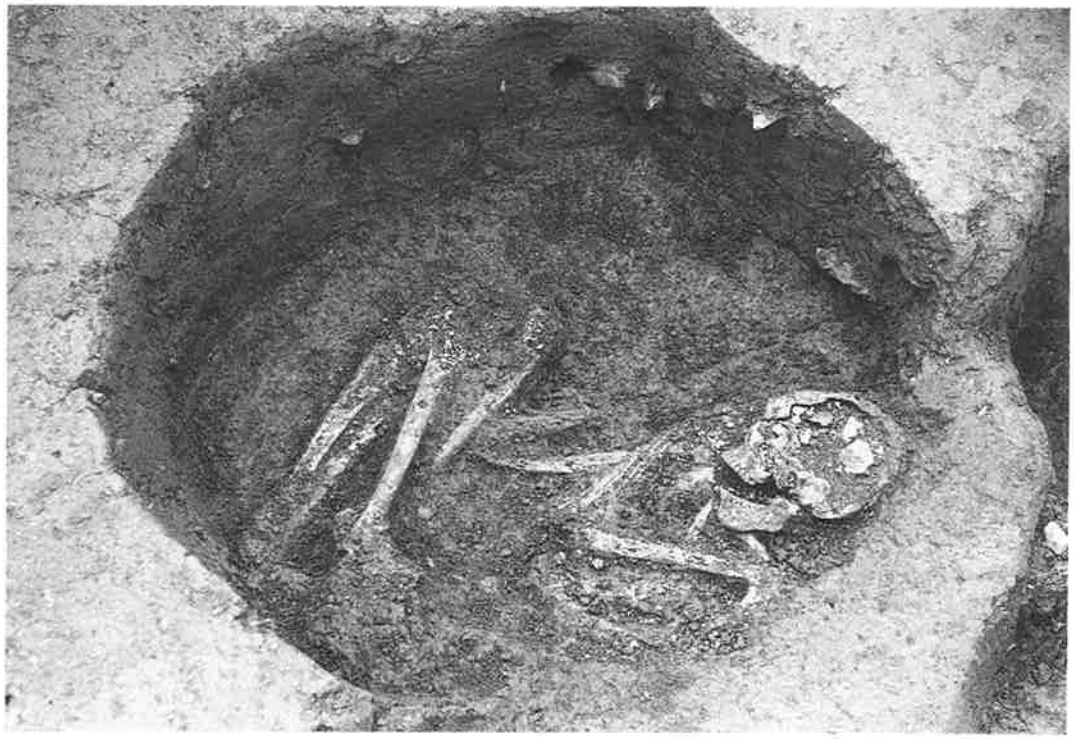
B 地点南壁土層



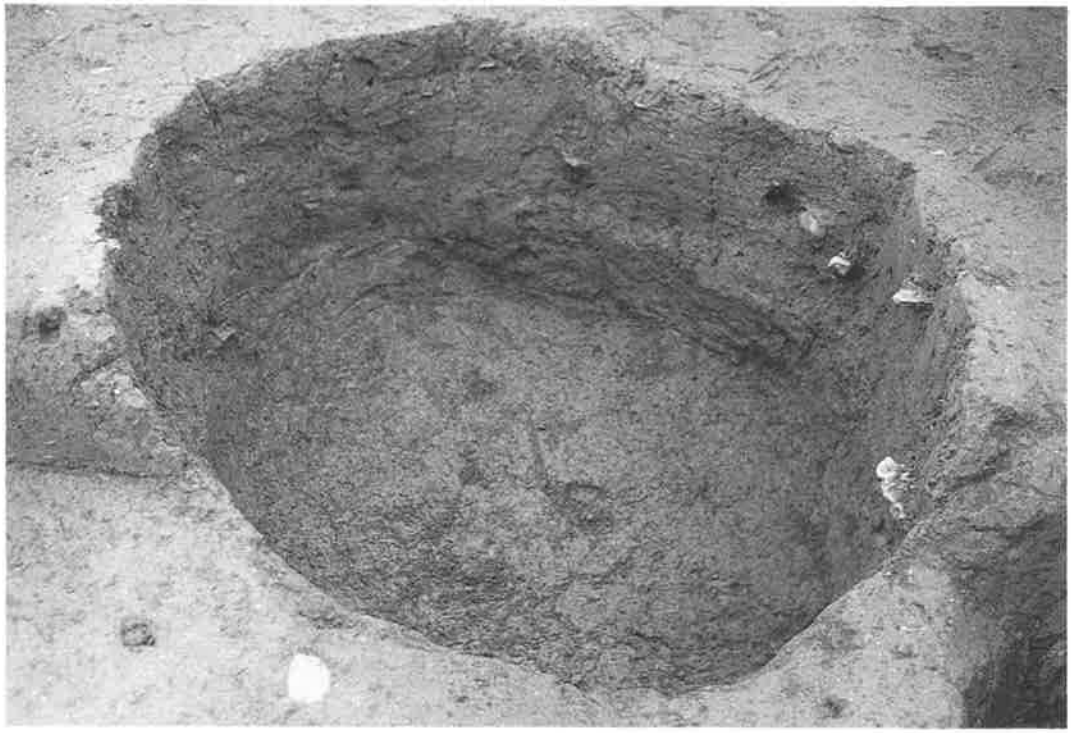
柱穴検出状況（B･C 8 区）

柱穴及び不明土壙（C 5 区）

近世墓検出状況（東より）

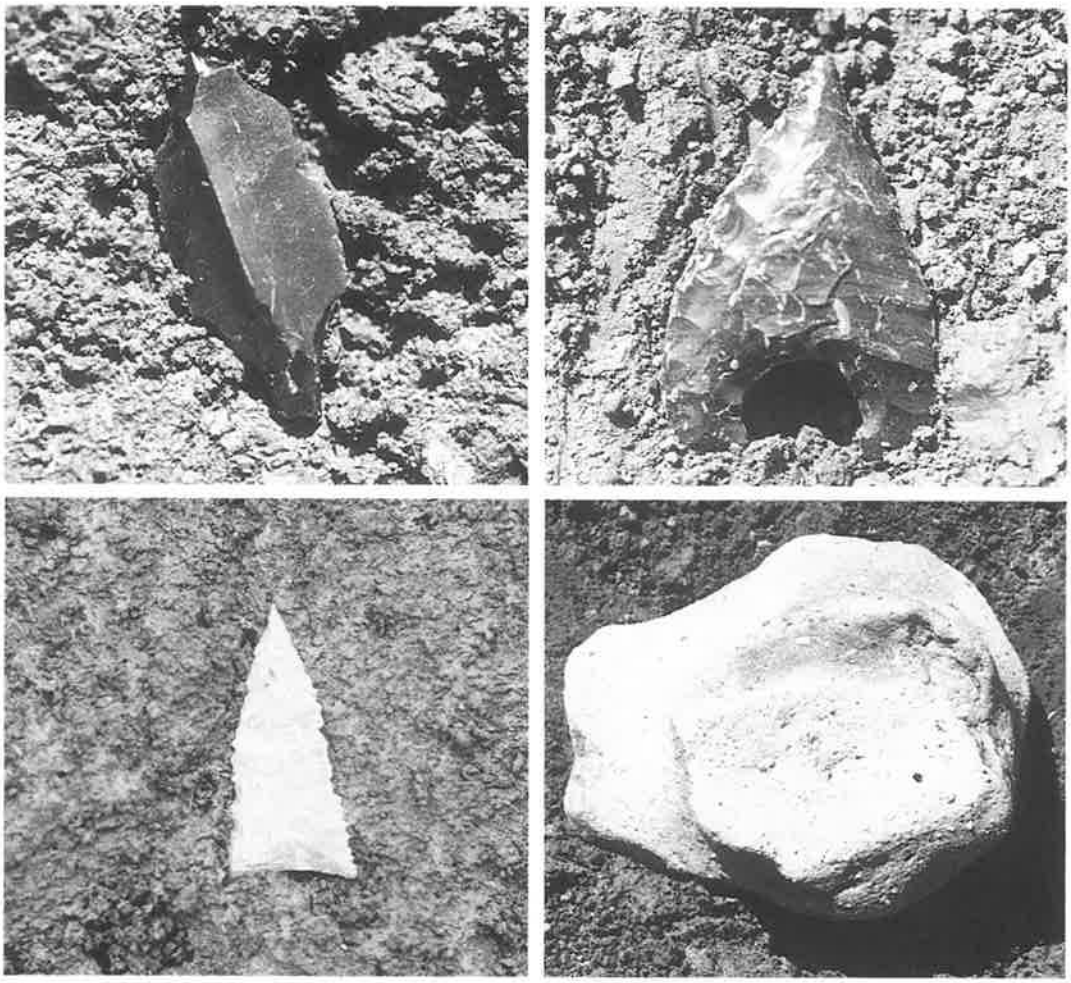


近世墓検出状況（東より）



近世墓土壙（東より）

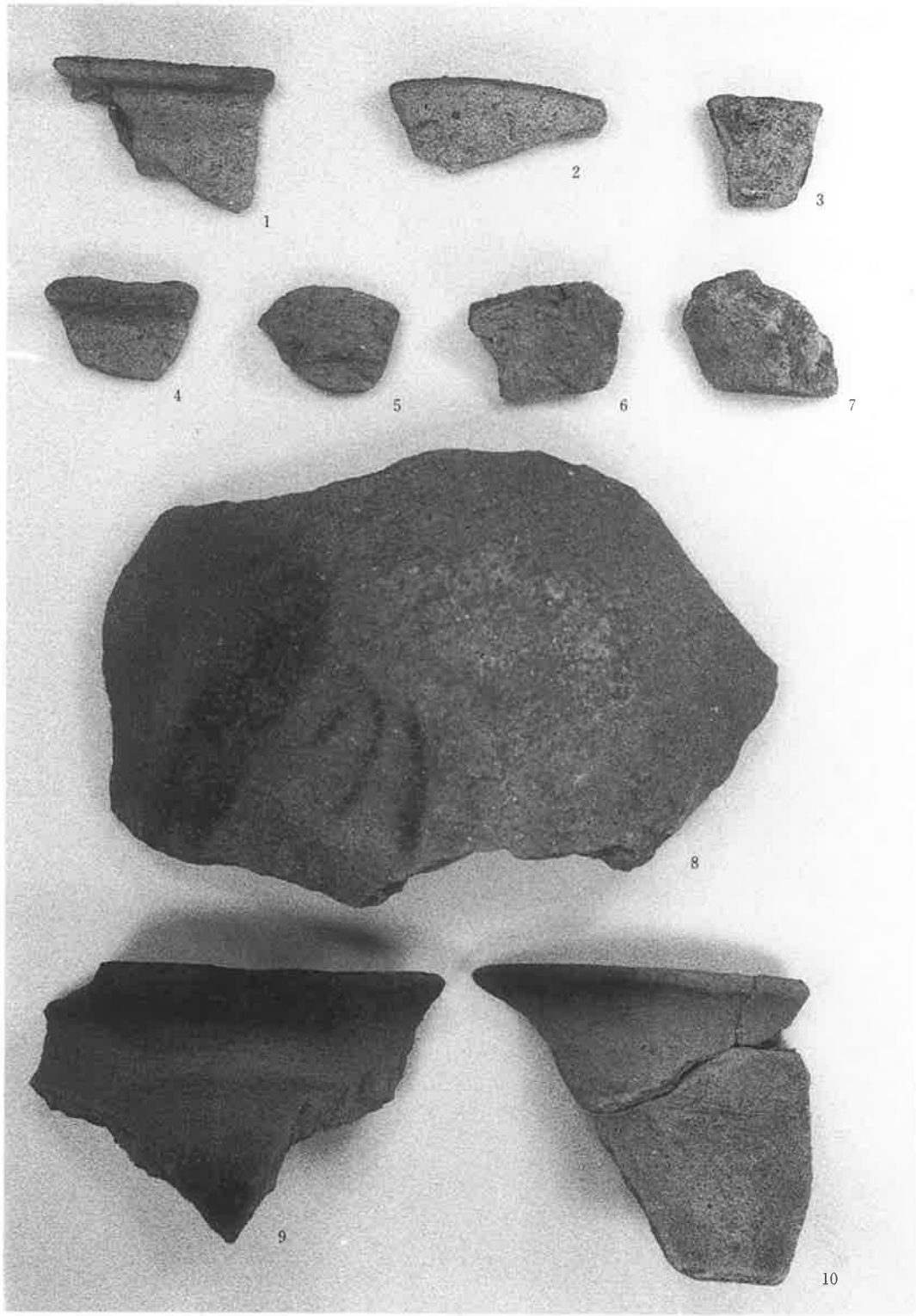
近世墓調査風景



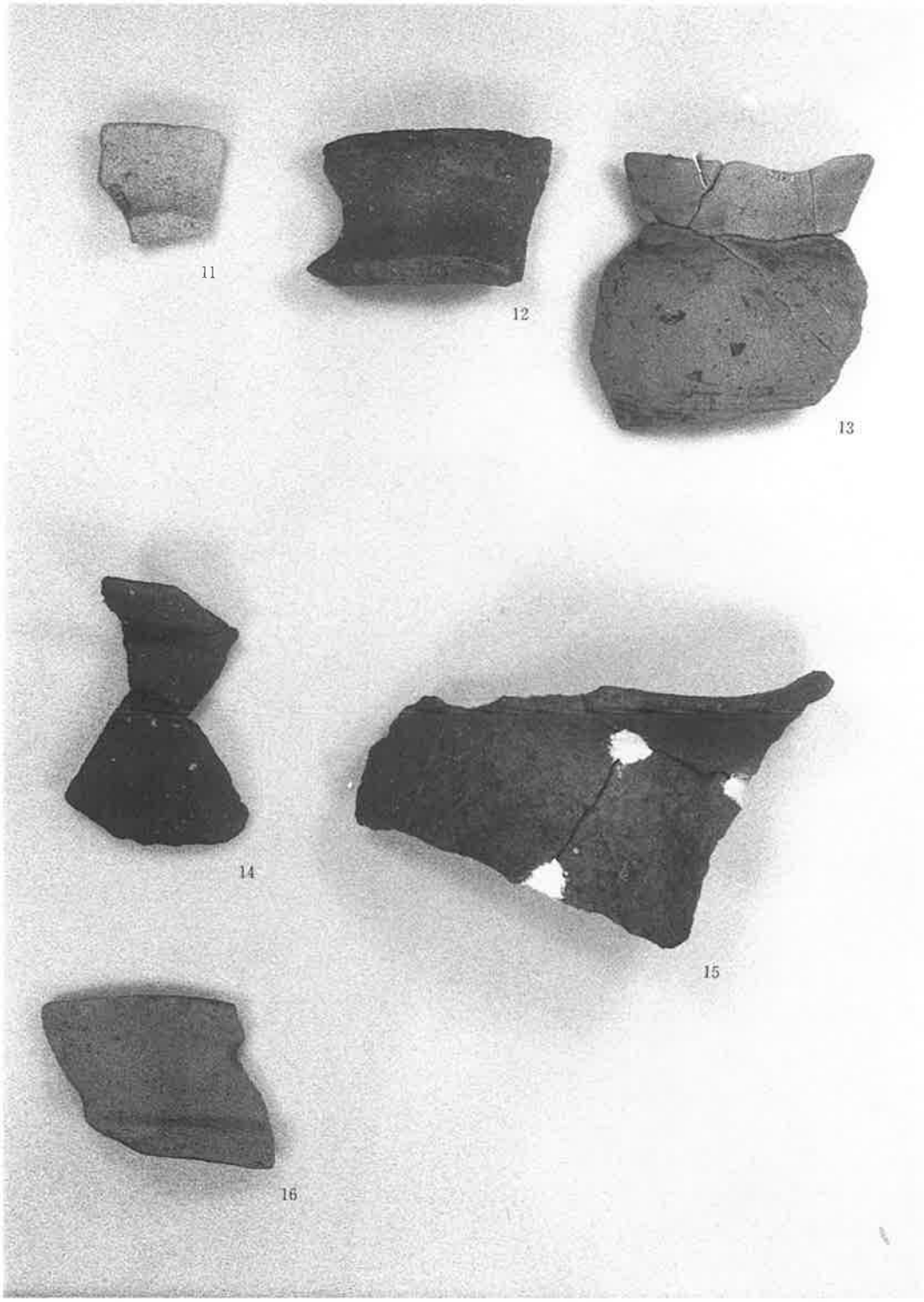
遺物出土状況

調査風景

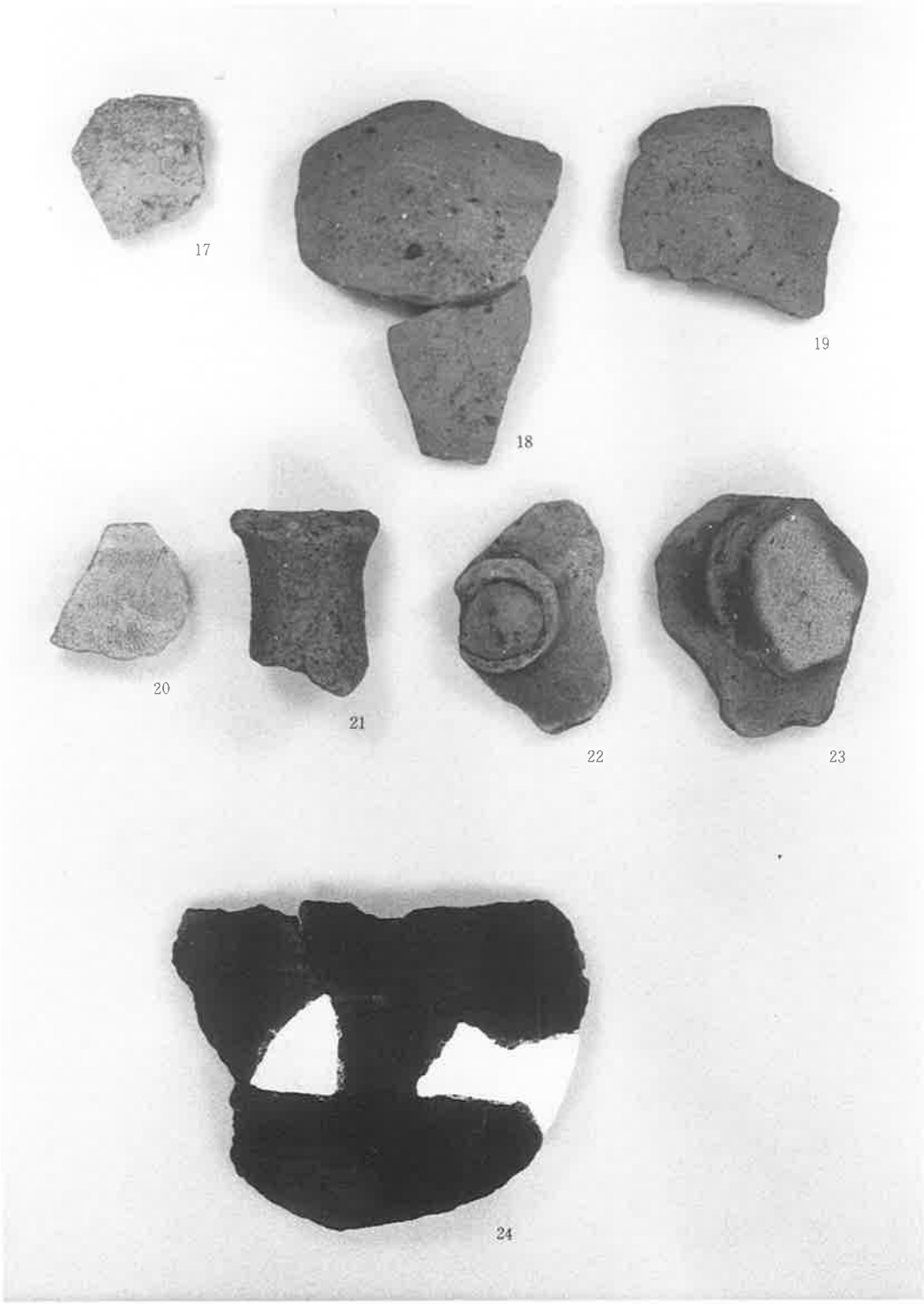
出土遺物（1）



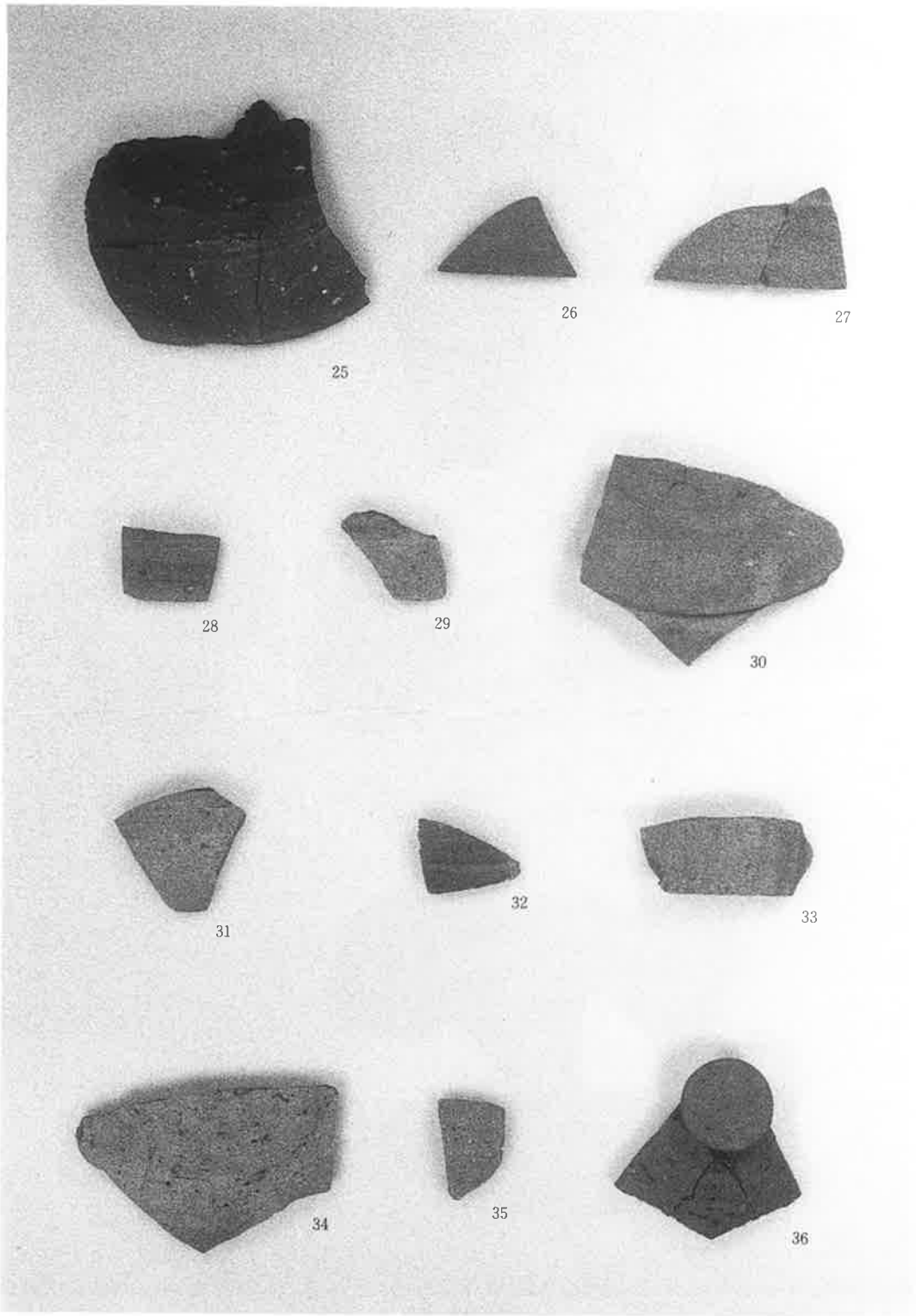
出土遺物（2）



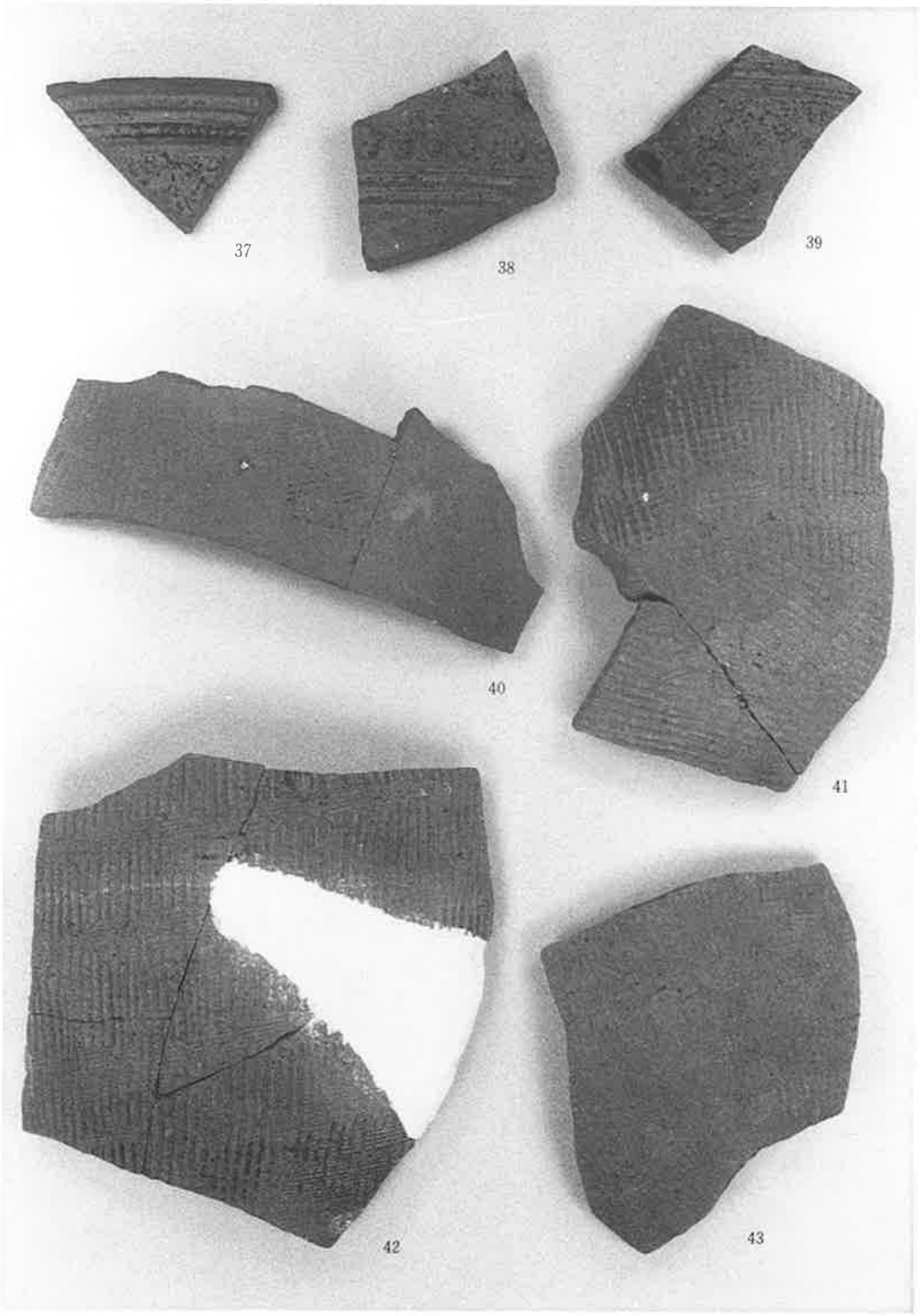
出土遺物（3）



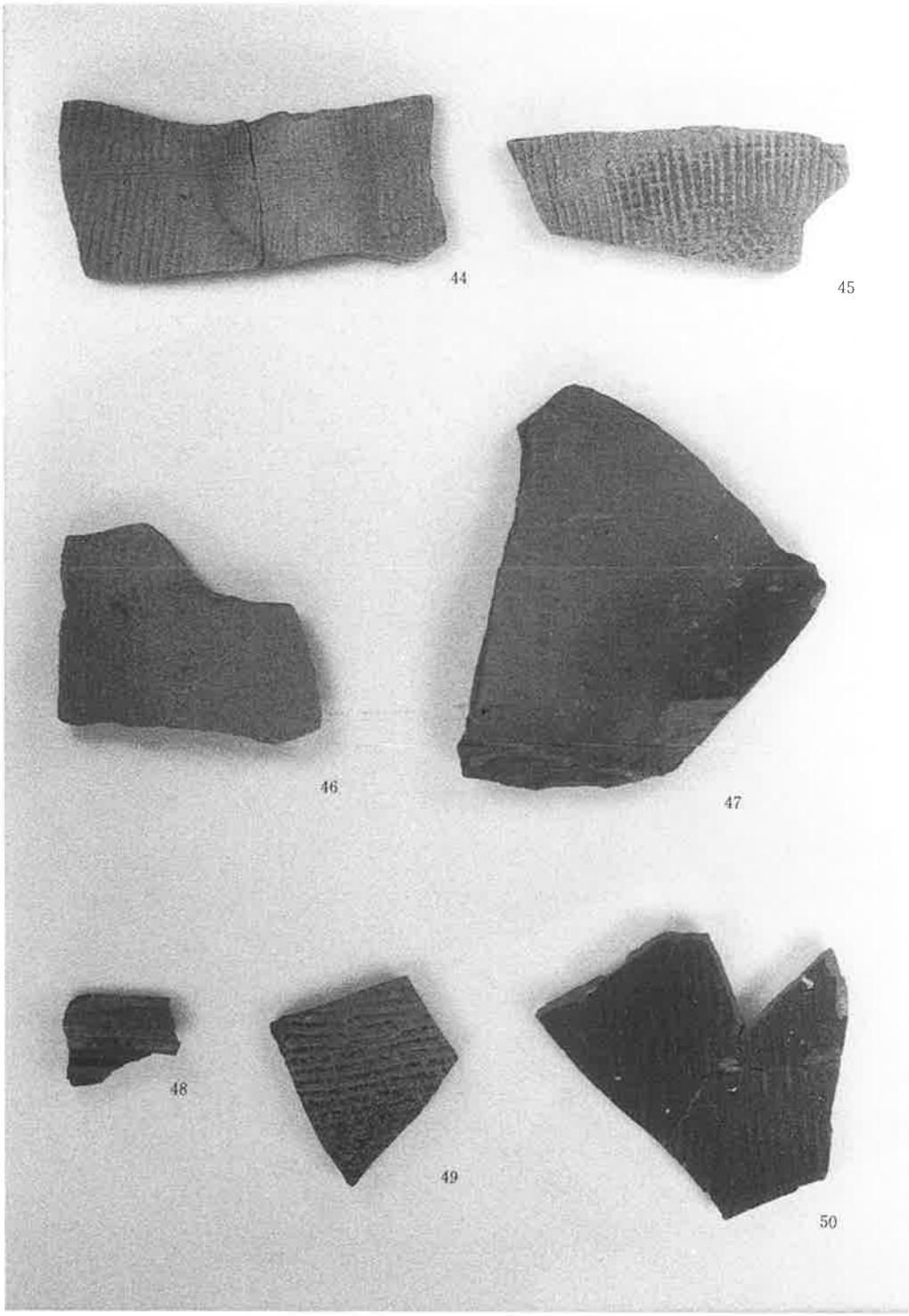
出土遺物（4）



出土遺物（5）



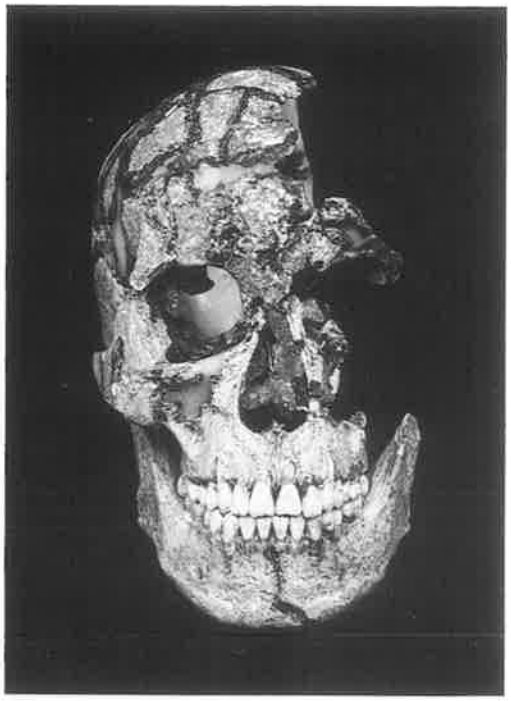
出土遺物（6）



出土遺物（7）

出土遺物（8）

頭蓋上面(Superior view of the skull)

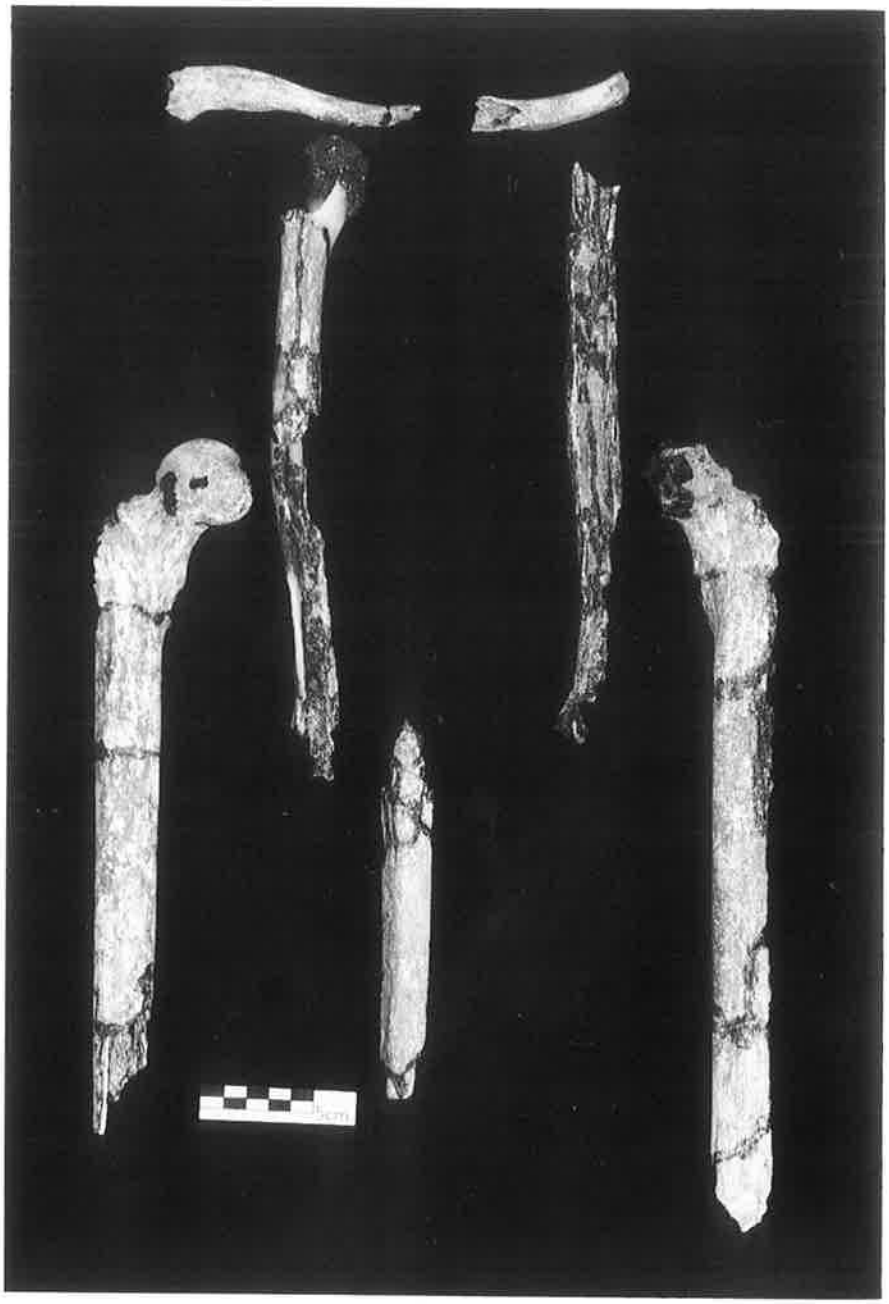


頭蓋前面(Frontal view of the skull)

頭蓋側面(lateral view of the skull)

田原人骨(男性、壮年)

(Tabaru Skeleton、young adult male)



田原人骨(男性、壮年)ー四肢骨

(Tabaru Skeleton、limb bones、young adult male)

松浦市文化財調査報告書　第10集
田　原　遺　跡
平成３年３月31日　発行

発　行　松浦市教育委員会
長崎県松浦市志佐町里免365
印　刷　㈲エスケイ印刷